【字解】〔一〕岳州賈司馬六丈　岳州は今の湖南岳州府、賈司馬は賈至なり、作者至が汝州にゆくを送る詩あり、（卷六の五二九頁）乾元二年三月九節度の師相州に敗るるや至は汝州より襄鄧に奔れり、その罪によりて岳州の司馬に貶せられたり、六は排行、丈は年長者に對する敬稱、丈人の略語。〔二〕巴州嚴八使君　巴州は四川の重慶府、嚴八使君は嚴武なり、八は排行、使君は刺史の敬稱、武は房琯が事に坐せられ乾元元年六月に巴州の刺史に貶せられたり。〔三〕閣老　賈は中書舍人、嚴は給事中、之を敬して稱す（上卷卷五、四五四頁をみよ）。〔四〕衡岳　湖南省衡州府衡陽縣にある名山、名山をあげて賈至の居る岳州を表す。〔五〕啼猿　猿聲をいふ。〔六〕巴州　嚴武の居る地をいふ。〔七〕鳥道　鳥のかよふみち、山の高き處をさす、巴州は山地なればかくいふ。〔八〕故人　舊友賈嚴をさす。〔九〕不利　身に利福なきこと。〔一〇〕謫宦　つみせられて官途に仕へてをる。〔一一〕兩二人ともに。〔一二〕悠然　はるかなる貌、我とは遠くへだたりてをるをいふ。〔一三〕開闢乾坤正　肅宗が天下を整頓されしことをいふ、開闢はくらやみをひらくこと、正とは今まで賊亂ありて天地ゆがみまがれるをととのへてまつすぐになほすをいふ。〔一四〕榮枯雨露偏　偏はかたよる、一方へ多くかかるをいふ、榮枯は人の身のうへの二面をいふ、亂をさまりてのち人によりて榮えるものあり、枯れてしぼむものあり、榮ゆるは雨露を多くうくるに由り、枯るるは雨露をすこしくうくるに由る、賈嚴の二人が官を貶せらるるは枯の側なり。〔一五〕長沙才子遠　漢の賈誼が故事、賈誼は洛陽の才子と稱せられしが文帝に罪せられて遠く長沙へながされたり、今同姓の故事を借りて賈至がことをいふ。〔一六〕釣瀨客星懸　後漢の嚴光、字は子陵が故事、光は光武帝の友人にて一夜帝と共に臥し足を帝の腹に加ふ、太史、客星・帝座を犯すこと甚だ急なりと奏せりと、光は天上にては客星に當る人なり、光は帝に仕へず浙江嚴州府桐廬縣の富春山に隱れて釣を垂れたり、其の釣りし處を嚴陵瀨といふ、釣瀨は嚴陵瀨をさす、此句また同姓の故事を借りて嚴武がことをいふ。〔一七〕憶昨　作者往年のことを追憶す。〔一八〕趨行殿　趨は朝廷に於ける歩容なり、すこしくあゆみをはやめこまたにあるく、行殿は天子の御旅の御所、これは肅宗の鳳翔の行在所をさしていふ。〔一九〕殷憂　さかんなるうれひ。〔二〇〕捧御筵　むしろをささぐといふは拾遺の官となりおそば近く仕へしことをいふ。〔二一〕討胡愁李廣　胡は安祿山の賊軍をさす、李廣は漢の武帝の時の名將、今借りて哥舒翰にあつ、愁とは翰賊のために敗れしを以てしかいへり。〔二二〕奉使待張騫　張騫は漢の武帝の時使者となりて始て西域諸國との交通を開きし人、奉使とは使命を奉ずるをいふ、此句は唐より回紇吐蕃へ使者をやりて援兵を求めしをいふ。〔二三〕無復雲臺仗　雲臺は宮中の高き臺殿をさしていふ、仗は儀仗、儀式にあたりてたてならぶるほこはたの類、仗無しとは或は云ふ、行在所のことなれば昔日の盛なる仗なきをいふと、又或は云ふ、玄宗の田奔せしをいふと、今前説に從ふ。〔二四〕虛修水戰船　漢の武帝雲南地方を伐たんとして其地に滇池ありときき長安に昆明池をうがちて水戰を習はす、虛修とはむだに船の用意をなせしをいふ、此の句或は云ふ、長安に兵備をしながら賊軍に破られしをいふと、又或はいふ、修船は吐蕃にそなふるなりと、今前説に從ふ。〔二五〕蒼茫　茫漠たる貌、ひろく見さかひのつかぬさま。〔二六〕城七十　戰國の時、燕が齊を攻めて七十餘城を取りしこと、借りて祿山が河北二十餘郡を陷れしことに充つ。〔二七〕流落　ちりぢりになること。〔二八〕劍三千　趙の文王、劍を喜び、劍客の來る者三千餘人ありしといふこと「莊子」に見ゆ、借りて官軍の武士にあつ、或は云ふ、此句「越絕書」に見えたる吳王闔閭が故事を用ふ、闔閭虎邱に葬らる、扁諸の劍三千あり、流落は散落の義、三千の劍が散落すとは長安の陵墓が發掘され土中の劍が人間にいづるをいふなりと。これも一説なれども今從はず。〔二九〕畫角　彩色したるつのぶえ、官軍のふきならすもの。〔三〇〕秦晉　陝西省、山西省の地。〔三一〕旄頭　星の名、また昴といふ、妖星にして兵亂の象ありといふ。〔三二〕俯澗瀝　俯とは俯して下を照らすをいふ、澗瀝は洛陽附近にありて洛水にそそぐ二つの川の名。澗水は新安縣の南白石山より出で東南流して洛に入り、瀝水は穀城縣の北山より出で東して偃師縣を過ぎて洛に入る。〔三三〕小儒　作者自らいふ。〔三四〕董卓　後漢末長安に入りて暴行をなせし者、卓のち呂布に殺さる。〔三五〕有識　識見あるもの、作者暗に自ら比す。〔三六〕苻堅　東晉の時長安地方に據りし夷種、堅はのちに姚萇に殺さる、董卓・苻堅は安祿山・史思明に比す。〔三七〕浪作　みだりになす、作者謙遜してかくいふ。〔三八〕禽塡海　赤帝の女、東海に溺れて死す、化して鳥となる、精衞と名づく、この鳥西山の木石を取りて海をうづめんとす、事は「山海經」に見ゆ、蓋し鳥の意は海をうづむることによりて自己を溺らしたるものを絕滅せんとするなり、此句は作者賊軍を絕滅せんとの念を抱きしかもその實效なきをいふ。〔三九〕那將血射天　那は「何ぞ」なり、とがむる言葉なり、將血は「血囊をもて」の義、むかし殷の天子に帝乙といふものあり、偶人（にんぐう）をつくりて天神といひ、之と博（かけごと）し天神に代りて之を爲す、天神勝たざれば革の囊に血を盛り仰いで之を射、之を天を射ると稱せしといふ、事は「史記」殷本紀に見ゆ、此句は賊軍が無法にも唐の天子に向て弓をひくこと

寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻

をあてていふ。【四〇】萬方　諸地方の人々。【四一】助順　順は義理にしたがふもの、即ち官軍をさす、賊軍は逆なり。【四二】一鼓氣無前　「左傳」に夫戰勇氣也　一鼓作レ氣　とみゆ、一鼓とはひとたび進軍の太鼓をうちならすこと、氣は勇氣、無前は眼中に前敵を無視すること。【四三】陰散　陰は陰氣。【四四】陳倉北　陳倉は陝西鳳翔府寶雞縣の古名、陳倉の北とは鳳翔の地方をさす。【四五】晴曛　太陽の晴れたる光りのにほふをいふ。【四六】太白　山の名、鳳翔府郿縣に屬す、武功縣の南にあたる、鳳翔近地の名山をあぐ。【四七】亂麻　多ささま。【四八】屍積衞　屍は賊軍のしかばね、衞は衞州、乾元元年郭子儀兵を引いて河をわたり、東して獲嘉に至り賊將安太清を破り、更に衞州を圍み、衞州に來援せる賊將安慶緒が軍七萬を破る。【四九】破竹勢　洗兵行（上卷卷六、六三一頁）を見よ、官軍の猛勢をいふ。【五〇】燕　祿山の根據地范陽地方をさす、むかしの燕國の地なり。【五一】法駕　天子の正式のおのりもの、肅宗の長安への還幸は至德二載十二月にあり。【五二】雙闕　宮城正門の左右の小門。【五三】王師　官軍。【五四】下八川　下とは八川の流る地方へ降りてきたことをいふ、行在所は鳳翔にありてその地形高し、故に「下る」といふ、八川は關中の八つの川、（上卷卷五、五〇六頁を見よ）。【五五】霑　君のめぐみの露にうるほふ。【五六】奉引　前導して車を引くこと、作者拾遺として肅宗に扈從して長安にかへれり。【五七】佳氣　めでたき氣、帝王勃興の氣をいふ。【五八】拂　こちらが佳氣を拂ふなり。【五九】周旋　立ちながら身體を一回轉せしむること、（體操の「まはれ右」のごとし）、朝廷に於ける動作の樣子なり、或は云ふ、氣がめぐりて散ぜざるなりと、又、賈嚴とともに同仕回翔する義ともみらるべし、今並に取らず。【六〇】貔虎　猛獸の名、護衞の武士をいふ、詩經に如レ虎如レ貔の句あり。【六一】開金甲　開は蓋し耀光のあらはれいづるをいふ、金はかれにて作りしよろひ、或は云ふ、開は解きはなつことにて此句は將士休息するをいふと。今從はず。【六二】麒麟　天子の御馬をいふ。【六三】受　むちをあてらるること。【六四】玉鞭　玉にてかざりしむち。【六五】侍臣　おそばの臣。【六六】諳入仗　諳はそらでおぼえてゐること、入仗は儀仗の列内にはひること。【六七】廐馬　おうまやのうま。【六八】僊登仙　舊注に黃帝が飛黃といふ馬に乘じて仙となりさりしとの「淮南子」にある話を引き、玄宗の舞馬が回復されしこととけり、（玄宗百四の馬に舞を敎へ杯をくはへて壽をたてまつらしめたり、その馬祿山の軍に奪はれ洛陽にもちゆかれしが二京をとりもどせし後また復舊せり、）しからば「登りて仙たらしむることを解す」と訓ずべく、また登仙二字は天子の事に屬す、これ上句八仗二字が直に侍臣の事に屬すると異なり、鄙見は登仙二字は廐馬に直屬するものかとおもふ、しからば黃帝・舞馬等のことをいふに非ずして、今まで他所にありし馬がこのたび宮城に入りこみ來ることそのことをさして登仙といへるものかと考ふ。宮城を人間に對して天上と看做していふなり。【六九】花動　花枝のゆるるさまならん。【七〇】朱樓雪　雪は花をたとへていふ。【七一】衣冠　諸臣をさす、此句より「朝正」の句まで四句連關してみるべし、衣冠二句は哭廟の句についていひ、朝正の句の賓として用ふ。【七二】慘愴　ものがなしくいたむ。【七三】故老　人民の老者をいふ。【七四】潺湲　水の流るるおと。【七五】哭廟　唐の太廟は賊軍に焚かれたり、郭子儀長安を回復するや神主（ゐはい）を大内の長安殿に移す、肅宗は古禮に從ひ素き服をき三日間廟に向ひて哭されたり。【七六】朝正　正月元日に參朝すること、乾元元年正月元日戊寅の日に玄宗（時に上皇たり）は宣政殿に出御ありて肅宗に受命傳國の寶（印）を授けられたり。【七七】舜景　はれたる日光。【七八】月分　每月分給。【七九】粱漢米　四川・湖北の地方の年貢米、祿米としてたまはるなり。【八〇】水衡錢　水衡は官名、稅を主どる、漢の時、財用を司るものに司農・少府・水衡の三あり、少府・水衡は天子の私藏をつかさどる。【八一】内蘂　宮苑内のはな。【八二】繡　彩繪をくくりて織物のかざりとする仕方なり。【八三】宮莎　莎は一に香附子ともいひ莖は三稜に似、根のぐるりに毛多き草なりといふ。【八四】恩榮　恩寵榮譽。【八五】同拜手　賈嚴と同じく敬禮拜受する、賈至は時に中書舍人、嚴武は給事中たり。【八六】出入　朝廷へではひりする。【八七】隨肩　一歩おくれてついてゆくこと。【八八】著醉　醉をおびること。【八九】華堂　宮中のうつくしき堂。【九〇】繡被　ぬひとりのかいまき。【九一】轡齊　たづなをそろへて馬をすすめる。【九二】秉燭　ひるより遊びつづけて夜になりてともし火をとる。【九三】書枉　書は手紙、枉とはこちらへよこしてくれること。【九四】滿懷　牋　牋は手紙の文をかきたる紙をいふ、懷に滿つとは多きをいふ。【九五】每覺　覺は知るといふほどの意。【九六】昇元輔　賈嚴が大臣宰相の地位にのぼること。【九七】列大賢　賢人の居るべき位に列する、これも賈嚴についていふ。浦氏は「每覺」四句を賈嚴を指すとするの誤なるをいひ、之を房琯をいふとなせり、今從はず。【九八】秉鈞　詩經に秉二國之鈞一とみゆ、宰相は國中の均衡をたもつものなり、ここは宰相の地位をさしていへり。【九九】咫尺　まぢかくにあること。【一〇〇】鎩翮　たちばれをそこなはれる、賈嚴の罪により謫せられしを鳥にたとへいふ。【一〇一】聯翩　ともに羽をつらねてとぶ。【一〇二】禁掖　宮禁の掖門、ここは諫官等の出入する

門なり。【一〇三】朋從改　ともだちがかはる。【一〇四】微班　微小な位、作者その左拾遺の地位をさしていふ。【一〇五】性命全　無事にいきる。【一〇六】青蒲甘受戮　青蒲は青色の蒲席をいふ、これは天子の臥床の下敷きにするもの、むかし漢の元帝が太子を易へんとせしとき史丹といふもの直ちに天子の臥内に入り青蒲のうへに伏して泣諫せしと、此句は作者房琯が事について强諫せしことをいふ、戮は誅殺。【一〇七】白髮　自己の老容。【一〇八】弟子二句　自己を比していふ、弟子は孔子の弟子なるをいふ。【一〇九】原憲　貧を以て有名なり。【一一〇】諸生　書生。【一一一】老伏虔　伏は服字の音訛なるべし、服虔は後漢の儒者、左氏傳の解を作りしを以て知らる、顧炎武の說に、漢に尙書を傳へたる濟南の伏生あり、伏生名は勝なり、伏虔は伏勝の誤用ならんと、余按ずるに杜甫何ぞ此誤をなさん、後人傳寫にあたり、服が伏に訛せしならんのみ。【一一二】師資　師となり、もとでとなるもの、老子に善人不善人之師、不善人善人之資、とみゆ。【一一三】謙未達　作者自らなほ師資あるの地に至らずと謙遜す。【一一四】鄉黨　周圍の人人をさす。【一一五】敬何先鄉に於ては年長者を敬して先きとす、此句作者學德なくして先づ敬せらるるを怪むなり。【一一六】舊好　ふるき時のなかのよさ、此句「舊好を憶ひては」の意。【一一七】新愁　今日のうれひ、「新愁をいだいては」の意。【一一八】眼欲穿　眼に穴があきさう、賈嚴の居る地を見つめるをいふ。【一一九】翠乾　みどりの色かわいて生色うすし。【一二〇】危棧竹　あぶなげなかけはしの竹、舊說に蜀道の棧は竹を編みてつくる、この竹は編竹をいふと。余は棧道の通路に叢生せる竹をさすものと考ふ、此句嚴の居地についていふ。【一二一】紅膩　賦はあぶらぎること、此句賈の居地についていふ。【一二二】賈筆　筆は文章をいふ。【一二三】孤憤　一人のいかり、韓非は孤憤の篇を著はす。【一二四】定知二句　賈嚴二人についていふ。【一二五】深意　詩文にふくめたるおくふかきこころ。【一二六】傳　傳播せしむること。【一二七】貝錦四句　傳播せしむることの危險なるわけをいふ、貝錦は詩經（巷伯篇）に萋兮斐兮、成是貝錦とあるに本く、萋斐は文章ある貌、貝錦は貝の錦紋なり、女工彩色の絲を集めて錦文を織成す、讒人が他人の過ちをよせあつめて罪を構成することそれと似たり。【一二八】無停織　織ることをとどむるなし、斷えず織るをいふ。【一二九】朱絲有斷絃　宋の鮑照が句に直如朱絲繩とあり、朱絲繩は琴絃なり、杜句は之を借用して、絃直なれば斷絕することあるをいふ。【一三〇】浦鷗二句　連關してみるべし。【一三一】防碎首　猛鳥に首をくだかれぬ樣にふせぐ必要あり。【一三二】霜鶻　霜おくころの鶻、法を執る官吏をたとへていふ。【一三三】不拘拳　むだなこぶしなし、必ず他の鳥を搏擊するをいふ。【一三四】地僻　此句賈の地をいふ、僻はかたよりたること。【一三五】昏炎瘴　炎熱の氣、惡しき水蒸氣におほはれてくらし。【一三六】稠　おほし。【一三七】隘石泉　石や泉のためにその地形せばまりたるをいふ。【一三八】且將棋二句　二人に通じていふ、將棋は棋をうつことによりての意。【一三九】度日　時日を經過する。【一四〇】爲年　一年をわたること。【一四一】典郡　郡をつかさどるもの、刺史の官をいふ、これ嚴をさす。【一四二】微眇　地位の小なること。【一四三】治中　官職の名、晉の時、州に別駕・治中・從事あり、隋唐以後治中を改めて司馬といふ、賈をさす。【一四四】棄捐　朝廷からすておかるるをいふ。【一四五】安排「莊子」（大宗師）に安排而去化、乃入於寥天一とあり、排に安んずるとは造物の推排（かはるがはるおしのけること）を甘んじておちついてをることなり、安排二句は二人を通じていふ。【一四六】求倣吏　倣吏たるを求むるなり、倣吏は人に屈せずゐばつてゐる吏なり、莊周嘗て漆園の吏となる、楚の威王之を聘して丞相となさんとす、周、使者に謂つて曰くすみやかに去て我を汚すことなかれ、と。晉の郭璞の詩に漆園有傲吏とあり。【一四七】比興　たとへを以て景物に托して思ひをのぶる方法をいふ。【一四八】展歸田　田園に歸らんとの情をのぶる、後漢の張衡に歸田の賦あり。【一四九】去去　其人去て留まらざらんとするをいふ。【一五〇】才難得　人才は得ることかたし。【一五一】蒼蒼　天の色をいひ、天をさす。【一五二】理又玄　玄はおくふかきをいふ、老子に玄之又玄、衆妙之門とあり。【一五三】古人二句　此二句、上句は賈嚴についていひ、下句は自己についていふ、上を結び下を起す。【一五四】稱近矣　穆生が故事。漢の高祖の時、楚の元王、穆生を敬禮し常に生がために醴を設く、次に王戊が位に卽くや醴を設くることを忘る。生曰く、可以逝矣と、遂に病と謝して去る。【一五五】吾道　無形の道を云ふ。【一五六】卜終焉　身を終るの地を卜す。【一五七】隴外　秦州をさす。【一五八】翻　反つて。【一五九】投跡　あしあとをいれる、ふみこんで來りしをいふ。【一六〇】漁陽　范陽なり、史思明その地に反す。【一六一】控弦　ゆみづるをひく、弓をいるをいふ。【一六二】笑　作者みづからわらふ。【一六三】爲妻子累　爲妻子所累の義、妻子の係累を受くること。【一六四】與歲時遷　時は四時、一歲四時のうつるままにうつる。【一六五】親故　親戚故舊。【一六六】行ゆくゆく、だんだん。【一六七】兵戈　武器、兵亂をいふ。【一六八】接連　場所的につづくをいふ。【一六九】他鄉　秦州をいふ。【一七〇】傳夢寐　親故を憶ふゆゑにゆめみること多し、寐はいぬること。【一七一】失侶　なかまを失ふ。【一七二】迍邅　行いて進まざる貌、失

寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻

意のさま。【一七三】 淹泊　一處にひさしくとまつてゐる。【一七四】 長吟　聲をながくひきて吟ずる、歎息の詩をうたふなり。【一七五】 阻靜便　謝靈運の始寧墅詩に、拙疾相倚薄、還得二靜者便一とあり、靜便は幽靜を好む者の都合よきことをいふ、阻はじやまされること。【一七六】 如公　公は賈嚴二人をさす。【一七七】 雄俊　ををしくすぐれたり。【一七八】 志　二人の志。【一七九】 騰騫　騫の字前に張騫の語を用ひ一たび押韻せり、ここに再び用ふ可からず、蓋し作者は騫を用ひしならん、騫は鳥のあがることなり。

【題義】 岳州の司馬賈至と巴州の刺史嚴武とに寄せたる詩なり。乾元二年秦州にての作。

【詩意】 賈君の居る衡岳のある地方は猿のなきごゑのうちにあり、嚴君の居る巴州は高く鳥の通ひ路のあたりにある。我が舊友たる兩君はともにしあはせが無くてはるかなる地方にながされて役人をしてをられる。今や兵亂後、天地がたてなほされたのに朝廷のめぐみの露のかかりぐあひによつて榮枯のちがひができ、才子たる賈君は賈誼の如く長沙の遠きに居られ、嚴君は嚴光が客星たりし如く釣瀨の上に高くひかりをはなつてをられる。』おもふに前年自分は肅宗皇帝の行在所にでむいて出仕し、國事について心配しながら御筵をささげておそばちかく仕へまつつた。その頃は胡賊を討伐して結果のよからぬため李廣（哥舒翰）の如き名將もうれへ、外國に對しては援兵を乞ふの使命をもちゆく張騫が待たることであつた。儀式の際にもとても以前のやうな儀仗をごてんにならべることは無く、舟いくさの用意はしたもののそれはむだにをはつて都は攻めおとさるる樣になつた。茫漠たる地方にわたつて味方の城は七十も賊にうばはれ、三千の劍士もちりぢりに散じ、角ぶえは秦晉の地方に吹きならされ、旄頭は澗瀍の水の上を俯して照らしてゐる。我我小儒若くは有識のものは、董卓・苻堅の徒（安・史に比す）がいかに亂暴をなさうともたかがしれたものだと輕蔑し嘲笑しつつ、及ばずながら精衞の鳥が海水をうづめんとする誠忠のまねをなし、なんで彼等逆賊が血囊を作つて天神を射る如きことをするのかとあやしんだ。果して各地方は官軍を助けんことをおもひ、一たび鼓をうつや味方の勇氣ふるひおこつて前面に敵あるをみとめぬほどであり、陳倉の北には陰氣消散し、太白山のいただきは晴れ晴れしい日色がにほふ樣になり、衞では賊軍敗北して屍はみだれし麻のごとく積もり、味方は破竹の勢を以て燕にさしかゝるに至つた。かくて吾が君（肅宗）の正式の車駕は長安の宮闕に還幸になり、官軍は關中八水の流域に下つてきた。自分はこのときありがたくも車駕の御先導の任にくははり、おめでたい勃興の氣のただようてゐるなかをうちはらひつつ起居ふるまうた。また貔虎の如くつよい警護の武士はよろひのひかりを日光にかがやかせ、麒麟の御馬は玉鞭をあてられてすすむ。近侍の諸臣は心得て儀仗にはひり、多くのお馬のむれもお伴をして宮城へとのりこんできた。朱樓のあたりに動く花をみれば雪のごとく、城邊の碧樹にはあを煙がじつとうかんでゐる。吾が君は先づ宗廟に對して哭禮を行はせられたがそこにはものがなしい風が急に吹き、百官は心かなしみ、父老はたきつせのごとく涙をながしたが、元日の參朝にははれわたつた日の光があざやかにかがやいて、いかにも太平の象があらはれた。官吏に對して毎月梁漢の地からたてまつつた米を分けてくだされ、

春にあたつては水衡の内帑金を支給しくだされる。御苑の花蘂は纈紋よりもしげくうるはしく、莎草は綿よりもやはらかさうに生えてゐる。そこへ我等は同じ様の恩榮を荷うて、肩さがりに伴行して出入りし、晩には華堂で醉にひたり、寒ければともに繡のかいまきを重ねて眠つた。また日中は馬をならべたづなをそろへてあそんで、さらに夜まで燭をとつてあそびつづけ、懷に一ぱいになるほどの手紙さへももらつて諸君と親しく交はつた。』　自分のかんがへでは諸君は大臣宰相の地位にのぼるであらうとおもひ、必ず諸君は大賢の居るべき地位に列するだらうとまちまうけた。しかるに國鈞をとる宰相の地位にもうすこしといふ距離の處で、諸君は鳥のたちばねをそがれてふたたび一しよに飛び出すことになつた。自分は禁中の掖門のそばでまつたく友達がかはつてしまひ、つまらぬ官位に於て無事にいのちをとりとめた。吾が君をお諫め申したときは青蒲の席に於て滿足して誅戮を受けるつもりであつたのだ、いきのこつてはみたがだれがこのしらが首を氣の毒がつてくれるものがあらうか。自分は孔子の弟子原憲のごとく貧しく、後漢の諸生服虔のごとく老いてゐる。他人の師資となるほどの地に達したものでないと謙遜してをるのに、何故か鄉黨の人人は自分を先きに敬うてくる、これは愧ぢいる次第である。諸君とのむかしのよしみをおもふと腸がちぎれる様であり、このごろの愁のこころでは、眼に孔があくほど諸君の方のみながめやられる。嚴君の地にある棧道では竹も翠に生色が無くはえてゐるだらう。賈君の地にある小湖では蓮花がさいて紅色があぶらぎつてゐるであらう。賈君は文章をつくつて孤憤を論じ、嚴君また幾篇の詩をつくりなしたか。兩君ともそれを作るにおくそこの意をいためたこととおもふが、さやうなものは決して一般の人人に傳播せしめたまふなよ。讒人は女工のやうにたえず貝錦の紋を織りつつあるものであり、朱き琴絲もまつすぐなれば斷ちきれるものである。秋の鶻は他の餌物をうつにむだの拳をつかはぬものだ、だから水上の鷗は首をうちくだかれぬ様に用心することが大切だ。賈君の處は炎瘴の氣がもやもやしてゐるだらう。嚴君の處は山だらけで石泉のみで地面が窮屈であらう。兩君は棋や酒で日や年をすごしてゐることだらう。一郡の長官ではつまりちつぽけなものだ。一治中の職ではすてられてあると同じだ。それになるがままに運命に身をまかせ莊周の様な傲吏の生活を求め、比興の辭に託して歸田の思をのべられる。諸君の如き者が去つてはふたたび諸君の如き才は得ることがむつかしい、じつに天道といふものはその理が深くてわからぬものだ。』　むかし漢の穆生は可二以逝一矣というた。諸君はそれだ。自分はいまや此に終焉の地を卜しつつある。因つて隴外のこんなところまではひりこんできたが、漁陽の地方ではまた弓づるをひいて逆賊がおこりだした。自分は妻子にほだされつつあることをかしくおもひながら時間の經過するままにおしうつつてゐる。親戚故舊はだんだんすくなくなるし、兵亂のみはともすれば地つづきにつらなつてゆく。他鄉のそらで夢みばかり多く、友だちなしでは失意のさまであるのもあたりまへのことだ。おまけに多病のためますますこんなところにながとうりうをするし、いたづらに長吟

寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻

しつつ樂隱居の生活をじやまされてをる。しかしながら諸君等はともに雄俊の人たちであるから、諸君の志は必ず猛鳥駿馬のごとくまひあがりをどりあがるに在ることであらう、自分などはお話にならぬ。』

寄張十二山人彪三十韻　張十二山人彪に寄す　三十韻

獨臥嵩陽客。三違潁水春。
獨り臥す嵩陽の客、三たび違ふ潁水の春。
艱難隨老母。慘澹向時人。
艱難、老母に隨ひ、慘澹、時人に向ふ。
謝氏尋山屐。陶公漉酒巾。
謝氏、山を尋ぬる屐、陶公、酒を漉する巾。
羣凶彌宇宙。此物在風塵。
羣凶、宇宙に彌る、此の物、風塵に在り。
歷下辭姜被。關西得孟隣。
歷下、姜被を辭す、關西、孟隣を得。
早通交契密。晚接道流新。
早く交契を通ずること密に、晚に道流に接する新なり。
靜者心多妙。先生藝絕倫。
靜者、心、妙多し、先生、藝、絕倫なり。
草書何太古。詩興不無神。
草書、何ぞ太だ古なる、詩興、神無くんばあらず。
曹植休前輩。張芝更後身。
曹植、前輩休む、張芝、更に後身あり。
數篇吟可老。一字賣堪貧。
數篇、吟じて老す可し、一字、賣（買）へば貧なるに堪へたり。
將恐曾防寇。深潛託所親。
將恐、曾て寇を防ぐ、深く潛みて所親に託す。
寧聞倚門夕。盡力潔飧晨。
寧ぞ聞かむや倚門の夕、力を盡す潔飧の晨。
疎懶爲名誤。驅馳喪我眞。
疎懶、名に誤らるるを爲す、驅馳、我が眞を喪ふ。
索居尤寂寞。相遇益愁辛。
索居尤も寂寞、相遇うて益〻愁辛。
流轉依邊徼。逢迎念席珍。
流轉、邊徼に依る、逢迎、席珍を念ふ。
時來故舊少。亂後別離頻。
時來つて故舊少く、亂後、別離頻なり。
世祖修高廟。文公賞從臣。
世祖、高廟を修む、文公、從臣を賞す。
商山猶入楚。渭水不離秦。
商山、猶楚に入る、渭水、秦を離れず。
存想青龍祕。騎行白鹿馴。
想を存す青龍の祕なるに、騎行す白鹿の馴るるに。
耕巖非谷口。結草卽河濱。
巖に耕すは谷口に非ず、草を結ぶは卽ち河濱。
肘後符應驗。囊中藥未陳。
肘後、符、應に驗あるなるべし、囊中、藥、未だ陳ならず。

旅懷殊不(七九)愜。良覿眇(八〇)無(八一)因。』

旅懷、殊に愜はず、良覿、眇として因無し。』

自古皆悲恨。浮生有屈伸(八二)。

古自り皆悲恨あり、浮生、屈伸あり。

此邦(八四)今尚武。何處且依(八五)仁。

此の邦、今武を尚ぶ、何の處にか且仁に依らむ。

鼓角凌天籟(八六)。關山倚月輪(八七)。

鼓角、天籟を凌ぐ、關山、月輪に倚る。

官壕羅鎮磧(八八)。賊火近洮岷(八九)。

官壕、鎮磧に羅る、賊火、洮岷に近し。

蕭瑟(九〇)論兵地。蒼茫(九一)鬬將辰。

蕭瑟たり論兵の地、蒼茫たり鬬將の辰。

大軍(九二)多處所(九三)。餘孽(九四)尚紛綸。

大軍、處所多し、餘孽(孽)尚紛綸たり。

高興知籠鳥(一〇〇)。斯文起獲麟(一〇一)。

高興、籠鳥なるを知る、斯文、獲麟に起らむ。

窮秋正搖落(一〇二)。回首望松筠(一〇三)。』

窮秋、正に搖落す、首を回らして松筠を望む。』

【字解】【一】張十二山人彪　山人は仕へざる人をいふ、「唐詩紀事」によれば、張彪は蓋し潁水洛水の間（河南登封縣の地方）に生れし隱者にして、天寶の末に母を奉じて亂を避けたり、と。彪が北遊遠酬孟雲卿詩にいふ、善道居貧賤、潔服蒙塵埃、行行無定心、壞坎難歸來、慈母憂疾疹、家室念栖栖、と。又神仙の詩にいふ、長老思養壽、後生笑寂寞、五穀非長年、四氣乃靈藥、と。以て其の人となりを知るべし。【二】獨臥　世人とはなれてひとり退き居ること。【三】嵩陽客　彪をさす、嵩陽は嵩山の南なり、嵩山は河南登封縣治の東北にあり、東峰を太室、西峰を少室といふ、相去ること十七里、五岳の一にしてその中岳なり。【四】三遷　遷はそむきて逢はざるをいふ、三たびたがふは三年を經るをいふ。【五】潁水春　潁水は少室山に出で東南して淮水に入る、潁水春は彪の故郷の春をいふ。【六】艱難　國難、世難。【七】老母　彪の母。【八】慘澹　ものがなしきさま。【九】時人　世間の人人。【一〇】謝氏　宋の謝靈運。【一一】尋山展　靈運は登山を好み特別の木屐を製し、上るときはその前齒を去り、下るときはその後齒を去りしといふ。【一二】陶公　陶淵明。【一三】漉酒巾　にごりさけをこす頭巾、淵明は頭巾で酒をこしまたそれを平氣でかぶり居たりと。【一四】鑿凶　安祿山・史思明等多くのわるもの。【一五】彌宇宙　天地間いつぱいにひろがる。【一六】此物　上句の屐と巾とをうけていふ、但し實際は彪其人を意味す。【一七】風塵　世上のちりほこり、山から俗界へでてきたことをいふ。【一八】歷下　山東省濟南府。【一九】辭姜被　後漢の姜肱、繼母に事へて孝、兄弟四人、同一布被に寢ぬ、被は「かいまき」、姜肱を彪に比す、姜被を辭すとは彪にいとまをつげ別れしをいふ、蓋し作者、往年歷下に在りて彪を識り、そこにて別れしものとみゆ。【二〇】關西　浦注には潼關以西とし華州を指すなるべしといへり。余は朱注により隴關以西とし、秦州をさすものとみる。「兵車行」の未休關西卒の關西と同じ、（上卷卷二、一一六頁を見よ）。【二一】得孟隣　孟隣は孟氏のとなりなり、孟子の母、その子を教育せんために三たび居を遷して隣をえらべり、彪、母を奉ずるにより之を孟子に比す、孟隣は彪とのとなりあひをいふ、此句蓋し秦州にてまた彪と隣居するに至りしをいふ。【二二】早通　「唐詩紀事」に引けるは早を旦に作れり。【二三】交契　彪とのまじはり、ちぎり。【二四】密　親密。【二五】晚　あとには、おそく。【二六】接　接近。【二七】道流　道家の教を奉ずる人人。【二八】新　接の字へかかる、「最近には」の意。【二九】靜者　幽靜を好む人、彪をさす。多妙　藝道の奧妙に通達する所多し。【三〇】先生　彪をさす。【三一】草書　はしりがきの書體。【三二】古　ふるめかし。【三三】詩興　詩の興趣。【三四】神　人間わざとおもへぬ力。【三五】曹植　建安時代魏の第一流の詩人。【三六】休　そのことのやまつてしまふをいふ。【三七】前輩　先輩に同じ。【三八】張芝　後漢時代、弘農の人にして草聖と稱せられし人。【三九】後身　生れかはり。【四〇】數篇　彪が作れる詩四五篇。【四一】吟可老　他人之を吟じ樂しみて以て老を送るに足るべきをいふ。【四二】一字　彪が草書の一字。【四三】賣堪貧　賣は古本及び「唐詩紀事」に引けるにはみな買に作る、從ふべし。彪が草書は一字千金ともいふべくいと貴きものなれば、他人もし之を買ふときはその人は貧なるに十分なり、との意。「賣りて貧なるに堪

へたり」にては義をなさず。【四四】 將恐　詩經（小雅谷風）に將恐將懼、維予與レ女とあり、恐懼は厄難勤苦の事に遭ふをいふ、ここは上の「將恐」二字を切り取りて借用せるまでなり、賊難にあひて恐懼するなり。【四五】 曾　かつて、まへかた。【四六】 防寇　逆賊の難を豫防するをいふ。【四七】 託　身をよせる。【四八】 所親　したしむ所のもの、親類緣者のたぐひ。【四九】 寧聞　「なんぞきかんや」反語なり、きいたことがない。【五〇】 倚門夕　夕倚レ門を逆にいへるなり、齊の王孫賈の母、その子が家を出でて晩に來るときは門に倚りて望むといへり、戰國策にみゆ、此句は彪は母にかく心配をかけしことなきをいふ。【五一】 盡力　ほれををること。【五二】 潔飧晨　これも韻字の都合にて晨潔飧をおきかへていへり、晉の束晳が補亡詩の「南陔」に孝子が親につかふることをのべて、馨爾夕膳、潔爾晨飧といへり、飧は餐と通ず、食事のこと、潔は清潔にすること。【五三】 疎懶　ぶしやう、以下作者自らいふ。【五四】 爲名誤　爲名所レ誤の略、名譽のため世間へひきだされ一身の處置をあやまる。【五五】 驅馳　東西にかけめぐる。【五六】 喪我眞　おのれの本姓、ありのままのところをうしなふ、虛僞の生活をせねばならなくなりしをいふ。【五七】 索居　親友とちりぢりになつてをる。【五八】 相遇　彪とであふ。【五九】 愁辛　うれはしくまたつらし。【六〇】 流轉　處處を轉轉してうつる。【六一】 依邊徼　徼は木柵にてつくれる界、邊徼は邊境をいふ、秦州の地をさす、依は依託。【六二】 逢迎　むかへて逢ふこと、逢はそへ字にて義かろし。【六三】 席珍　禮記（儒行篇）の語、（上卷卷三、二五四頁をみよ）、「席上の珍」なり、珪璋の如き美玉をさす、これを彪をたとへていふ。【六四】 時來　昇平の時節の到來してから、下の亂後に對し辭をあやなしていへるなり。【六五】 故舊　ふるなじみの人人。【六六】 別離頻　このわかれのなかに今回の彪とのわかれをふくめていへり。【六七】 世祖　後漢の光武帝の廟號。【六八】 修　修繕。【六九】 高廟　漢の高祖の廟、光武は建武二年正月に高祖の廟を洛陽に立てたり、此一句は肅宗が乾元元年四月に九廟落成して神主を迎へて新廟に入れしことをいへり。【七〇】 文公賞從臣　「左傳」（僖公廿四年）にみゆ、晉の文公本國を出で諸國をさまよひ國にかへるに及びて從者を賞す。肅宗の至德二載十二月、玄宗に蜀に從ひしもの及び肅宗に靈武に從ひし諸臣に封爵を加へしことをいふ。【七一】 商山猶入楚、渭水不離秦二句　諸家定說なし、余は彪が身のうへについていへるものと考ふ、商山は陝西商州治の東南九十里にあり、漢の四皓の隱れし地、渭水は周の太公望が釣りを垂れし水、この二隱者の事を以て彪にあててていふ、入レ楚、不レ離レ秦、の楚・秦は唐にあててていふ、二句の意は君（彪）が隱るるにふさはしき商山も渭水もふたたび我が唐の手に歸したりとの義ならんか、（又案、商山一句は彪についていひ、入レ楚とは山の秦に屬せざるをいひ、彪が帝力を享けざるをいへるか、また渭水の句の秦は長安をさし、作者が長安を慕ふの意を寓せるか、かく見るときは商山・渭水の句にて彼我を分敍し、後の旅懷・良覿の句に至りまた收束せりとも考へ得べし、暫く疑を存す）。【七二】 存想青龍祕　雲笈七籤の「老君存思圖」なる道書に、凡行レ道時所レ存、清且、思二青雲之氣一、匝滿二齋室一、青龍獅子備守二前後一といへり。存想は思想をそこにとどむること、青龍祕とは青龍が齊室の前後をまもりをるものと考ふるなどの神祕的なることをいふ。【七三】 騎行　のりてあるく。【七四】 白鹿馴　馴は「なれる」、白鹿は仙人ののるものなり。【七五】 耕巖非谷口　上卷（卷一、四四頁の鄭谷の解をみよ）、漢の鄭樸字は子眞、長安の南、谷口に居り、巖石の下に耕す、「揚子法言」にみゆ。此句は彪の隱る る地長安近くに非るをいふ。【七六】 結草即河濱　神仙傳に、河上公は其の姓氏を知らず、漢の文帝の時、公草を結びて庵を河濱に爲くり、老子を讀む、文帝駕して往て之に詣る、と。無論道家者流のつくりばなしなれどもかく言ひつたへらる。河は黃河、此句は彪の隱るるところ洛陽近くなるをいふ。【七七】 肘後符應驗　晉の葛洪、金匱藥方一百卷・肘後要急方四卷を著す、肘後は手許をいふ、符は醫療のまじなひのふだ、驗はききめのしるし。【七八】 陳　ふるびる。【七九】 旅懷　作者客中のおもひ。【八〇】 愜　かなふ、きにあふ。【八一】 良覿　親友と相見るは良覿なり。【八二】 眇無因　はるかにしてあふによしなし、浦氏は此語あるによつて秦州にて遇ふと爲すことの不都合なることを論ぜるも、これは別後の將來をさしていふことなれば毫も不都合なし。【八三】 屈伸　一身のかがむとのびると、なほ窮通といはんがごとし、ここは棄散を主とし、棄を伸、散を屈とみる。【八四】 此邦　秦州をさす。【八五】 依仁　仁人にたよりて生活すること、仁人は彪をさす、この依仁は「論語」の里仁の意のごとし。【八六】 凌天籟　そらふくからかぜをもしのぐ、高くのぼるをいふ。【八七】 倚月輪　仇氏は倚を人がよることとし、「月を仰ぎて鄉關を望む」の義とせり、楊注に「地勢の高きを言ふ」といへるは關山が倚るとみるなり、秦州雜詩に不レ夜月臨レ關とあれば楊說可ならん。【八八】 官壕　官軍が防禦のためにほりたる「ほり」。【八九】 羅　羅列。【九〇】 鎭磧　鎭は戍兵の屯所、磧は沙漠。【九一】 賊火　吐蕃の賊のあぐる焚掠の兵火。【九二】 洮岷　洮州、岷州、竝に隴西の地。【九三】 蕭瑟　さびしきさま。【九四】 論兵地　用兵を論ずる地方、いづれの地をさすやは明かならず、疑

ふらくは隴西秦州の近地をさす、浦氏は華州以東とし、作者等がかつて棄り談ぜし處をさすといへり、余はしか信ぜず。【九四】蒼茫はつきりせぬ貌。【九五】鬬將辰　辰は時、韻字の都合にて辰の字を用ひしも時といふも處といふも殆ど大差なし、鬬將は諸將敵味方にてあひたたかふをいふ。【九六】大軍　官軍をいふ。【九七】多處所　その居る場所多くあり、これはひろく遠方の諸地へかけていふ。【九八】餘孽　蟲豸の妖を孽といふ、凶賊ののこりのものをいふ。【九九】紛綸　みだれたる貌、多くあるをいふ。【一〇〇】高興知籠鳥、斯文起獲麟二句　諸家定說なし、鄙見をいはん、高興は杜甫が心中におこす高興、「北征」の青雲動三高興一の高興、（上卷卷五四八二頁）知籠鳥とは、作者邊地に局促しをるは籠中の鳥に似たることを知るをいふなり、斯文の句は彪につけていふ、斯文は彪が著述をさす、起は筆をそこからおこしはじむるをいふ、獲麟は孔子春秋を著はすに西狩獲レ麟にて筆を止めしことをさす、杜預の左傳の序に、孔子が筆を獲麟の句に絕ちしは感じて起りし所なるも、固より終りを爲す所以なり、といへり、孔子が獲麟に感ぜしは、麟が其の出づべき時に非ずして出でたるを傷めるなりといはる、故に孔子は獲麟に感じて筆を起せしも亦そこにて止めたり、彪も必ずや孔子のごとく獲麟に感じて筆を起すならん」、此二句或は二句ともに張についていふとし、或は二句ともに作者自らいふとし、或は上句を張をいひ下句は自己をいふとするなど諸說あり。【一〇一】窮秋　秋のすゑ。【一〇二】搖落　木の葉ゆられおつ。【一〇三】望松筠　彪が隱居をのぞむなり、筠は竹色なるも竹をいふ、松筠卽ち松竹の意、裡面には晚節を保つの比意をもふくむ。

【題義】河南地方の隱遁者で、また孝子である張彪にやつた詩である。作者は張彪とは以前山東省の濟南府でであうたことのあるのであるが、さらに之と秦州でおちあひ、しばらく隣りずまひをし、さてまた彼が河南の方へかへつたので、それにこの詩を寄せたのである。乾元二年の秋、秦州に於て別後まもなき時の作であらう。

【詩意】君は嵩山の陽にひとり臥して起たず隱居してゐた人であるが、鄕里にある潁水の春にはすでに三たびあはずにゐる。さうして國難の際に老いたる母のおともをして孝養をなし、世間の人に對してはものがなしきおもひを抱いてをる。本來君は謝靈運の山のぼりの足駄をつけ、陶淵明のどぶろくをこす頭巾でもかぶつてゐるべき人なのだが、いかにせん逆賊どもが天地にはびこつてゐるので、その足駄その頭巾も俗界の風塵のなかに陷つてをるのである。自分は歷下（濟南）で君とわかれたが、いま關西の地（秦州）でまた君と隣りずまひをすることができた。早くから親密な交際を通じたのであるが、最近にはまた幸にも君の如き道家の道を汲むものにちかづくことができた。幽靜を好む君は藝道の妙奧を多く心にもつてをり、その藝たるや絕倫のものである。君の草書はどうしてあんなに古めかしいのであるか、君の詩興には鬼神の助けが無いとはしない。君の詩に對しては曹植も先輩たる資格がなくなり、君の草書は張芝の後身といつてもよろしい。君の詩四五篇あればそれを吟じてたのしみながら老を送ることができ、君の草書はその一字を買ふならばその人は貧なるに十分である。君はこれまで亂世恐懼のうちに逆賊の難を避け、人目をくぐつて親類緣者をたよつてをられた。その間よく老母に事へ、王孫賈のごとく歸りがおそいため夕に母親を門によりながら待たせて心配をかけたことをきいたこともなく、せいいつぱいの力をだして母の晨餐を淸潔にととのへられた。』自分はぶしやうものであるのになまじ名聲のあることのために身を誤られて世間へとびだし、東西にかけずりめぐつて自分の本性のありのままを失うてしまつた。親友とちりぢりになつての生活は尤もさびしい

ものであるが、君とであうてみるとこれまたますますうれひ・つらさをますばかりである。自分は處處轉轉してこの秦州の邊境に身を託してをるので、珪璋の如き席上の珍たる君をお迎へしたく思うてゐるのである。が殘念なことには太平の時節到來したにかかはらずふるなじみの人人はごく少く、兵亂以後はただ諸人との別離のみがしきりである。今や我が天子はむかし光武帝が高祖の廟を修めたごとく祖先の廟を改修せられ、むかし晉の文公が逃亡のとき隨從した諸臣を賞せられたごとく羣臣に賞をおこなはれた。四皓の隱れた商山、太公望の釣りを垂れた渭水、みな我が唐に歸した。君が隱居の地は回復された。君が想ひは青龍室を守る道敎の祕密の處に存し、君の軀はまさに馴れたる白鹿に騎りて遊行せんとする、君が巖石のもとに退耕せんとする處は鄭子眞のごとく長安ちかき谷口ではなく、君が草を結びていほりせんとする處は河上公のなせしごとく洛陽に遠からざる黃河のほとりであるであらう。君は醫藥の書を肘にかけ、その作るところの療病の符は必ずや治癒に效驗があるであらう、君が囊中にたくはふる藥はまたふるびたりとはせぬであらう。自分は旅中のおもひをいだいてことに氣にあはぬことばかりだ、せめて君でも居てくれたらばとおもふのに、君との會合はかけはなれてなすよしもない。』悲恨といふものは今にはじめず古からあるものだが、いかにもこの浮世には一屈一伸、聚散離合あるは免れぬところである。この地方（秦州）はいま武事ばかりたつとんでをる、どこをたづねたならば君の如き仁人によりそふことができるだらうか。鼓角のおとは天籟をもしのぎ、關塞を設けた山はたかく月に倚つてゐる。官軍の防禦用の壕は屯兵所・沙漠に多くならんでをり、洮州・岷州に近く賊虜の焚掠の火がせまつてをる。凡そ用兵を論ずる附近地方は蕭瑟とさびしく、諸將あひたたかふの時、勝敗の數蒼茫としてはつきりせぬ。このほか安・史の殘黨もまだ紛綸と多くみだれ、官軍の大部隊も多くの處にあつめられてゐる。自分は心には高興をいだいて身をかへりみれば籠のなかの鳥にすぎぬことを知つてゐる。君は孔夫子のごとく獲麟に感じて著述の筆をそこからおこすことであらう。いま秋のすゑ木の葉のゆられおつるときにあたり、自分はふりかへつて君の居られる松竹の宅の方をながめやるのである。』

寄李十二白二十韻

李十二白に寄す。二十韻

昔年有狂客。號爾謫仙人。
筆落驚風雨。詩成泣鬼神。
聲名從此大。汨沒一朝伸。
文彩承殊渥。流傳必絕倫。
龍舟移棹晚。獸錦奪袍新。

昔年、狂客有り、爾を謫仙人と號す。
筆落つれば風雨驚き、詩成れば鬼神泣く。
聲名、此從り大に、汨沒、一朝に伸ぶ。
文彩、殊渥を承く、流傳するは必ず絕倫なり。
龍舟、棹を移すこと晚く、獸錦、奪袍新なり。

(一二)白日來(一三)深殿。青雲滿(一四)後塵。
(一五)乞歸優詔許。(一六)遇我宿心親。
未負幽(一七)棲志。兼全寵(一八)辱身。
(一九)劇談憐(二〇)野逸。嗜酒見(二一)天眞。
(二二)醉舞梁園夜。行歌泗(二三)水春。』
(二四)才高心不展。道屈(二五)善無隣。
(二六)處士禰衡俊。諸生原憲貧。
(二七)稻粱求未足。薏苡謗何頻。
(二八)五嶺炎蒸地。三危放逐臣。
(二九)幾年遭鵬鳥。獨泣向麒麟。
(三〇)蘇武元還漢。黃公豈事秦。
(三一)楚筵辭醴日。梁獄上書辰。
(三二)已用當時法。誰將此議陳。

白日、深殿に來る、青雲に後塵滿つ。
歸るを乞うて優詔許さる、我に遇うて宿心親しむ。
未だ負かず幽棲の志に、兼ねて全うす寵辱の身。
劇談、野逸を憐む、嗜酒、天眞を見る。
醉舞す梁園の夜、行歌す泗水の春。』
才高くして心、展べず、道屈して善、隣無し。
處士、禰衡俊に、諸生、原憲貧なり。
稻粱求むる未だ足らず、薏苡、謗何ぞ頻りなる。
五嶺、炎蒸の地、三危、放逐の臣。
幾年か鵬鳥に遭へる、獨泣、麒麟に向ふ。
蘇武、元漢に還る、黃公、豈に秦に事へむや。
楚筵、醴を辭せし日、梁獄、書を上りし辰。
已に當時の法を用ふ、誰か此の議を將て陳せむ。

(二四)老吟秋(二五)月下。病起暮(二六)江濱。
(二七)莫怪恩波隔。(二八)乘槎(二九)與問津。』

老いて吟ず秋月の下、病起す暮江の濱。
怪む莫れ恩波の隔たるを、槎に乘じて與めに津を問はむ。』

【字解】【一】狂客　賀知章をいふ。太子賓客賀知章は四明の人、自ら四明狂客と號す。【二】爾　汝、李白をさす。【三】謫仙人　罪によりて天上より下界へ流しくだされた仙人、賀知章は紫極宮に於て李白を一見して謫仙人なりと評せしといふ。【四】驚風雨　快速なるをいふ。【五】汨沒　浮沈の意ならんといふ、但しここは沈の意を主とせり、沈淪といふほどの義に用ふ。【六】文彩　白の文章のあやあること。【七】殊渥　特別にあつい御恩、翰林供奉に任ぜられし類をさす。【八】流傳　世間へつたはる作物、清平調の詩の類をさす。【九】龍舟　天子のおふね、頭に龍の飾りあり。【一〇】移棹晚　舟をこぎうつさずにしばらくまつてゐる。玄宗白蓮池に泛びて白を召し序を作らしめんとせしとき白は已に翰苑に於て酒を被りをりしかば高力士に命じて白を扶けて舟にのぼらしめしといふ。【一一】獸錦奪袍新　「新に獸錦袍を奪ふ」の義。錦袍はにしきのうはぎ、獸はその模樣がらなり、則天武后が龍門に幸せしとき從臣に詩をつくらせ先きにできたものに錦袍を賜はらんといふ、東方虬先づ成り、袍を賜はる、宋之問が詩つぎに成る、尤も工なり、因て虬より袍を奪ひて之問に賜はりしといふ、李白に關しかかる逸事は傳はらざるも蓋し類似の事ありしなるべし。【一二】白日　まひるなか。【一三】來深殿　白は奥ふかき宮殿までやつてくる。【一四】青雲　白の居る高き地位をさす。【一五】滿後塵　白の車後の塵を拜するもの、卽ち白に追隨する文士が多くあること。【一六】乞歸　白、故郷にかへらんことを玄宗にこふ。高力士の讒言によるなり。【一七】遇我　我とは作者みづからいふ、杜甫が李白に遇へるは、白の乞歸後、卽ち天寶三載にあり。【一八】宿心　平生からもつてゐた心。【一九】幽棲志　山林生活の念。【二〇】寵辱身　老子に寵辱若驚とあり、人は君寵をうけて榮ゆるときあり、またそれを失うて辱めらるるときあり、故に之をいましむべきをいふ、白は早く退きし故に辱にあふことすくなし。【二一】劇談　はげしくものがたる。【二二】憐野逸　白が杜甫の野逸をあはれむなり、野逸は田野に逸居するなり。【二三】見天眞　杜甫が白の天眞なるを

見るなり。【二四】 醉舞二句　李杜共同のしわざなり。【二五】 梁園　漢の時、梁の孝王のつくりしもの、今河南歸德府城東にありと。【二六】 泗水　山東兗州府にあり、杜甫が李白・高適・と梁宋に遊びしは天寶三載にあり、李杜魯齊の地方にありしは明年四載にあり。【二七】 才高六句　諸家六句共に白のことをいふとなす、愚案するに彼我を分敍せるなり、才高此句は白をいふ。【二八】 道屈　道の行はれざるをいふ、此句自らいふ。【二九】 善無隣　善道を行ひながら隣をなすものなし、孔子の德必有レ隣の語の反對。【三〇】 處士衲衡俊　白をいふ、處士は在野の士、衲衡は後漢末の文學者。【三一】 諸生原憲貧　自らいふ、原憲は孔子の門人。【三二】 稻粱求未足　此句自らいふ、生活に足るだけの食糧なし。【三三】 薏苡謗何頻　白をいふ、薏苡は「ジユズコダマ」、後漢の馬援、交阯を征し、薏苡の種を載せてかへる、人之をそしりて人から賄賂にもらつた明珠大貝をもちきたれりといふ、白の讒せらるる之に似たり。【三四】 五嶺　以下四句白をいふ、五嶺は廣東の北部に於て東西に走れる山脈、大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽これなり、白の流されし夜郎は（貴州省邊義府桐梓縣西二十里の地なりと）五嶺の西北にあたり可なりへだたりたれども大體のところにて名山をあげしなり。【三五】 三危　山の名、甘肅安西州燉煌縣東南二十里にあり、山に三峰あるを以て三危といふ、むかし舜は三苗の種族を三危に竄（投棄すること）したり、白の夜郎に流さるるそれと似たり。【三六】 幾年遭鵩鳥　幾年とはいくばく年を經ば、「やがて」の意、漢の賈誼長沙に謫せられ三年にして鵩飛びて舍に入る、誼傷みて鵩賦をつくる。【三七】 獨泣向麒麟　きりんに向つてひとりでなく、孔子の春秋（哀公十四年）に西狩獲レ麟といひ、公羊傳には、そのとき孔子は反レ袂拭レ面、涕沾レ袍曰、吾道窮矣、かくいうたと記せり、李白もその道の窮まれるをなげきて泣くなり。【三八】 蘇武元還漢　漢の蘇武は匈奴に使し十九年にして漢に還り、匈奴に降らず、李白の唐室にそむかざるは蘇武に似たり。【三九】 黃公豈事秦　黃公は夏黃公、商山の四皓の一人、秦末亂を避けて出でず、李白が永王璘の叛軍に從はざるは黃公の奏につかへざると似たり。【四〇】 楚筵辭醴日　漢の穆生が故事、楚の元王、穆生がため醴を設く、元王の孫戊の時にいたり醴を設くることを忘る、穆生つひに去る。此の句は穆生が自發的に醴を辭したりといふなり、これ李白は永王璘が僞官を受けざりしとの意に用ひしなり。【四一】 梁獄上書辰　漢の鄒陽、梁の孝王の爲めに獄に下さる、獄中より書をたてまつりて之を諫む、これ李白は鄒陽のごとく永王璘の惡事をいさめしをいふ。【四二】 已用當時法　當時法とはその時の刑法をいふ、至德元年永王璘が軍丹陽に敗れ、白は宿松に奔る、坐せられて潯陽の獄に繫がる、明年二載宋若思によつて囚を釋かれその參謀にめさる、此句は刑にふれしことをいふ。【四三】 此議　楚筵・梁獄二句の事實、卽ち白は璘にくみする者には非りしとの意見をいふ。【四四】 老吟二句　白のことをいふ、李白は乾元二年には六十一歲なり。【四五】 秋月下　此句によりてこの詩の秋作られしことを知る。【四六】 暮江濱　江は揚子江、薛仲邕が李白年譜を案ずるに、白は一たび獄より出だされしが、乾元元年璘が事に汙されしに坐せられて夜郎に流さるることとなり、乾元二年に途中にてまた恩命により放還せられ、同年三月には瞿唐峽を下り、漢陽にて酒病にかかり、江夏の地に居りてさらに下江せり、この江濱は作者未だそれらの事情を知らず漠然と江をさせるなり。【四七】 莫怪　白に向つていふ。【四八】 恩波隔　天子の恩澤の波からとほくはなれてゐる。【四九】 乘槎與問津　作者の希望をのぶ、宋之問が明河篇の終りに、明河可レ望不レ可レ親、願得乘レ槎一問津とあり、むかし海べに人あり、年年八月に浮べる槎ありて來る、その人之に乘じてつひにあまの河に至る、と。事は張華が博物志にみゆ。宋之問が詩は槎に乘りてあまの河に至りその津ばを問ひたしといへるなり、杜詩は其の用語を借りたれども意は同じからず、杜は天上に至りて天の河のわたりばをたづれ、李白のためにその寃を訴へたしといへるなり。「與」は俗用にて「爲めに」と同じ。

【題義】 玄宗の第十六子に永王、名は璘なる者あり、天寶十五歲玄宗蜀に幸するや、璘を以て山南東路及嶺南黔中江南西路四道節度採訪等使・江陵郡大都督となす、璘、江陵に至りて江淮の租賦を收め、將士數萬人を召募す、十二月ほしいままに舟師を領して東下して廣陵に赴く、吳郡採訪使李希言なるもの、璘を尊敬せざりしの故を以て激怒し、且屢〻肅宗の命を奉ぜず、丹徒の太守閻敬之を殺す、李白は永王の軍事に參預せり、白は之を脅迫に由ると稱すと雖も、實に其の形迹あるを免れず、白は之によりて璘が失敗するや、璘が罪に坐せられ、夜郎に流さるるに至れり、白は夜郎に赴かんとして程に就きしに、赦命ありて乾元二年三月には已に瞿唐峽を下れり。此詩は蓋し乾元二年秋作者秦州に

ありて、白の恩赦の事を明知せざりし時に作れるものならん。詩は多く自のために辯護を費せり。

【詩意】前年四明の狂客（賀知章）なるものがあつて、おまへを謫仙人だと名づけた。おまへは詩文をつくるに紙の上に筆が落ちれば風雨さへ驚くかとおもはるるほど快速であるし、詩が成就してみると鬼神さへそれに感じて泣くほどである。それによつておまへの名聲は大きくなり、これまでの沈淪の身がにはかにのびだすことになつた。さうしておまへの文彩は天子の特別のあつい御寵愛をうけ、世間につたへられる作物も必ず絶倫のものであつた。あるときは天子が舟あそびをされるときわざわざ棹をとどめておまちになつたり、他人にくれるはずの獸錦袍をあらたに奪ひかへしておまへにおさづけになるといふほどであつた。おまへはまひるなかにも奥ごてんにではひりする、おまへの居る高き位のところには追隨する後輩の士が充滿してゐた。それが事に由つておまへはお暇をいただいて故郷へかへりたいと願ひいで、優詔を以てそれを許されて朝廷からさがつた。それでおまへは自分とであふことができ、かねての心からおたがひに親しむ樣になつた。おまへは官をやめたから幽棲の志にも負かないし、兼ねて古人が寵をうけてもまた辱めをうけることもあるといつたおのれのからだをはづかしめず全うすることができた。おまへは自分とはげしくかたりあうて、自分の閒散な在野のすがたをきのどくがつてくれ、酒をたしんでのむところに天眞のさまがうかがはれる。かくて我我はあるひは梁園の夜に醉うて舞うたり、泗水の春にはあるきながら歌うたりした。』　おまへは才が高いのに心はのびずにゐる。自分は道を十分おこなひ得ず善を行ひながら隣りとなつてくれるものがない。おまへは處士禰衡のごとく人にひいでたものであり、自分は諸生原憲のごとく貧しいものである。自分は食糧さへ十分に求められぬ。おまへはなんで馬援が「じゆずこだま」を人から眞珠をもつてきたといはれた樣に、ありもせぬことにしきりにそしりをうけるのであらうか。おまへは五嶺地方のむしあついところで、むかしの三苗のやうに三危山へ放逐されたと同じ樣なものである。おまへはいく年めに不吉な鵩鳥にであうて漢の賈誼のやうになるのか、おまへは孔夫子が麒麟を見て「吾が道窮せり」といはれた樣に獨りで泣いてゐるだらう。漢の蘇武は匈奴へ降らず漢へもどつた、秦の夏黄公は秦に事へず商山にかくれてゐた、おまへの潔白忠誠な心は蘇武だ、夏黄公だ。穆生は楚王戊の醴を辭退した、鄒陽は獄中から梁の孝王を諫める書を上つた、おまへは穆生だ、鄒陽だ、なんで永王璘の無法な好遇をうけたり逆謀にくははつたりするものか。それにかかはらずおまへは當時の刑法を施行されて流しものにされたのだが、だれがいま上にのべた樣な意見を陳べたてるものはないのであらうか。おまへは年老いて秋の月のてるしたで詩を吟じつつあるであらう、おまへは夕ぐれの揚子江のほとりで病みあがりのすがたをしてゐるであらう。おまへはむかしの榮華時代にひきくらべて今なんでこんな僻地に居て天子の恩澤の波とかけはなれてゐるのかなどと不思議がるな。自分はおまへのために昔のある男がした樣に槎に乘つてあまのがはらへゆきそこでわたりばをたづねて天帝のところへゆき、

おまへのむじつのつみを訴へてやらうとおもうてをる。』

所思

【原注】得台州司戸虔消息。

思ふ所【原注】台州の司戸虔が消息を得たり。

鄭老身仍窶。台州信始傳。
鄭老、身仍窶せらる、台州、信始めて傳ふ。

爲農山澗曲。臥病海雲邊。
農と爲る山澗の曲、病に臥す海雲の邊。

世已疎儒素。人猶乞酒錢。
世已に儒素を疎んず、人猶酒錢を乞ふ。

徒勞望牛斗。無計斷龍泉。
徒に牛斗を望むに勞す、龍泉を斷するに計無し。

【字解】〔一〕台州司戸虔　上巻(巻五、五一四頁をみよ)。〔二〕消息　たより。〔三〕鄭老　虔をさす。〔四〕窶　ながしものにされる。〔五〕台州　浙江省台州府、虔の居處。〔六〕信　たより、信書。〔七〕爲農二句　虔の近況、信書によりて知りし所。〔八〕疎儒素　疎はうとんずる、素は質素、ちみなこと、儒素は儒者のちみな行ひ。〔九〕人　作者嘗て虔に贈る詩に頼有蘇司業、時時乞酒錢といへり、人は蘇源明をさすならん。〔一〇〕乞　あたふること、俗用なり、「こふ」義に非ず。〔一一〕徒勞　作者がむだに骨折るをいふ。〔一二〕望牛斗　牛・斗は星座の名、台州の地は牛斗の分野にあたる。〔一三〕無計　てだてなし。〔一四〕斷　斫(きる)なり、ただしここは土壌をきりけづることにて、劍を掘り取るをいふ。〔一五〕龍泉　むかし歐冶子がつくりたる三本の鐵劍の一の名、もと龍淵といふ、唐は淵の字を諱みて泉の字にかへたり、龍泉は單に劍の代りとして用ふ。牛斗・龍泉・の二句は雷煥(孔章)が牛斗を射る劍氣を見て豐城の獄にて劍をほりだせし故事(本巻「蒼劍」の詩の毎夜吐光芒句下の注を見よ)を用ひたり。

【題義】作者の親友鄭虔は至德二載十二月に台州へ貶せらるることになり、乾元元年に台州に至りたり、この詩は始めて虔より台州からの手紙を得て思ふ所をのべたり。仇氏は單復が編によりて之を此に置きたり。

【詩意】鄭虔老人は、その身はいまなほ流しものにされてをり、その台州からのたよりがこのたび始めて自分のところへ傳へられた。それによると、老人は山澗のみくまりで農となり、海べの雲うかぶあたりに病に臥してゐるとのことである。世間の人人は老人の様な儒者をうとんじるが、いまだに老人に酒錢をあたへてくれる人はあるのである。自分は、いたづらに牛斗のあたりに劍氣が貫くのをながめてゐるばかりで、その劍を地下からほりだしてやるてだてはもたぬのである。なげかはしきことだ。

別贊上人

百川日東流。客去亦不息。
百川日に東流す、客の去ることも亦息まず。

我生苦飄蕩。何時有終極。
我が生、飄蕩に苦しむ、何の時か終極有らむ。

贊上人に別る。

贊公釋門老。放逐來上國。
還爲世塵嬰。頗帶憔悴色。
楊枝晨在手。豆子雨已熟。
是身如浮雲。安可限南北。』
異縣逢舊友。初欣寫胸臆。
天長關塞寒。歲暮饑凍逼。
野風吹征衣。欲別向曛黑。
馬嘶思故櫪。歸鳥盡斂翼。
古來聚散地。宿昔長荆棘。
相看俱衰年。出處各努力。』

贊公は釋門の老、放逐せられて上國より來る。還世塵に嬰らるるを爲す、頗る帶ぶ憔悴の色。楊枝晨に手に在り、豆子雨(兩び)已に熟す。是の身は浮雲の如し、安んぞ南北を限る可けむ。』異縣、舊友に逢ふ、初めて欣ぶ胸臆を寫すを。天長うして關塞寒く、歲暮、饑凍に逼らる。野風、征衣を吹く、別れむと欲すれば曛黑に向ふ。馬嘶いて故櫪を思ふ、歸鳥盡く翼を斂む。古來、聚散の地、宿昔、荆棘長ず。相看るに俱に衰年なり、出處、各〻努力せむ。』

【字解】〔一〕贊上人　已に屢〻見ゆ。〔二〕百川　多くの川。〔三〕東流　支那の川は地形上つひに東にながれる。〔四〕客去　客は自らいふ。〔五〕息　やむ、停止。〔六〕飄蕩　ひるがへりうごく。〔七〕釋門老　佛教界の長老。〔八〕放逐　房琯が事に坐せられて逐はれしものといふ。〔九〕來上國　來は秦州へきたこと、上國は京師長安をいふ。〔一〇〕還　また。〔一一〕嬰　つなぐ、ひつかかる。〔一二〕憔悴色　やつれたかほいろ。〔一三〕楊枝晨在手　佛典を引きて說く解あるも今取らず、これ送別のとき楊柳の枝を手折り綰れて記憶のしるしとする唐人の習俗をいへるのみ、蓋し乾元元年の春作者長安にて贊と別れしなり。〔一四〕豆子　まめのみ。〔一五〕雨已熟　雨の字古本兩に作れるあり、兩をよろしとす、兩は兩回をいふ、豆が二回熟すとは乾元元年の秋と二年の秋との二熟をいふ。〔一六〕是身二句　一般的にいふ。〔一七〕異縣　秦州。〔一八〕舊友　贊。〔一九〕寫　外部へぶちまけるをいふ。〔二〇〕胸臆　むねのなかのおもひ。〔二一〕天長　都とほきをいふ。〔二二〕關塞　秦州にあるとりで。〔二三〕歲暮　時に十月なり、秋以後はすべて歲暮と稱す。〔二四〕吹征衣　たびする者のころも、作者まさに成州同谷に赴かんとするなり。〔二五〕曛黑　たそがれどき。〔二六〕故櫪　もと居たうまやのふみ板。〔二七〕歸鳥　林にかへるとり。〔二八〕斂翼　つばさをすぼめる、とばぬこと、自己が外方へでだすのとは反對なるをいふ。〔二九〕古來聚散地　古來は舊來といふほどの意、聚散は贊及び諸友と或は聚合し或は離散せしこと、聚散の地とは京師の地をさす。〔三〇〕宿昔　隔夕を宿といひ、三日を昔といふ、短時日間をいふ。〔三一〕長荆棘　いばら・からたちがせたかくのびる、兵亂のため荒れたるをいふ。〔三二〕衰年　老衰のとき。〔三三〕出處　出づると居ると、進退の義。〔三四〕努力　つとめること、身を誤らぬやうにする。

【題義】乾元元年十月、作者秦州にも居ること能はず南して成州の同谷へゆかんとして贊上人に別れを告ぐる詩なり。

【詩意】さまざまの川水は日日東に流れつつあるが、自分もまた旅客として甲地から乙地へと去り移つてやまぬのである。自分の生活はこまることにおちつきなくただよはされてのみゐるが、これはいつはてしがつくことであらうか。贊公は佛門の長老であらせられ、罪によりて都から放逐されて此地(秦州)へ來られた。ここでもまた世俗の風塵にかかりたまうたかして、すこぶるやつれたかほつきをしてをられる樣である。自分はあしたに楊柳の枝を手折つてお別れをしたとおもうてゐるのに、はや

ここへこられて豆が二度もみのる時日がすぎてゐる。このからだは浮き雲のやうにただよはされてゐるものだ、どうして必ず南へとぶとか北へとぶとか方角を定めることができませうぞ。』　自分は見知らぬ地方（秦州）であなたといふ舊友にであうて、はじめて遠慮なく思ふことを吐き出せるとよろこんだ。ところがここは都からは遠くてとりでの地が寒く、歳暮にのぞんでうゑこごえるの目にせまられてをる、（だからこの地を立ち去らうとするのである。）あなたにお別れせんとするときはたそがれになりかかつてをる。野らの風はわたくしの旅衣をさむく吹く。林にかへる鳥はみんなつばさをすぼめて飛ぶものはなく、馬のいななきさへ住みなれたもとのうまやのふみ板をこひしたふかのごとくである。我我一身上の事ばかりではありませぬ。むかしお互にあうたりわかれたりした都の地方をごらんなさい。二三日のうちに荒れはてて荆棘がのびてゐるではありませぬか。おたがひみたところでともども老衰の年になつてをりまする、どうかめいめい進退の節をあやまらぬやうにつとめようではありませぬか。』

兩當縣吳十侍御江上宅

兩當縣の吳十侍御が江上の宅

寒城朝煙淡。山谷落葉赤。

寒城、朝煙淡し、山谷、落葉赤し。

陰風千里來。吹汝江上宅。
鵾雞號枉渚。日色傍阡陌。
借問持斧翁。幾年長沙客。
哀哀失木狖。矯矯避弓翮。
亦知故鄉樂。未敢思宿昔。』

陰風、千里より來る、吹く汝が江上の宅。
鵾雞、枉渚に號ぶ、日色、阡陌に傍ふ。
借問す持斧の翁、幾年ぞ長沙の客。
哀哀たり失木の狖、矯矯たり避弓の翮。
亦知る故鄉の樂しきを、未だ敢て宿昔を思はず。』

昔在鳳翔都。共通金閨籍。
天子猶蒙塵。東郊暗長戟。
兵家忌間諜。此輩常接跡。
臺中領舉劾。君必愼剖析。
不忍殺無辜。所以分黑白。
上官權許與。失意見遷斥。
朝廷非不知。閉口休歎息。
仲尼甘旅人。向子識損益。』

昔、鳳翔の都に在り、共に金閨の籍を通ず。
天子も猶蒙塵、東郊、長戟暗し。
兵家、間諜を忌む、此の輩常に跡を接す。
臺中、舉劾を領す、君必ず剖析を愼む。
無辜を殺すに忍びず、所以に黑白を分てり。
上官權に許與す、意を失ひて遷斥せらる。
朝廷、知らざるに非ず、口を閉ぢて歎息するを休む。
仲尼、旅人を甘んず、向子、損益を識る。』

(四四)余時忝(四五)諍臣。丹陛實(四六)咫(四七)尺。
(四八)相看受(四九)狼狽。(五〇)至死難塞責。
(五一)行邁心多違。(五二)出門無(五三)與適。
(五四)於公負(五五)明義。(五六)惆悵(五七)頭更白。(五八)』

【字解】【一】兩當縣　唐の時漢中府鳳州に屬せり、今秦州に屬し、州治の東南にあたれり、成州よりすれば東にあたる。【二】吳十侍御　侍御史吳郁なり、何處の人なるや明ならず、詩によれば罪せられて此地に在りし者なり。【三】江上宅　江は嘉陵江。【四】寒城　冬の兩當縣城。【五】陰風　北より吹く陰氣なかぜ。【六】汝　吳郁。【七】鵾雞　タウマル、オホニハトリ。【八】枉渚　まがりたるなぎさ。【九】阡陌　田野の南北・東西にわたれるみち。【一〇】持斧翁　吳郁をさす、漢の武帝の末に繡衣の御史暴勝之といふもの使となり斧を持して盜賊を逐捕す、郁は侍御史なるゆゑ持斧翁といへり。【一一】幾年　いくとせ。【一二】長沙客　漢の賈誼長沙に貶謫せらる、今借用して吳郁をさしていふ。【一三】朱木狖　狖は「くろざる」、しし鼻にて尾の長さ四五尺ありといふ、失木狖は木からはなれたるさるをいふ、吳その地位を失ひしをいふ。【一四】矯矯　あがる貌。【一五】避弓翮　翮は鳥のたちばね、ここは雁をいふ、雁は蘆の葉を銜(ふく)みて飛び以て弓を避く、此の句吳の難害を避くるをたとふ。【一六】亦知　吳も亦常人のごとく之を知る。【一七】宿昔　過去の時をいふ。【一八】鳳翔都　肅宗の鳳翔の行在所をいふ、鳳翔府扶風縣に在りし。【一九】金閨籍　名籍を金馬門に通じおく、仕官すること、已に屢〻見ゆ。【二〇】蒙塵　よそへ出奔せられ居りしこと。【二一】東郊　長安、洛陽二京の東の野外。【二二】嗜長戟　長きほこをふるふ者におほひかぶされてくらくなつてゐる。【二三】兵家　兵法家。【二四】間諜　敵方へいれてあるしのびのもの、まはしもの。【二五】此輩　間諜をさす。【二六】接跡　ひきぎりなしに多くあること。【二七】臺中　御史臺のうち、臺は御史の役所の名。【二八】領擧劾　領は支配すること、擧劾は善なるを推擧し罪あるを彈劾するなり、劾はかんがへきはむる義なり。【二九】君　吳をさす。【三〇】剖析　解剖し分析する、こまかな點をしらべること。【三一】無辜　罪なきもの、舊解に良民にして間諜なりと疑はるるものあり、吳その無罪を辨ずるなりといへり。余案ずるに問題の被疑者が良民なるや否は詩句だけにては明らかならず、敵の間諜が入りこみて甲なる顯官が賣國・內應等の事ありと言ひふらしたる時にも甲は被疑者たるべく、而して侍御史は其の無罪を主張し得べけん、上官が他人を誣ひんとするは一の良民に對するよりも寧ろこの甲の場合のごときが多からん、余は吳侍御の場合は甲の場合なりと假定して此詩をとく。【三二】分黑白　正邪曲直を區別す。【三三】上官　吳のうはやく。【三四】權許與　かりに吳の說をみとめ贊成する。【三五】失意　吳、上官の意を失ふ。【三六】朝廷　朝廷の大臣等。【三七】非不知　事情を知らぬにあらず、知つてはゐるがそのまま棄ておきて吳を救はうとせぬをいふ。【三八】休歎息　吳がさとりてなげきもせぬこと、朝廷非不知・閉口休歎息の二句はもと仲尼甘旅人・向子識損益二句の下にありしものなるを、仇氏は樊晃本によりて之をここに引きあげて置きたるなり、一說に朝廷二句を「損益」の下におき、朝廷非レ不レ知閉レ口休二歎息一とよませ、「朝廷はおまへの心事を知つてくれてゐるのであるからおまへはだまつてゐてなげくな」と慰安する義なりとせり。【三九】閉口　吳がなにもいはぬこと。【三九】休歎息　吳がさとたさまをたとへていふ。仲尼は孔子の字。【四〇】旅人　孔子はつねに東西に奔走したびびとの生活をなせり。【四一】向子　後漢の向長、字は子平、易を讀みて損・益・の卦に至り喟然として嘆じて曰く吾已に富の貧に如かず、貴の賤に如かざるを知る、但未だ死の生に何如なるやを知らざるのみと。【四二】識損益　上にみゆ。【四三】仲尼二句　吳の悟りきつ【四六】丹陛　あかぬりの殿陛、(こてんのなかの臺のきざはし)。【四七】咫尺　八寸一尺、まぢかのこと。【四八】相看　うちみつつ。【四九】受狼狽　狼狽はうろたへる貌、狼狽を受くるとは吳が罪せられて地方へ出ればならぬ樣になりしことの結果を見るに至りしないふ。【五〇】至死　いのちを失ふにいたるとも。【五一】行邁　みちをゆくこと。【五二】心多違　この違の字詩經に離去の義に用ふると同じからず、違背の義なり、心多違は心に背くことのみ多きをいふ。【五三】出門　自家の門外へいづること。【五四】無與適　無レ與二我意一適者とをいふ、おもしろからぬことばかり。【五五】公　吳をさす。【五六】明義　顯明なる義理、友人を救ふべきことの當然をいふ。【五七】惆悵　うらむ貌。【五八】頭更白　本來白き頭が自責の念のためいつそうしろくなる。

【題義】乾元二年十月、作者秦州を去り、成州同谷に赴かんとす。舊說には作者その途中に兩當縣を經過して吳侍御が宅によぎりたりといへり。余は果して然りとも信ずる能はざるも、しばらく之に依る。又舊說には吳侍御は時に長沙にありて兩當縣の宅は主人不在なりしものなりといへり。これ本詩の「幾年長沙客」を實句とみなし譬喩と見ざるの誤なり。余は作者わざわざ吳侍御をたづね、面のあたり陳謝したる作なりとみるものなり。

【詩意】冬ぞらの縣城に朝の煙がうすくういてをり、谷間に落ちる葉の色が赤くみえる。いま遠くからつめたい風がやつてきて、おまへのかはぞひの宅のところを吹いてゐるのだ。をれまがつたみぎは には鵲雞がなきさけんでゐる、田野のたてよこの路に日の光がさしそへてゐる。誠みにおたづねする、侍御史たる君はここへながされものになつていくとせにならるるのか、と。おまへはたとへばあはれにも木からはなれた狖の樣なものであり、弓矢を避けて高く飛びあがつてゐる雁の樣なものだ。おまへとてもこんなところに居るより故郷の方がいくら樂しいかは知つてゐるのだが、おまへは昔のことは思はうとはしないのだ。』むかし鳳翔の行在所に居たときは、我我は共に名籍を宮門に通じて仕官をした。その頃は天子さへ賊のために逃げ出しあそばされて、兩京の東の野外は長戟で暗くなつてゐた。兵法家の道では敵の間諜といふことをいみきらふのだが、いつもそんな奴等がひきぎりなしにはひつてゐた。（その奴等はどんなことをたくらむかしれたものでない。）このをり君は御史臺で善人を擧げ惡人を彈劾することを掌り、あくまで用心して事件の內容を微細にしらべてゐた。そのため或る嫌疑のあつた人物があつたが、無罪の人なのだからそれを殺すには忍びないで、はつきり黑白を辨別してやつた。君の長官はうはべはかりに君の意見に贊成したが、君はその長官のごきげんをそこねてとうとう官位をしりぞけてゐなかへうつされることになつた。朝廷でもその眞相はわかつてゐないではなかつたが君のためにどうともしてはくれぬ。君はそれでもだまつて口を閉ぢてなげきもせぬ。あだかも孔夫子が東西に奔走する旅人たるを甘んじ、向子平が損益の卦を讀んで富貴貧賤の道理をさとつてゐたとおなじ樣な態度でゐた。』　自分はその時左拾遺の官をかたじけなうしてをり、天子の殿陛のまぢかくお仕へまをしたのである。しかるにこのさまをみてゐながら君が地方へ遷謫される樣なさわぎを見るに至つたことは、なんとも申譯のないことで死にいたるとも自己の責をふさぐことはできぬのである。自分はこれから旅路にでかけるのであるが心にかなはぬことが多いのだ、門外に一歩出れば自分の氣にかなふことはすこしも無いのだ。あなたに對してはしかく明明白白の義理にさへそむいてをる、これをおもへばうらめしくおもはれてたださへ白い頭が一層白うなる樣なきもちがする。』

發秦州(一)　【原注】乾元二年自秦州赴同谷縣(二)紀行。

秦州より發す　【原注】乾元二年秦州より同谷縣に赴くとき行を紀す。

我衰更懶拙(三)。生事不自謀(四)。
無食問樂土(五)。無衣思南州(六)。
漢源十月交(七)。天氣如涼秋(八)。
草木未黃落(九)。況聞山水幽。
栗亭名更嘉(一〇)。下有良田疇(一一)。
充腸多薯蕷(一二)。崖蜜亦易求。
密竹復冬笋(一三)。清池可方舟(一四)。
雖傷旅寓遠(一五)。庶遂平生遊(一六)。
此邦俯要衝(一七)。實恐人事稠。
應接非本性(一八)。登臨未銷憂。
谿谷無異石(一九)。塞田始微收。
豈復慰老夫(二〇)。惘然難久留(二一)。
日色隱孤戍(二二)。烏啼滿城頭(二三)。
中宵驅車去(二四)。飲馬寒塘流(二五)。
磊落星月高(二六)。蒼茫雲霧浮。
大哉乾坤內(二七)。吾道長悠悠(二八)。

我衰へて更に懶拙なり、生事自ら謀らず。
食無うして樂土を問ひ、衣無うして南州を思ふ。
漢源十月の交、天氣、涼秋の如し。
草木未だ黃落せず、況んや山水の幽なるを聞くをや。
栗亭名更に嘉し、下に良田疇あり。
腸に充つるに薯蕷多く、崖蜜亦求め易し。
密竹には復冬笋あり、清池、舟を方す可し。
旅寓の遠きを傷むと雖も、庶はくは平生の遊を遂げむ。
此の邦、要衝に俯す、實に恐る人事の稠きを。
應接、本性に非ず、登臨未だ憂を銷せず。
谿谷、異石無く、塞田始めて微しく收む。
豈に復た老夫を慰めむや、惘然、久しく留まり難し。
日色、孤戍に隱れ、烏啼きて城頭に滿つ。
中宵車を驅り去り、馬に飲ふ寒塘の流れ。
磊落、星月高く、蒼茫、雲霧浮ぶ。
大なる哉乾坤の內、吾が道長く悠悠たり。

【字解】【一】秦州　甘肅省秦州。【二】同谷縣　甘肅省階州の成縣なり、成縣はもと西康州治たり、唐の貞觀の初には成州に屬せしめ、廢康州の同谷縣を兼ね領す、天寶の初同谷郡とし、乾元の初復成州となす、作者いま同谷縣といふときは當時かく稱せしとみゆ、位置は秦州の殆ど正南にあたれり、九域志には秦州から成州まで西南二百六十里とあり。【三】懶拙　ぶしやうにて世わたりべた。【四】生事　くらしむきのこと。【五】樂土　安樂なところ。【六】南州　南方の地方。【七】漢源　漢水の發源地。成縣には東河源と南河源ありてともに飛龍峽に入りて嘉陵江に注ぐ、而して嘉陵江は卽ち漢水の上流の名なり。【八】十月交　詩經の「十月之交」の毛傳には交を日月の交會ととけり、ここは蓋し十月十一月の際をさせるものならん。【九】黃落　きばんでおちる。【一〇】栗亭　隋時の縣の名、成縣の東五十里にあり、秦州を去ること百九十五里。【一一】田疇　穀の田を「田」、麻の田を「疇」といふ。【一二】薯蕷　やまのいも。【一三】崖蜜　蜜蜂がかけにてつくる「みつ」。【一四】密竹　こんではえた竹。【一五】冬笋　冬できるたけのこ。【一六】清池　池の名は詳ならず。【一七】方舟　方は二つならべること。【一八】庶　庶幾、ねがはくは。【一九】此邦　秦州をさす。【一〇】俯要衝　俯は臨のごとし、要衝は交通の要路をいふ。【一一】人事稠　世俗の事務多し。【一二】應接　うけこたへをする、【一三】登臨　その地の山に登り水に臨みしてあそぶこと。【一四】異石　非凡の形狀をした石。【一五】塞田　とりでのある地の田。【一六】微收　すこし收穫がある。【一七】老夫　自ら稱す。【一八】惘然　氣のぬけた貌。【一九】孤戍　孤立せる屯兵所。【二〇】城頭

秦州の城のうへ。【二】　寒塘　冬のつつみ。【三】　磊落　ばらばらにはなれてある貌。【三】　蒼茫　はつきりせぬ貌。【三四】　吾道　有形の道路をいひ、裏面には履みおこなふみちの義もあらん。【三五】　長　ながく、とこしへに、常とも通ず、つねにの意。【三六】　悠悠　はるかなる貌。

【題義】　作者秦州にも居ることができなくなり、乾元二年の十月に秦州から出發して成州同谷縣に赴いた、その途中の紀行をかいたのが以下十二首で。是はその第一首である。作者時に四十八歳。同谷に赴いた理由は詩のなかにみえてゐる。

【詩意】　自分は老衰しかかつてからこれまでよりも一層ぶしやうで世わたりべたになり、くらしむきのことなど自分で工夫しなくなつた。いまや食物が無いからどこか安樂にくらせる土地はないかと人にたづね、衣が無いからあたたかい南方の地方のことをおもふのである。』　漢水の發源地（卽ち同谷の地方）は十月十一月のあはひにも、天氣がすずしい秋のやうで、草木も黃ばんで落ちぬといふことであり、ましてそこには山水の幽邃なものがあると聞いてゐる。栗亭などといふといかにも栗の產地らしくいい名であり、その下には良い田地がある、やまのいもが澤山あつて腹に十分つめこむことができるし、崖に產する蜂蜜もたやすく求められる。竹の密林には冬の筍があり、すんだ水をたたへた池には舟をならべて遊ぶこともできる。旅寓としては遠すぎるといふ缺點はあるが、どうかあちらへ往つてひごろの遊びを遂げたいとおもふのである。』　ここの秦州は交通の要路にのぞんでゐて、俗事が多すぎることを恐れるのである。雜多の人間に應接することは自分の本性でもなく、ここでは山水に登臨してみても自分の憂を銷すには足らぬのである。谷をのぞいても奇妙な石がみらるるでなく、とりでのある田地からはやつとすこし收穫ができた樣の始末だ、これではどうして自分を慰めることができよう。自分は生計の手段がこんなであるためぼんやりとしてしまひ、とてもここにはながくとどまつてゐるわけにゆかぬのである。（それだからここを立ち去るのだ。）』　さて出發すると、太陽の色はさびしい屯兵所のあたりにかくれてしまひ、城頭にはいつぱい烏が啼いてゐる。よなかに車を驅りだして、冬のつつみの流れで馬に水をのませる。頭上は散亂して星や月が高くかがやいてゐる、前面には雲や霧がたちこめてはつきりとは見えぬ。ああ大なるかな天地の內、吾がゆくべき道程は永久に悠悠ときはまりなく前面によこたはつてゐる。』

赤谷

天寒霜雪繁。遊子有所之。
豈但歲月暮。重來未有期。
晨發赤谷亭。險艱方自茲。

天寒くして霜雪繁し、遊子、之く所あり。
豈に但歲月の暮るるのみならむや、重ねて來らむこと未だ期あらず。』
晨に發す赤谷の亭、險艱方に茲自りす。

亂石無改轍。我車已載脂。
山深苦多風。落日童稚飢。
悄然村墟迥。煙火何由追。』
貧病轉零落。故郷不可思。
常恐死道路。永爲高人嗤。』

亂石、改轍無く、我が車已に載ち脂さす。
山深くして多風に苦しむ、落日、童稚飢う。
悄然たり村墟の迥なるに、煙火何に由りて追はむ。』
貧病轉た零落す、故郷、思ふ可からず。
常に恐る道路に死して、永く高人に嗤はるるを爲さむこ
とを。』

【字解】〔一〕赤谷　明一統志に赤谷は秦州の西南七里にあり、中に赤谷川ありと、是ならん。〔二〕遊子　たびびと、自己をさす。〔三〕之　ゆく。〔四〕豈但二句　かかる故に心さびしとの意をふくめたり。〔五〕歲月暮　十月末の頃なればとしくれかかるといふなり。〔六〕重來　二度ここへくる。〔七〕期　時期。〔八〕亭　旅客のやすみば。〔九〕茲　此地をいふ。〔一〇〕亂石無改轍　「北征」の石戴古車轍と同意、石亂れたちてそれがみな同一のわだちをいただいてゐる、但し我よりいふときは亂石のための故に別途を取らずそのおなじ石みちをゆくことをさす。〔一一〕載脂　詩經の語、すなはちあぶらさす、車のくさびにあぶらをくれること。〔一二〕童稚　こどもら。〔一三〕悄然　しょんぼり、心さびしき貌。〔一四〕村墟　村の廢墟、「むら」をいふ。〔一五〕煙火　村人のたく炊烟をさす。〔一六〕追　それにおひつく、そこまで達するをいふ、「追」は「煙火」を支配する動詞なり。〔一七〕貧病　貧乏と病氣とにより。〔一八〕不可思　故郷は勝手に思うてもよいわけであるが、今は思ふことさへできない、とは悲慘の極なり、蓋し故郷已に摧殘せられ歸るべき見込みも絶えたればなり。〔一九〕死道路　「論語」の語、みちばたにのたれ死にする。〔二〇〕爲高人嗤　爲高人所嗤の略、高人は德のたかい人、嗤は「わらふ」。

【題義】同谷紀行の第二首にして秦州を發して最初のかかりの難場所たる赤谷といふ處をとほるときの詩なり。

【詩意】天が寒く霜雪がしげくおく、このときたびびとたる自分は一地をさしてゆくのである。歲のくれかかるといふためばかりではない、ここは二度くるといふときもありはすまい。（とおもふと悲しいのである。）』日の出のころ赤谷の亭から出發する、道路の險難はここからはじまるのである。石の亂れ立つ路だがその同じわるいみちを車をはしらせ、自分の車にははやたびたびあぶらをさす。山はふかくなつて風の多く吹くのにこまるところへ、日も落ちかかつてこどもらはひもじがる。村さとをながめるとずつと遠方にある、どうしたらあんなところまで追ひつけようか、など心ぼそくおもふ。』自分は貧乏と病氣によつていよいよますますおちぶれた。今は故郷のことは思ふことさへかなはぬ。いつも自分は途中でのたれ死にをして、高德ある人のものわらひになりはせぬかときづかうてをる。』

鐵堂峽

山風吹遊子。縹緲乘險絶。
硤形藏堂隍。壁色立精鐵。

鐵堂峽

山風、遊子を吹く、縹緲、險絶に乘ず。
硤形、堂隍を藏す、壁色、精（積）鐵立つ。

徑摩(八)穹蒼蟠。石與厚(一〇)地裂。
修纖(一一)無垠竹。嵌空(一二)太始雪。』
威遲(一五)哀壑底。徒(一七)旅慘不悅。
水寒長冰横。我馬骨正折。
生涯抵(一八)弧矢。盜賊殊未滅。
飄蓬(二〇)踰(二一)三年。回首肝肺熱。』

【字解】〔一〕鐵堂峽　秦州の西南六十五里許の處にある峽の名、峽は山間夾水曰峽とありて、山かひのこと。〔二〕縹緲　氣連りてかすかにみゆるさま。〔三〕險絶　絶險と同じ、絶ははなはだしきをいふ。〔四〕硤形　硤は峽と別字なるも同義に用ひたり、或は寫訛か。〔五〕藏堂隍　堂はたかいざしき、隍は「城のからぼり」をいふ、山體を堂とみ、谿谷を隍とみたるならん、ここの峽の形はここに堂と隍とを藏するがごとし、余往年嘗て此句に別解を取れることあるも今此に訂正す。〔六〕壁色　山の崖壁のいろ。〔七〕精鐵　精の字本來積に作る從ふべし、仇氏此句五字みな入聲の字のみにて讀むに順ならずとて精の字に從へるも、余は積の字に從ふ。〔八〕摩　こする、接近の甚しきをいふ。〔九〕穹蒼　弓なりに彎曲せるあをぞら。〔一〇〕厚地　大地をいふ。〔一一〕修纖　修は脩の通借、ながし、纖はほそし。〔一二〕無垠　はてしなし、廣がりをいふ。〔一三〕嵌空　うつろなる貌、玲瓏といふの類、余嘗て「空にはめこむ」義とし峰頂の雪をさすと考へたり、案ずるにこれ谿底に存する雪のさまをいふ、次の「哀壑」へかかる語なり、今訂正す。〔一四〕太始雪　天地のはじめ以來とけぬ雪。〔一五〕威遲　道のうねうねするさま。〔一六〕哀壑　あはれをもよほすたに。〔一七〕徒旅　行旅のなかま、作者の一行のものをさす。〔一八〕抵弧矢　抵は「あたる」、弧矢は易繫辭の弧矢之利、以威天下を用ふ、弧矢は弓矢、官軍の武力をさす、「あたる」とはそのときにぶつつかりしをいふ。〔一九〕盜賊　賊軍をさす。〔二〇〕飄蓬　秋のよもぎの葉のひるがへるごとく身の轉轉してあるくをいふ。〔二一〕踰三年　天寶末よりかぞへて今年は三年以上になる。

【題義】同谷紀行の第三首。鐵堂峽經過のときの作。

【詩意】山の風が旅人たる自分を吹く。自分は空氣のかすかにつらなつてゐる非常な險阻なところをのぼつてゆく。この山かひの形は堂のそばに空堀をほつてある樣なさまで、かたへの絶壁の色は堆積した鐵が立てられてる樣だ。山のこみちはあをぞらを摩するほどに高くわだかまつてをる。石は大地と共につんざかれたりしてゐる。峽側にはながくほそい竹林が際限もなくつづいたり、ひくい處には太古以來とけぬ雪がすきとほる樣にきれいに横はつてゐる。』かくしてうねりくねつてさびしいたにの底の方へくだると、一行皆のものはものがなしくぶきげんになる。谷川の水は寒くしてながい氷塊などがあり、之にふれば我我の馬は骨が折られるほどである。自分の生涯は盜賊がおこつて官軍がそれを討伐するため弓矢をうごかすの時にあたつた。不幸にして盜賊どもはまだほろびぬ。もはや飄泊生活を送ること三年以上にもなる、首をめぐらしてこんなことをかんがへるとうれひのあまり肝や肺が火のやうにあつくなるのをおぼゆるのである。

鹽井

鹵中草木白。青者官鹽煙。
官作既有程。煑鹽煙在川。
汲井歲搰搰。出車日連連。
自公斗三百。轉致斛六千。
君子愼止足。小人苦喧闐。
我何良歎嗟。物理固自然。

鹽井

鹵中、草木白し、青き者は官鹽の煙なり。
官作既に程有り、鹽を煑れば煙、川に在り。
井を汲むこと歲に搰搰たり、車を出だすこと日に連連たり。
公自りす斗に三百、轉致す斛に六千。
君子、止足を愼む、小人、喧闐なるに苦しむ。
我何ぞ良に歎嗟せむ、物理固より自ら然り。

【字解】【一】鹽井　しほをくみ取る井なり、元和郡國志に曰く、鹽井は成州長道縣の東三十里に在り、水、岸と齊し、鹽極めて甘美、之を食すれば氣を破る、鹽官の故城は縣の東三十里に在り、嶓冢（山の名）の西四十里に在り、相承けて煑ることを營む、味、海鹽と同じ、と。長道縣は今の鞏昌府西和縣にあり、成州よりは西北にあたる、以て鹽井の位置を知るべし。【二】鹵　鹽分を含んだ地をいふ。【三】官鹽煙　官製のしほをやくけむり。【四】官作　官の作業。【五】程　定めの課程、製鹽額の進度。【六】歲　一歲のうち。【七】搰搰　力を用ふる貌。【八】田車　できたしほを積んだ車を出すこと。【九】日日　日日。【一〇】連連　ひきつづく貌。【一一】自公　官から拂ひさげること。【一二】斗三百　一斗につき三百錢。【一三】轉致　拂ひさげをうけた商人が需用者へうつし賣ること。【一四】斛六千　一石につき六千錢、卽ち一斗につき六百錢にして倍の利得をとる。【一五】愼止足　謹愼して止まり足ることをつとむ。老子に知レ止可ニ以不レ殆とあり、張協の詩に達人知ニ止足一とみゆ。【一六】喧闐　やかましくさわぐ、鹽價のたかきについて不平の聲多きをいふ。【一七】我何一句　自己をとがめたる語、實は深くなげくなり。

【題義】同谷紀行の第四首。鹽井をすぎて鹽商の暴利をむさぼるをなげきたる詩なり。

【詩意】鹽分をふくんだ地方は草木の葉まで白くみえてゐるが、そこに青青とたちのぼるのは官製のしほをやくけむりである。官業には一日の製鹽額のきまりがある、それでせつせとしほをにるので煙が川のうへまで横はるのである。年中骨を折つて井から鹽をくみだし、毎日ひききりなしにできた鹽を車につんではつみいだす。官から受けだす價は一斗三百錢だが、人民に轉送される時には一斗六百錢になる。君子たるものは足ることを知つて暴利をむさぼらぬ樣にせねばならぬ。さうでないと細民たるものは喧騷を極めてしかたのないものだ。かくいうたとてむだごとだのになんで自分はそれをなげくのであるか。細利を爭ふことは物ごとの道理に於てあたりまへのことではないか。

寒峽

行邁日悄悄。山谷勢多端。
雲門轉絕岸。積阻霾天寒。
寒硤不可度。我實衣裳單。

寒峽

行邁、日に悄悄たり、山谷、勢、多端なり。
雲門、絕岸轉ず、積阻、天寒に霾る。
寒硤、度る可からず、我實に衣裳單なり。

況當仲冬交。泝沿增波瀾。況んや仲冬の交に當り、泝沿、波瀾を增すをや。
野人尋煙語。行子傍水餐。野人、煙を尋ねて語り、行子、水に傍うて餐す。
此生免荷殳。未敢辭路難。此の生、殳を荷ふことを免る、未だ敢て路の難きを辭せず。

【字解】【一】寒峽　峽の名か、單に寒天の峽をいふか不明。【二】行適　ゆきゆく。【三】悄悄　心のうれふるさま。【四】多端　一樣ならざるをいふ。【五】雲門　雲の横はれる門、卽ち絶岸をさす。【六】轉　歩につれてかはるをいふ。【七】絶岸　きつたての崖岸。【八】積阻　積みかさなりたる險阻の地。【九】霾　つちの雨ふる。【一〇】天寒　さむぞら。【一一】寒峽　題の寒峽と同じ【一二】度　わたる、こゆること。【一三】泝沿　或は水をさかのぼり、或は水にそふ。【一四】野人　附近に住む農民。【一五】行子　旅行するもの、自己の一行をさす。【一六】荷殳　「伯兮」の詩に伯也執殳、爲王前驅とみゆ、殳は一丈二尺のほこなり、荷殳とは兵役に從事するをいふ。

【題義】同谷紀行の第五首。寒峽のさまと、經過の感想をのぶ。

【詩意】日日旅行をつづけてゆくと心がものがなしくなる、それは山や谷のありさまがますますさまざまになつてくるからだ。雲の門ともみまがふ樣なきつたての岸がうつりかはつてゆくし、さむぞらのをりからいくへもの險阻のところに土の雨がふつたりする。自分はうすい衣裳をきてをるのだ、かやうな寒い山あひはなかなかこすことがむつかしい。そのうへ十一月頃のこととて谷川にそうたりさかのぼつたりすると波もよけいにおこるのである。かかるところで田野の人人は煙のなかで相手をたづねて話をしてゐるのもあるし、また自分等は川べりで食事を取つたりする。なかなか難儀なことではあるが、すでに此の世に於て自分は武器をになうて兵役に從ふ苦しみから免れてゐる自分である、それをおもへば道路の難儀をするぐらゐのことは辭退する所ではない。

法鏡寺

身危適他州。勉强終勞苦。身危くして他州に適く、勉强するも終に勞苦なり。
神傷山行深。愁破崖寺古。神は傷む山行の深きに、愁は破る崖寺の古りたるに。
嬋娟碧蘚淨。蕭摵寒籜聚。嬋娟として碧蘚淨く、蕭摵として寒籜聚る。
回回山根水。冉冉松上雨。回回たり山根の水、冉冉たり松上の雨。
洩雲蒙清晨。初日翳復吐。洩雲、清晨に蒙ふ、初日翳はれて復た吐かる。
朱甍半光炯。戶牖粲可數。朱甍半ば光炯、戶牖、粲として數ふ可し。
拄策忘前期。出蘿已亭午。策に拄へられて前期を忘る、蘿を出づれば已に亭午なり。
冥冥子規叫。微徑不敢取。冥冥、子規叫ぶ、微徑、敢て（復）取らず。

【字解】〔一〕法鏡寺　寺の名、所在不明、ただこれ尙奉州にあるならんといへり。〔二〕適　ゆく。〔三〕勉强　苦をいとふまじとつとむるなり。〔四〕神　精神。〔五〕愁破　なぐさめらるること。〔六〕崖寺　法鏡寺をさす。〔七〕嬋娟　うつくしき貌。〔八〕薜　ぜにごけ。〔九〕蕭摵　さびしきさま。〔一〇〕篠　竹のかは。〔一一〕回回　紆回のさま。〔一二〕冉冉　次第に生ずるさま。〔一三〕洩雲　山よりもれ出づる雲。〔一四〕蒙　おほひかぶさる。〔一五〕清晨　はれたあさ。〔一六〕初日　出そめの太陽。〔一七〕翳　雲のかげにせらるること。〔一八〕吐　雲からはきだされる。〔一九〕朱蕊　あかきいらか。〔二〇〕炯　かがやく。〔二一〕桑きらめくさま。〔二二〕可數　一一かぞへることができる。〔二三〕挂策　つゑに身をささへられる、つゑをつくこと。〔二四〕前期　將來の旅程期限。〔二五〕田蘿　蘿はひめかつら、松柏にはひかかるものなり、蘿の一字にて寺林をさす。〔二六〕亭午　正午。〔二七〕冥冥　くらがりのさま。〔二八〕子規　ほとゝぎす。〔二九〕微徑　ほそいこみち、この寺へはひるみち、蓋し寺は通路よりこのこみちをとほりていりこむなるべし、寺より出づればこの徑はふたたびとほることなし。〔三〇〕不敢（復）取　敢は「あへて」、おしきつての義、復は「ふたたび」の義、孰れにても通ずるも余は「復」の字よろしかとおもふ、取とは取ㇾ徑、卽ち「この徑に由る」をいふ。

【題義】同谷紀行の第六首。法鏡寺のさまをのぶ。

【詩意】自分は一身の安危にせまられて他の州へゆくのであるが、骨折りごとだとおもふまいとはするがつまり骨折り仕事である。あまりに山みちをふかくはひるので精神はいたむが、にはかに崖のところに古寺がみえたので愁のこころがうち破られた。みれば庭前に青ごけがきよらかにしきつめてある、竹の皮が風に吹きよせられてゐる。山の下の水はうねつて音をたてて流れ、松の上からはぽつりぽつり雨がふりそそぐ。すがすがしいあしたながらに峰からわきでた雲がおほひかぶさつてゐたが、かげつた初日がまたによつきり吐きだされた。いままでうすぐらくあつた朱のいらかも半分はきらきらとみえ、戸や牖も明かに幾枚とかぞへられるやうになつた。景色にみとれて杖をついたままうつかりゆくさきの旅程をもうち忘れてゐたが、氣がついて寺林の蘿蔭からたちでるともうまひるどきだ。くらがりのところで子規がなきさけぶ。この寺への小みちは今度がとほりはじめでまたとほりをさめなのである。

青陽峽

塞外苦厭山。南行道彌惡。
岡巒相經亙。雲水氣參錯。
林迴硤角來。天窄壁面削。
磎西五里石。奮怒向我落。
仰看日車側。俯恐坤軸弱。
魑魅嘯有風。霜霰浩漠漠。
昨憶踰隴坂。高秋視吳嶽。

青陽峽

塞外、苦だ山に厭く、南行すれば道彌惡し。
岡巒、相經亙す、雲水、氣、參錯す。
林迴に硤角來り、天窄くして壁面削る。
磎西、五里の石、奮怒、我に向ひて落つ。
仰いで日車の側くを看、俯して坤軸の弱からむことを恐る。
魑魅嘯いて風有り、霜霰、浩として漠漠たり。
昨、憶ふ隴坂を踰えしとき、高秋、吳嶽を視き。

東笑蓮華卑。北知崆峒薄。
超然伴壯觀。已謂殷寥廓。
突兀猶趂人。及茲歎冥漠。

【字解】〔一〕青陽峽　秦州の南路にあたれる峽の名、所在不明。〔二〕塞外　秦州地方をさす。〔三〕南行　同谷をさして南にゆく。〔四〕經亙　たてにはへ、よこにわたる。〔五〕氣　雲水の氣。〔六〕參錯　いりまじる。〔七〕林　峽角の林。〔八〕硤角　峽角に同じ、峽の一隅をいふ。〔九〕來　こちらが進むことなれども峽角を主にしていふ。〔一〇〕天窄　絶壁のひまよりながむる故に天はせまし。〔一一〕磎　谿と同じ、たに。〔一二〕日車側　日車は太陽をいふ、古傳説に太陽は車にのりてはしると考へらる、側は「かたむく」。〔一三〕坤軸弱　坤軸は地軸、現今といふ所の地軸とちがひ大地をささふる柱軸なり、弱とはこの厚地を載せるに力のたらぬこと。〔一四〕魑魅　人面獸身の山怪。〔一五〕浩　大なる貌。〔一六〕漠漠　ひろくよこたはる貌。〔一七〕昨憶　一に「憶昨」に作る、往月のことを追憶す、これは長安より秦州へ赴くときのことなり。〔一八〕隴坂　鳳翔府隴州西北にある大坂。〔一九〕吳嶽　鳳翔府汧陽縣西にある山。〔二〇〕蓮華　即ち華山、陝西西安府華陰縣にあり。〔二一〕崆峒　甘肅省平涼府の西にある山。〔二二〕薄　迫る、接近すること。〔二三〕超然伴壯觀・已謂殷寥廓　難解の句なり、余は倒叙とみる、故に二句前後置きかへてみるべし、「已謂」の句は過去に接し、「超然」の句は現在を併記す、已謂とは隴坂をこえたときもはやさやうにかんがへたといふなり、殷寥廓は吳嶽を主としていふ、殷は「當る」と訓ず、史記天官書の衡殷＝南斗」の「索隱」宋均が注に殷當也といへり、寥廓とは大空のひろきすがたをいふ、超然は衆山をたかく抜くさま、伴壯觀とはこの峽にて衆山をみおろす壯大ななめと、隴坂にて吳嶽を視しときのながめとが西敵しひとしきをいふ。〔二四〕突兀　つきたつさま、吳嶽の姿をいふ。〔二五〕猶趂人　今なほ我につきまとひ來る。〔二六〕及茲　茲とは現在の時をさす。〔二七〕歎　感歎する。〔二八〕冥漠　天道造化の力の不可測をいふ、冥暗茫漠としてはつきりせぬなり。

【題義】同谷紀行の第七首。靜陽峽の狀を寫し、兼ねて往月隴坂をこえしときのさまと對照してのべたり。

【詩意】塞外秦州のあたりから既に山にはあきあきするほどであつたが、同谷に向つて南行すると道路はいよいよわるい。岡や小山がたてよこにつらなつて、雲水の氣が互に相まじはる。遠くに峽角の林がみえるとやがてそれが自分の方へくる。斷崖の壁面は削るがごとくそそりたち天もせばめられてみえる。谿の西側およそ五里の間、巖石は怒つて我に向つて落ちんとしてゐる。仰ぎみれば太陽は早くかたむくかと疑はれ、俯して地にのぞめば地軸もこの險阻を載せるには力が足らぬかときづかはれる。風の鳴るのは魑魅が嘯くのであらう。霜や霰さへ吹かれてひろく敷かれてゐる。往の月に自分は隴坂を踰えたとき、秋ふかく吳嶽を視たことがあるが、あの時は、東は華山を卑しと笑ひ、北は崆峒山と相迫るをおぼえた。その時はやいかにも吳嶽は大空に當つた雄姿を逞しくしてをるものだと感じたが、この峽まできてもまた其の壯觀兩者匹敵してゐる。即ちかの吳嶽の突兀たる姿が現になほ我我をおひ來りつつあるので、是に於てか我我は造化の力の不可測なるを感歎せざるを得ぬ。

龍門鎮

細泉兼輕冰。沮洳棧道濕。

龍門鎮　細泉と輕冰と、沮洳、棧道濕ふ。

不レ辭辛苦行。迫二此短景急一。辭せず辛苦して行くを、此の短景の急なるに迫る。
石門雲雪隘。古鎮峰巒集。石門、雲雪隘ぐ、古鎮に峰巒集まる。
旌竿暮慘澹。風水白刃澀。旌竿、暮に慘澹たり、風水に白刃澀る。
胡馬屯二成皐一。防虞此何及。胡馬、成皐に屯す、防虞、此、何ぞ及ばむ。
嗟爾遠戍人。山寒夜中泣。嗟、爾、遠戍の人、山寒くして夜中に泣かむ。

【字解】〔一〕龍門鎮　甘粛階州成縣の東にありといへり、鎮は戍兵の屯する所なり。〔二〕細泉　ほそくながれるわきみづ。〔三〕兼「と」。〔四〕輕冰　うすくして浮べるこほり。〔五〕沮洳　しめりけのある地。〔六〕棧道　かけはしをわたした道路。〔七〕短景　日かげみじかし、十一月なれば日はやくくる。〔八〕石門　龍門の地形石壁立ちて門の如くなれるなり。〔九〕隘　其處をせまくする。〔一〇〕古鎮　即ちこの鎮所。〔一一〕旌竿　はたざを、鎮所にあるもの。〔一二〕慘澹　あたりの氣象ものがなし。〔一三〕白刃　戍卒の帶ぶる刀のしらは。〔一四〕澀　しぶる、さびて光らぬなり。〔一五〕胡馬　賊軍をさす。〔一六〕屯成皐　屯は「たむろする」、あつまること、成皐は漢時の縣名、今河南開封府汜水縣西北にあたり、洛陽の東方にあり、乾元二年九月に安祿山が將史思明、東京（洛陽）を陷れて齊・汝・鄭・滑四州に及ぶ、成皐は鄭州のあたりなり。〔一七〕防虞　賊軍をふせぎ、賊に備へる心くばりをする。〔一八〕此　龍門鎮の軍隊をさす。〔一九〕何及　おひつかぬ。〔二〇〕遠戍人　この鎮の戍卒等をさす、遠とは成皐方面とかけはなれしをいふ。

【題義】同谷紀行の第八首。龍門鎮を過ぎてその戍卒をあはれむ作。

【詩意】薄冰を帶びた細い泉が、じくじく流れだして棧道がしめつてゐる。そこを十一月の日脚のつまつて早く日のくれる時節に、辛苦をものともせずあるいてゆく。門形をなしてゐる石壁のところは雲や雪にふさがれてをり、その場所は峰巒が集中してゐるところである。鎮所の樣子をみると旌竿の色も夕暮にあたつて憂ひの色をふくんでをり、風に鳴る水流で戍卒がとがんとしてゐる白刃も光がない。いま胡賊の兵馬は遠く成皐のあたりに屯してゐる、それをふせぐにはこんな場所に鎮があつても間にあふことではあるまい。ああ汝等鎮をまもる人人よ、定めし山の中は寒くして夜なかに泣いてゐることであらう。まことに氣の毒なものだ。

石龕

熊羆咆二我東一。虎豹號二我西一。熊羆、我が東に咆え、虎豹、我が西に號ぶ。
我後鬼長嘯。我前狨又啼。我が後には鬼、長嘯し、我が前には狨又啼く。
天寒昏無レ日。山遠道路迷。天寒くして昏れて日無く、山遠くして道路迷ふ。
驅レ車石龕下。仲冬見二虹霓一。車を驅る石龕の下、仲冬、虹霓を見る。
伐レ竹者誰子。悲歌上二雲梯一。竹を伐る者は誰が子ぞ、悲歌して雲梯に上る。
爲レ官採二美箭一。五歲供二梁齊一。官の爲めに美箭を採り、五歲、梁齊に供す。

苦云直幹盡。無以應提攜。
奈何漁陽騎。颯颯驚蒸黎。

苦に云ふ直幹盡きて、以て提攜に應ずる無しと。
奈何ぞ漁陽の騎、颯颯として蒸黎を驚かすや。

【字解】【一】石龕　龕は石室なり、かかるものあるによりて其地の名とせるならん、所在不明。【二】咆　ほゆ。【三】狨　猿猴のたぐひにて金色の尾を有すといふ。【四】仲冬　十一月。【五】虹霓　共に「にじ」のこと、明暗の差あり。【六】雲梯　たかいはしご。【七】五歳　天寶十四載安祿山反してより乾元二年までなり。【八】梁　河南地方。【九】齊　山東地方。【一〇】苦云　苦とはこまつた樣子をすること。【一一】直幹　まつすぐなみき。【一二】提攜　射手が手にてもつこと。【一三】奈何二句　詩人の語。【一四】漁陽騎　漁陽は祿山の根據地、今の直隸順天府地方、これ賊騎をさす。【一五】颯颯　風の吹く貌。【一六】蒸黎　人民のこと、「無家別」を見よ。

【題義】同谷紀行の第九首。山中の竹きりを見て世亂をいためる作。

【詩意】東には熊や羆がほえる、西には虎や豹がさけぶ。うしろには山鬼がうそぶく、前には狨がなく。（おそろしいことだ。）そらは寒く、たそがれて日は沒してしまひ、山みちとほくして道路にゆきまよふ。あだかも石龕のもとに車を驅りたててくると仲冬であるのに「にじ」がみえる。（時ならぬことだ。）このときどこのものかしらぬが、悲しき歌をうたひながらたかいはしごにのぼつて竹を伐つてゐるものがある、これは政府のためにりつぱな箭竹をとつて五年のあひだ梁・齊の地方へ供給してゐるのだ。そのものにきくとこまつた樣にして、「もうまつすぐな竹のみきはなくなつて、兵卒のもちものに應ずることができぬ」といふのだ。ああ、なんであの漁陽の叛騎らは風の吹きまくる如く人民を驚かすのであらうか。

積草嶺【原注】同谷界。

連峰積長陰。白日遞隱見。
颼颼林響交。慘慘石狀變。
山分積草嶺。路異鳴水縣。
旅泊吾道窮。衰年歲時倦。
卜居尙百里。休駕投諸彥。
邑有佳主人。情如已會面。
來書語絕妙。遠客驚深眷。
食蕨不願餘。茅茨眼中見。

積草嶺【原注】同谷の界なり。

連峰、長陰積めり、白日遞に隱見す。
颼颼として林響交はり、慘慘として石狀變ず。
山は分る積草嶺、路は異なり鳴水縣。
旅泊、吾が道窮す、衰年、歲時に倦む。
居を卜するは尙百里、駕を休めて諸彥に投せむ。
邑に佳なる主人有り、情、已に會面するが如し。
來書、語、絕妙なり、遠客、深眷に驚く。
蕨を食うて餘を願はず、茅茨、眼中に見ゆ。

【字解】【一】積草嶺　原注に同谷の界なりとあり、詩中に卜居尙百里とあれば、この嶺は秦州と成州との界に在りて同谷を距ること百里手前のところとみゆ。【二】長陰　長距離にわたるくもり。【三】颼颼　風のおとのさま。【四】慘慘　おそろしきさま。【五】

山分　このみねにて二地のわかれめとなるをいふ、謂はゆる分水嶺なり。【六】路異　わかれぢのこと。【七】鳴水　縣の名、陝西漢中府略陽縣の西にあり。【八】吾道窮　道とは有形の道路をさす。【九】衰年　老衰のとしごろをいふ。【一〇】歲時　一歲四時、旅行でくらす一年をいふ。【一一】休駕　車駕を休息させる、おちつくをいふ。【一二】投諸彥　投はとどこんでゆくこと、諸彥とは同谷の地になる衆くの賢人たち、舊知の人人をさす。【一三】邑　同谷縣。【一四】佳主人　よき主人、同谷の縣宰なるべし。【一五】來書　先方からよこしたてがみ。【一六】語絕妙　非常にいい文句。【一七】遠客　遠方の客、自己をさす。【一八】深眷　先方がふかくめをかけてくれること。【一九】蕨　ぜんまい、粗食をいふ。【二〇】不願餘　餘とはそれ以外の事をさす。【二一】茅茨　自己の住むべき同谷の屋舍のかやぶきのやれ。【二二】眼中見　實際見ゆるにはあらず、心眼にてみとむるなり。

【題義】同谷紀行の第十首。いよいよ秦州のみをさめとなる積草嶺と稱する分水嶺での作。

【詩意】峰つづきていつまでもくもりがつづく、そのひまから太陽が見えたり、隱れたりする。がさがさと風がふいて林中のさまざまのひびきがいりみだれてきこえ、であふ所の巖石の形狀は刻刻恐ろしげなすがたにかはる。ここの嶺が同谷との分水嶺であり、ここの路は鳴水縣への通路とべつべつになるところだ。ここで自分の旅路もゆきつまりだ、この老衰では一年通じての旅にはあきあきする。ここから同谷の新住宅まではまだ百里ある、そこへついたら早く車をおろして知りあひの諸君の處へとびこまう。あの土地にはよい主人がゐて自分を迎へてくれる、逢はぬさきからこころもちだけはもはや面會した樣な氣がする。先ごろよこしてくれた手紙の文面では何といふ親切ないいことばがかいてあつたであらう、遠方の客たる自分はただただそれほどまでこちらを愛してくれるのかと驚くばかりだ。自分は蕨でもたべて飢がしのがれさへすればいいのでそのほかのことを願ふのではない、はやそこに眼前にかやぶきの屋根がみえてゐるやうだ。

泥功山

朝行青泥上。暮在青泥中。
泥濘非一時。版築勞人功。
不畏道途遠。乃將汨沒同。
白馬爲鐵驪。小兒成老翁。
哀猿透却墜。死鹿力所窮。
寄語北來人。後來莫怱怱。

泥功山

朝に行く青泥の上、暮に在り青泥の中。
泥濘、一時に非ず、版築、人功を勞す。
畏れず道途の遠きを、乃ち將に汨沒同じからむとす。
白馬、鐵驪と爲り、小兒、老翁と成る。
哀猿、透なるも却つて墜つ、死鹿、力の窮する所。
語を寄す北來の人に、後來、怱怱たる莫れ。

【字解】【一】泥功山　同谷縣西二十里にある山なりと。【二】青泥　青色のどろ。【三】泥濘　ぬかるみ。【四】非一時　つねにかくの如くなるをいふ。【五】版築　版は定規、築は土をきねでつきかためること。【六】人功　人力をいふ。【七】汨沒同　同汨沒に同じ、汨沒とはしづむこと、同とは一行のものもろともにの義。【八】鐵驪　まつくろのうま、泥にけがさるるをいふ。【九】成老翁　これも顏面のよごれてかく見ゆるをいふならん。或はいふ、小兒の輕捷なるも老翁の遲鈍に化するをいふと。【一〇】透　智慧のあるをいふならん。【一一】死鹿　鹿の死するをいふ。【一二】北來人　北方よりくる人。【一三】後來　我より後に來るにあたりて

は。【三】忽忽　せはしく輕率なるさま。

【題義】同谷紀行の第十一首。泥功山の泥途のさまをのべたる作。

【詩意】朝も青い泥のうへをあるく。日ぐれになつても青い泥の中にをる。ここのぬかるみは只今かぎりのことでなくいつものことで、版築の人力をわづらはしてゐるのである。自分は道の遠いことはばからないが、やがて皆もろともにぬかるみにおちこんでしまひはせぬかと氣づかふのである。ここでは白馬がくろうまにかはり、こどもも老人同様になる。はしこい猿もすべつておち、鹿も力つきては死んでしまふ。こんな場所だから北方からくる人人にまうす、あとからくるにはここをうつかりとほつてはなりませぬぞよ。

鳳凰臺【原注】山峻人不レ至二高頂一。

鳳凰臺【原注】山峻しくして、人、高頂に至らず。

亭亭鳳凰臺。北對西康州。
亭亭たり鳳凰臺、北、西康州に對す。
西伯今寂寞。鳳聲亦悠悠。
西伯、今寂寞たり、鳳聲、亦悠悠たり。
山峻路絶蹤。石林氣高浮。
山峻しくして路、蹤を絶つ、石林、氣高く浮ぶ。
安得萬丈梯。爲君上二上頭一。
安んぞ萬丈の梯を得む、君が爲めに上頭に上らむ。
恐有二無母雛一。飢寒日啾啾。
恐らくは無母の雛有りて、飢寒、日に啾啾たらむ。
我能剖二心血一。飲啄慰二孤愁一。
我能く心血を剖きて、飲啄、孤愁を慰せむ。
心以當二竹實一。炯然無二外求一。
心は以て竹實に當てむ、炯然、外に求むること無し。
血以當二醴泉一。豈徒比二清流一。
血は以て醴泉に當てむ、豈に徒に清流に比するのみならむや。
所レ重王者瑞。敢辭微命休。
重んずる所は王者の瑞なればなり、敢て辭せむや微命の休するを。
坐看綵翮長。舉意八極周。
坐に看む綵翮長じて、舉意、八極に周からむ。
自レ天銜二瑞圖一。飛下十二樓。
天自り瑞圖を銜みて、飛び下らむ十二樓。
圖以奉二至尊一。鳳以垂二鴻猷一。
圖は以て至尊に奉じ、鳳は以て鴻猷を垂れ、
再光二中興業一。一洗蒼生憂。
再び中興の業を光にし、蒼生の憂を一洗せむ。
深衷正爲レ此。羣盜何淹留。
深衷、正に此が爲めなり、羣盜、何ぞ淹留するや。

【字解】【一】鳳凰臺　山の名、同谷の東南十里にありと。【二】亭亭　高き貌。【三】北對　北方は對しむいてゐる。【四】西康州　唐の武德の初、同谷に西康州を置く。貞觀中に廢せらる、今古名を用ひ同谷をさす。【五】西伯　周の文王をいふ、文王は殷の紂

王のとき西伯なり、西伯は西方諸侯のとりしまり役。【六】寂寞　さびしきさま。【七】悠悠　年代の遠くへだたるをいふ、文王の時には鳳、岐山に鳴く、今それよりはるか年代を經たり。【八】峻　けはしし。【九】蹤　人のあしあと。【一〇】石林　石柱のむれ。【一一】安得　希望なり。【一二】爲君　君とは一般人をさす。【一三】上上頭　上頭は山上の頂上。【一四】無母雛　母をもたぬ鳳凰のひな。【一五】啾啾　鳥のなくこゑ。【一六】剖心血　心臟の血をたちわりてだす。【一七】飲啄　のませ、ついばませる。【一八】孤愁　母親なきひなのさびしきうれひ。【一九】心心臟。【二〇】當竹實　竹の實のかはりとする。鳳凰は「竹實ニ非レバ食ハズ醴泉ニ非レバ飲マズ」と稱せらる。【二一】炯然　かがやく貌、心中の光明なさま。【二二】無外求　他に何等の求むる所なきなり。【二三】當醴泉　上に見ゆ、醴の泉の代りにする。【二四】比清流　清流は鶴の飲む者なり、今鳳凰の場合に借り用ふ。【二五】所重　我が之を重んずるわけは。【二六】王者瑞　帝王たる者の瑞祥とするものなるが故なり。【二七】微命休　自己のつまらぬ生命の終ること。【二八】綵翮長　鳳雛のうつくしきたちばれがのびる。【二九】擧意　鳳雛生長して高く舞ひあがる意をいだく。【三〇】八極　周　八方のはてをすつかりとびめぐる。【三一】銜瑞圖　めでたき圖書をくちばしにくはへてくる、「春秋元命苞」に黄帝玄扈（石室の名）ニ洛水ノ上ニ坐シ大司馬容光等ト臨觀ス鳳凰圖ヲ銜ミテ帝ノ前ニ置ク黄帝再拜シテ圖ヲ受クとみゆ。【三二】十二樓　漢書郊祀志下に武帝の時ニ方士言フモノ有リ、黄帝の時五城十二樓ヲ爲リ以テ神人ヲ執期（地名）ニ候ツ、名ケテ迎年ト曰フ、ト。」みゆ。【三三】至尊　最上の尊者、天子をいふ。【三四】鳳以　案ずるに上句に「圖以」とあり、此句に「鳳以」といふ、鳳は圖と對立せしむべきものに非ず、「鳳」は何等かの誤字ならんとおもはるれど暫く原文に據る。【三五】垂鴻猷　大なるはかりごとを垂れる、垂れるとは後後までものこすをいふ。【三六】光　光輝あらしむる、大ならしむる。【三七】蒼生　人民。【三八】深衷　心中の奥底、ふかきこころ、鳳雛をそだてて上述の如くせしめんとの念慮をさす。【三九】爲此　此とは上述の次第をさす。【四〇】羣盜　賊軍をさす。【四一】淹留　ひさしくとどまる、數年にわたりて退散せざるをいふ。

【題義】同谷紀行の第十二首。鳳凰山の鳳雛を想像してのべたり。鳳雛が何を指すやに就ては、或は肅宗の長子廣平王俶（後に代宗となる）を除かんとせしことを指すといひ、或は房琯・張鎬等の賢相の排斥されんとするを指すといひ、明かならず。恐有ニ無母雛一とて假定的に言ひなせるを以て之を見れば、それとさすものはなくとも單に自己の理想をのべしやも知れざるなり。

【詩意】高いかな彼の鳳凰臺は。北のかた西康州と相對してゐる。周の文王西伯の樣な聖人も今はでず、鳳凰の聲も長く聞かれぬのである。この山はけはしくして人の足跡もたえ、石林のうへに浮べる氣が高くみえるばかりだ。もし萬丈もある梯があるなら、絶頂までのぼつてみたいものだ。そこにはともすると母親をうしなうた鳳の雛がゐて、毎日ちうちうないて飢寒を訴へてゐるかもしれぬ。さうなら自分は自分の心臟の血をゑぐりだして、これを飲ませ啄ませてその可憐なみなしごの雛のうれひをなぐさめてやらう。我が心臟をば竹の實に代用し、專心はぐくんでやらう、そのほかに欲求はない。又我が血はそれを醴泉に代用してのませてやらう、單に清き流れの水をのませてやるぐらゐのことではない。こんなに鳳凰を重んずるわけはそれが帝王の瑞祥であるからだ。この物のためには自分の微微たる生命が終つたとていとふところではない。かくそだててやれば雛にはゆくゆくいろどられた羽がのびて、その舞ひあがるこころはつひに八方のはてまでくまなくめぐつて、天からめでたい圖書をくはへて、十二樓のところへ飛んでおり、その圖をば萬乘の天子にささげたてまつり、鳳彼自身は偉大なる謀をのちのちまでのこし、唐の中興の業をふたたび光輝あらしめ、天下の人民の憂ひを一洗してしまふであらう。自分が此山をみて深き念慮をいだくのは此事のためなのである。ああ彼の

輩がれる盗賊どもはなんで長くいつまで退散せぬのであるか。

乾元中寓居同谷縣。作歌。七首

乾元中、同谷縣に寓居し、歌を作る　七首

有客有客字子美。
白頭亂髮垂過耳。
歲拾橡栗隨狙公。
天寒日暮山谷裏。
中原無書歸不得。
手脚凍皴皮肉死。』
嗚呼一歌兮歌已哀。
悲風爲我從天來。』

客有り客有り字は子美、
白頭亂髮垂れて耳を過ぐ。
歲、橡栗を拾うて狙公に隨ふ、
天寒く日暮る山谷の裏。
中原、書無うして歸り得ず、
手脚凍皴、皮肉は死す。』
嗚呼一歌す、歌已に哀し、
悲風我が爲めに天從り來る。』

【題義】作者乾元二年十一月に同谷に到著して十二月に蜀に入れり。同谷に寓居せるは、わづかに一

【字解】〔一〕同谷縣　甘粛省秦州の西南にあたれる階州成縣の地是なり、唐にては成州といひ同谷縣に治所をおく、秦州をさること二百六十五里なり。〔二〕客　たびびと、寓居の身ゆゑかくいふ。〔三〕歲　歲歲。〔四〕橡　とちのみ。〔五〕狙公　さるまはし。〔六〕中原　黄河の河南省を流るる地方、洛陽附近をさす。〔七〕書　書信。〔八〕歸不得　不レ得レ歸の義。〔九〕皴　しわだつ。〔一〇〕死　乾枯の甚しきをいふ。

箇月のみ。寓居中の作、凡そ七首あり。これ其の第一なり。客居貧苦のさまをいへり。

【詩意】ここに子美と字する旅人がゐるが、その男は頭は白く亂れた髪が垂れて耳よりもさがつてゐる。彼は山谷のうちで天寒く日の暮るるをりから、猿廻はしのあとにくつついて橡實や栗をひろうてゐる。ことしにはじめぬことながら。彼はその故郷たる中原の方からは手紙もなく樣子が知れぬから歸ることもならず、手や脚は凍えしわだつて皮膚も肉もひからびてゐる。』　ああここに第一歌をうたふ、この歌聲は頭初からすでにあはれであり、天もそれに感ずるか自分のために天から悲しさうな風が吹いてくる。

〔二〕

長鑱長鑱白木柄。
我生託子以爲命。
黄獨無苗山雪盛。
短衣數挽不掩脛。
此時與子空歸來。

〔二〕

長鑱、長鑱、白木の柄、
我が生、子に託して以て命と爲す。
黄獨、苗無く、山雪盛なり、
短衣數、挽けども脛を掩はず。
此の時子と空しく歸り來る、

【字解】〔一〕長鑱　ながい犁鐵なり。〔二〕柄　すきの「え」。〔三〕子　「おまへ」「すき」をさす。〔四〕命　生命。〔五〕黄獨　一に「黄精」に作る、藥草の名。〔六〕數挽　たびたびひつぱる。〔七〕掩脛　掩は掩遮の義、おさへてかぶせること、脛は「はぎ」。〔八〕此時歸

(一〇)男呻女吟四壁靜。(一一)』　男呻、女吟、四壁靜なり。』

嗚呼二歌兮歌始放。(一二)　嗚呼、二歌す、歌始めて放つ。

閭里爲我色惆悵。(一四)(一五)』　閭里、我が爲めに、色惆悵す。』

く立つてゐるをいふ、四壁は四方のかべ、貧しきゆゑ室中は空虛にてかべのみ立てるをいふ。【一二】放　ほしいままにうたふこと。

【題義】飢餓のさまをいへり。

【詩意】長い鐵の頭のついた白木の柄の犂よ。自分の生活はおまへをたよつて生命の親としてゐるのだ。山中の雪は盛につもつて黃獨の苗はみつからず、つんつるてんの短い衣を著て、いくらひつぱつても脛をかくすことはならぬ。このときおまへとから手でうちへもどつてくると、四方の壁だけがひつそり立つてゐるところで、家族の男女等は飢餓にくるしんでうなつてゐる。』　ああ、ここに二度めの歌をうたふ、はじめてきままに歌ひだす、これをきいては近所の人たちも自分のためにうらめしげなかほつきをしてくれる。

〔三二〕

有(一)弟有弟在遠方。　〔三三〕

弟有り弟有り遠方に在り。

【字解】【一】弟　作者の弟四人あり、穎・觀・豐・占・是なり、うち占は作者に從つて蜀に入る。【二】三人　占を除きたる他の三人。【三】展轉　各地をうつりあるく、洛陽より長安、長安より秦州・同谷とかはりゆく。【四】胡塵　祿山叛軍の兵馬のちり。【五】鴛鴦　雁のたぐひ野鴨なり。【六】鵶鶻　禿鶻なりといへり。【七】安得　希望の辭。【八】送我　鳥によりて送らるるなり。【九】汝　三弟をさす。【一〇】收兄骨　兄とは自己をさす、收骨とは自己の死後の事にいひ及ぶなり。

(二)三人各瘦何人强。　三人各〻瘦せたり、何人か强なる。

生別展轉不相見。(三)　生別展轉、相見ず、

胡塵暗天道路長。(四)　胡塵、天に暗うして道路長し。

東飛鴛鴦後鵶鶻。(五)(六)　東に飛ぶは鴛鴦、後には鵶鶻、

安得送我置汝傍。(七)(八)(九)』　安んぞ我を送つて汝が傍に置くこと―を得む。』

嗚呼三歌兮歌三發。(一〇)　嗚呼三歌す、歌三び發す、

汝歸何處收兄骨。』　汝歸るも何の處にか兄が骨を收めむ。』

【題義】弟をおもうてつくる。

【詩意】自分には弟がある、かれらはみな遠方に居る。彼等三人どれもやせたものであるがそのうちでだれが强健であるであらうか。兵亂の塵が天をくらくするばかりで、彼等とのあひだの道路は長い、隨つて自分は彼等とはいきわかれをして、各地をうつりあるいて面會せずにゐるのである。東には鴛鴦が飛び、うしろには鵶鶻が飛んでゐるが、どうしたらその鳥に送られて汝等の傍へ置いてもらふことができるのだらう。』　これで自分の歌は三度めである。逢はぬうちに自分は死ぬかもしれぬ。

おまへは歸つて來たところで、どこでわたしの骨をひろつてくれるのであらうか。（自分の死に場所は豫測できぬ。）

〔四〕

有妹(一)有妹在鍾(二)離。
良人(三)早歿(四)諸孤癡。
長淮浪高蛟(六)龍怒。
十年不見(七)來何時。
扁舟欲往(八)箭(九)滿眼。
杳杳(一〇)南國多(一一)旌旗。
嗚呼四歌兮歌四(一二)奏。
林猿爲我啼清晝(一四)。

【題義】　妹をおもふ作。

【詩意】　鍾離には妹がゐる。彼の女はその夫は早くなくなり多くの遺兒はまだ智慧づかぬ。淮水のあたりは風浪が高く蛟龍の恐るべきものが怒りつつある。自分は十年も彼女と面會せぬがいつ彼女はこちらへ來ることができよう。こちらから小舟に乘つて往かうかとおもへば見わたすかぎり弓箭ばかりであり、はるばるとほい南國の方も軍隊の旗ばかりたくさんある。』　ああ我が歌はこれで四たびめを奏するのである。これをきいては林の猿も自分に同情してまひるながら啼きたてる。

〔四〕

妹有り妹有り鍾離に在り、
良人早く歿して諸孤癡なり。
長淮浪高うして蛟龍怒る、
十年見ず、來るは何の時ぞ。
扁舟往かむと欲すれば箭、眼に滿つ、
杳杳南國、旌旗多し。』
嗚呼四歌す、歌四たび奏す、
林猿我が爲めに清晝に啼く。』

【字解】〔一〕妹　作者の「元日寄韋氏妹」詩（上卷三七〇頁）に近聞韋氏妹、遠在漢鍾離、郎伯殊方鎭、京華舊國移、とある妹なり。〔二〕鍾離　安徽省鳳陽府臨淮縣。〔三〕良人　をつと、卽ち韋某をいふ。〔四〕諸孤癡　孤とは遺兒をいふ、癡は稚くして知なきをいふ。〔五〕長淮　淮水をいふ、鳳陽は淮水の南にあり。〔六〕蛟龍　以て盜賊の人を害する者に比す。〔七〕來　妹がこちらへくること。〔八〕往　こちらから妹の方へゆく。〔九〕箭滿眼　眼中見る所は弓箭のみ。〔一〇〕杳杳　はるか。〔一一〕南國　淮水地方をいふ。〔一二〕四奏　四たびその歌曲を奏でる。〔一三〕多旌旗　旌旗は軍隊の用ふるもの、其の多きはどこも軍隊ばかりなるをいふ。〔一四〕清晝　まひるなか。

〔五〕

四山多風溪水急。
寒雨颯颯(一)枯樹濕。
黃蒿(二)古城(三)雲不開。
白狐跳(四)梁黃狐立。
我生何爲在窮(五)谷。
中夜起(六)坐萬感集。』

〔五〕

四山風多くして溪水急なり、
寒雨颯颯として枯樹濕ふ。
黃蒿の古城、雲開けず、
白狐は跳梁、黃狐は立つ。
我が生何爲れぞ窮谷に在る、
中夜起坐して萬感集る。』

【字解】〔一〕颯颯　はたはた風のあふる貌。〔二〕蒿　よもぎ。〔三〕古城　同谷縣城。〔四〕跳梁　はねくりまはる。〔五〕窮谷　ゆきつまつたに、同谷の地をいふ。〔六〕起坐　一起一坐。〔七〕魂招不來歸故鄉　諸說多し、鄙說をのぶ、魂を招くことは屈原・宋玉等の賦に見ゆ、生き靈をよびもどすことなり、

鳴呼五歌兮歌正長。鳴呼五歌す、歌正に長し、
魂(七)招不レ來歸二故鄉一。』魂招けども來らず故鄉に歸らむ。』

を招くと雖も來らざれども願くは之を招きよせて共に故鄉に歸らんと欲すといふに在らんか、一說には「魂已に自己に先ちて故鄉に歸れり、故に之を招くと雖も來らず」ととく。これは「魂招けども來らず故鄉に歸りぬ」とみるなり。

杜甫自身の詩にも翦レ紙招二我魂一・老魂招不レ得・南方實有二未レ招魂一等の句あり、本句の意は離散せる魂は之

【題義】窮谷に居るさびしさより歸鄉の念をうごかすことをのぶ。

【詩意】四方の山には多く風が吹いて溪川の水が急に流れ、冬の雨が風にあふられて枯れた樹木がうるほされる。黃色いよもぎのはびこつた古城には雲がとざし、白狐ははねてとび黃狐はつつ立ちあがる。自分の生涯はなにとてかかる窮谷にをらねばならぬのか、夜なかに起きてみても坐つてみてもただ千萬無量の感が集り來るのである。』これで第五歌であるが、その歌ふ聲やながい。からだを離れた魂は招いたとて來はせぬが自分はそれをよび迎へてともに故鄉にかへりたいとおもふ。』

〔六〕

南(一)有レ龍兮在二山湫一(二)。南に龍有り、山湫に在り、
古木(三)巃嵸枝相樛(四)。古木巃嵸、枝相樛す。

【字解】【一】南・同谷縣東南の萬丈潭をさすといへり、潭のことは次篇に出づ。【二】山湫・卽ち龍の

木葉黃落(五)龍正蟄(六)。木葉黃落、龍正に蟄す、
蝮(七)蛇東來水上游(八)。蝮蛇東來、水上に游す。
我行怪レ此(九)安敢出(一〇)。我行いて此を怪む、安んぞ敢て出でむ、
拔レ劍欲レ斬(一一)且復休。』劍を拔き斬らむと欲して且復た休す。』
嗚呼六歌兮歌思遲(一二)。嗚呼六歌す、歌思遲し、
溪壑爲レ我廻(一三)春姿。』溪壑、我が爲めに春姿を廻へさむ。』

【題義】山湫の龍についての感をのぶ。

【詩意】南方の山の「ふち」に龍がゐる。そこは古木がいかめしくしげりあひ、枝がたがひに垂れさがつてゐる。木の葉は黃ばんで落ちたので龍はちやうどあなごもりをした、そこへまむしへびが東の方からやつてきてふちの水の上にあそんでゐる。自分はでかけてはみたもののこんなふしぎなさまを見てはどうしてでかけられようぞ、劍をぬいてそのへびを斬らうかともおもうたがまたやめてしまつた。』ああこれは第六歌である、六歌となると歌想もはやくはでてこぬ。願ふところは溪壑が自分の

すむ「ふち」。【三】巃嵸・いかめしくしげりあふ貌。【四】樛・枝のまがり垂下するさま。【五】黃落・きばみておつる。【六】蟄・穴ごもりする。【七】蝮蛇・「まむし」、龍は君に比し蛇は盜賊に比すといへり、しかし龍を自己に比し蛇を他の小人に比したるやも知れざるなり、「萬丈潭」の龍は自己らしければなり。【八】游・遊の音借ならん、あそぶ。【九】此・蝮蛇のさまをさす。【一〇】出・居處より外へでる。【一一】斬・蛇をきる。【一二】歌思・歌想なり。【一三】廻春姿・春時の姿を回復する、冬なればこそ龍は蟄す、春になれば穴より出づ、故に春の來らんことをねがふなり。

ために早く春のすがたを回復してくれることだ。そんなら龍もまたでかけることができるだらう。』

〔七〕

男兒生不成名身　已老。
三年飢走荒山道。
長安卿相多少年。
富貴應須致身早。
山中儒生舊相識。
但話宿昔傷懷抱。
嗚呼七歌兮悄終曲。
仰視皇天白日速。

〔七〕

男兒生れて名を成さず、身已に老ゆ、
三年飢走す、荒山の道。
長安の卿相、少年多し、
富貴には應に須らく身を致すこと早かるべし。
山中の儒生は舊相識、
但宿昔を話すれば懷抱を痛ましむ。
嗚呼七歌す、悄として曲を終ふ、
仰いで皇天を視れば白日速なり。

【字解】〔一〕三年　至德二載より乾元二年まで。〔二〕荒山　あれはてた山。〔三〕卿相　卿や宰相。〔四〕致身　致とは富貴の地位へ身をもつてゆくこと。〔五〕山中儒生　舊說にいふ、同谷山中の友、たとへば李衡の如きをさす、と。余は作者自己をいふものと考ふ。〔六〕舊相識　ふるくからのしりあひ、これは自己と長安卿相とのあひだがらをいふ。〔七〕但話　話はだれかとはなしするなり、舊說によれば作者が儒生と話するなり。〔八〕宿昔　むかしの事がら。〔九〕懷抱　胸中をい走ることのすみやかなこと、時間の早くすぎること。〔一〇〕悄　しょんぼり、心のひきたたぬ貌。〔一一〕終曲　曲はこの七歌の曲。〔一三〕速

【題義】長安卿相の榮達と自己晩年の不遇とを對比して感慨をのべたり。七律の「同學少年多不レ賤」と同意ならん。

【詩意】自分は男兒でありながら生れてから功名を成しとげることができぬうちに年とつてしまひ、三年の間あれはてた山の中の道路を飢餓に驅られて走つてゐる。長安の卿相はとみれば彼等は多くは少年のともがらである。してみれば人たるものは早く我が身を富貴の地位に致さねばならぬものであらう、老いてはだめだ。この山中の儒生たる自分ももとは彼等富貴の人人とはしりあひのものなのだが、二者のへだたりはどうだ。だからただむかしばなしをしさへすれば自分は胸のうちがかなしくなるのである。』　ああ第七歌、これでさびしく曲を終るのである。うへをむいて大空をながめると太陽はどんどん早くはしりゆく、歎息すべきではないか。』

萬丈潭

〔原注〕同谷縣作。

萬丈潭　〔原注〕同谷縣にて作る。

青溪含冥寞。神物有顯晦。
龍依積水蟠。窟壓萬丈內。
跼步凌垠堮。側身下煙靄。

青溪、冥寞を含む、神物、顯晦有り。
龍は積水に依りて蟠る、窟は壓せらる萬丈の內。
跼步、垠堮を凌ぎ、身を側てて煙靄より下る。

前臨洪濤寛。却立蒼石大。
山危一徑盡。岸絶兩壁對。
削成根虚無。倒影垂澹澪。
黑知灣濃底。清見光炯碎。
孤雲到來深。飛鳥不在外。
高蘿成帷幄。寒木壘旌旆。
遠川曲通流。嵌竇潛洩瀨。
造幽無人境。發興自我輩。
告歸遺恨多。將老斯遊最。
閉藏脩鱗蟄。出入巨石礙。
何當炎天過。快意風雲會。

【字解】【一】萬丈潭　同谷縣東南七里にあり。【二】冥寞は冥漠に同じからん、蓋し天をいふ、含とはそれを容れるをいふ、この青色の溪水は上、天をひたしいれてをるといふなり、孟浩然が詩句に涵虚混太清とあるに近き義ならん。或は含を合に作れり、然らば青溪合冥漠なるべし、青溪の水この潭に會合して茫漠として

前みて洪濤の寛なるに臨む、却立すれば蒼石大なり。
山危くして一徑盡き、岸絶えて兩壁對す。
削成、虚無に根す、倒影、澹澪たるに垂る。
黑は知る灣濃たる底、清は見る光炯碎くるを。
孤雲、到來深し、飛鳥、外に在らず。
高蘿、帷幄を成す、寒木、旌旆を壘（疊）す。
遠川曲りて流を通じ、嵌竇潛みて瀨を洩らす。
幽に造る無人の境、興を發するは我輩よりす。
歸を告ぐる遺恨多し、將に老いむとして斯の遊最なり。
閉藏、脩鱗蟄す、出入、巨石に礙へらる。
何か當に炎天に過ぎりて、快意、風雲に會すべき。

青溪含冥寞　青溪は青色の水をたたへし溪、潭は溪の或る部分に在るならん、

としてをるをいふ、今含字に從ひて説く。【三】神物　不思議なもの、龍をいふ。【四】顯晦　あらはれるとかくれると。【五】積水　潭につもれる水。【六】窟　いはや、龍の住む穴。【七】萬丈崖壁の高さをいふ。【八】踢歩　せぐくまりてあゆむ。【九】凌垠堺　垠堺は水のそばの岸壁なり、凌とはそれをのぼること。【一〇】側身　身をかたへによせかける。【一一】下煙靄　けむりもやの間よりしたへとくだる。【一二】前　前進。【一三】洪濤寛　潭面のさま。【一四】却立　一歩しりぞきて立つ。【一五】蒼石　卽ち岸壁これは壁の實質によりていへり。【一六】一徑　卽ちこの潭へかよふこみち。【一七】兩壁　潭側に對立せる岸壁あるならん。【一八】削成　けづり成されたるもの、岸壁のさまをいひて岸壁その物をさす。【一九】根虚無　虚無は潭水の深きをさす、根とは根がはえた樣にそこに深くつき入れるをいふ。【二〇】倒影　壁のさかしまに水にうつるかげ。【二一】垂　水面に落ちてゐること。【二二】澹澪　清くたたへたる貌。【二三】黑　深水のくろずみたる色。【二四】灣環　水のまがり、あつまりてながるるさま。【二五】清　水のすめること。【二六】光炯　ひかりかがやくこと。【二七】孤雲　一片のくも。【二八】到來深　到來とはこの潭上へ來ること、到を一に倒に作れり、倒來ならば雲さかしまにうへより下へ垂れ來るをいふ、深とは水面までよほどの距離あるをいふ。【二九】不在外　壁高きを以て飛ぶ鳥もその以内にあるといふなり。【三〇】帷幄　帷はよこにはる「まく」、幄はうへにはる「まく」、共に幕をいふ。【三一】壘　或は疊に作る、いづれにしてもたたみあぐること。【三二】旌旆　「はた」。【三三】嵌竇　「あな」。【三四】潛　地下をもぐる。【三五】洩瀨　はやせとなりて流るる水をもらす。【三六】造幽　幽邃なる場所に至る、この幽と無人境とは同一物なり、無人の境たる幽處に至るをいふ。【三七】最　最上のおもしろきあそび。【三八】閉藏　とぢこもる。【三九】脩鱗　長身なるうろこある生物、龍をさす。【四〇】出入　自己がここへ往來すること、舊説龍についていふとなせり、然れども龍は巨石ぐらゐにその進退をさまたげらるべきものに非ず。【四一】巨石　上の蒼石大の蒼石なるべし。【四二】何當　何は「何時」なり。【四三】炎天　夏時をいふ。【四四】風雲　或は雲を雨に作る。

【題義】同谷縣にある萬丈潭にあそびて龍のことに感じて作る。龍は暗に自己を比せるならん。

【詩意】青溪の水が冥漠なる大空をひたしいれてをる。ここに住む神物にもあらはれるときとかくれ

てをるときとがある。いまはそのかくれてをる時である、すなはち龍はこのたんとつもつてゐる水に依つてとぐろまいてゐるのである。その住むいはやは萬丈の石壁の內に壓せられて奥底にある。自分はそこへ達するためにせぐくまりながらあるいて岸の崖をのぼり、また身體を片方へよせながら煙靄の間から下方へとくだる。さてくだつてまへへすすみでてはおほなみのひろらかにうごいてゐるところにさしかかつてみ、またひとあしさがつては偉大な蒼色の石壁をせおうて立つ。ここにては危險な山の一すぢみちが盡き、左右兩方に岸壁が對立してをる。その削り成された岸壁は虛無なる水に深く根ざし、そのさかしまにうつる影はきよくたたへた水面に落ちこんでをる。どすぐろいのを見ればそれは水が諸種の方向に流るる水をあつめた底であることがわかるし、その淸らかさは水面のきらきらしたひかりの碎くるのを見ればわかる。一片の雲がここに浮び來れば直下水面までその深さ知られぬほどであり、鳥が飛ぶとしてもそれは周圍の絶壁以外にはいでない。附近の高くはえた蘿は幕の狀をなし、冬がれの木は旌をつみかさねた樣である。遠方の川もまがりながらここへ流れを通はしてをり、どこぞに穴があつてそこをくぐつてこのふちの水がはやせをもらしてゐる。自分はこの無人の境地たる幽邃の場所に來て之を見て大に興をおこす、これ我輩によつて始めて然るのである。ここからかへらうとするにあたつてはのこりをしいことが多い、老年にさしかかつてはこんなおもしろい遊びはほかにない、これが第一である。いま龍はここにかくれてをる。ここへ出入往來するには巨大なる岸壁のさまたげがある。（或は龍は石にさまたげられてここにあなごもりしてをる）いつか夏にあたつてここへたづねきて、こころもち愉快に龍が風雲をまき起すのにであふことができようぞ。

杜少陵詩集　卷九

發同谷縣

【原注】乾元二年十二月一日隴右より成都に赴くとき行を紀す。

同谷縣より發す【原注】乾元二年十二月一日隴右より成都に赴くとき行を紀す。

賢有不黔突。聖有不煖席。
賢に突を黔にせざる有り、聖に席を煖にせざる有り。

況我飢愚人。焉能尚安宅。
況んや我飢愚の人をや、焉んぞ能く尚宅に安んぜむ。

始來茲山中。休駕喜地僻。
始めて茲の山中に來り、駕を休めて地の僻なるを喜ぶ。

奈何迫物累。一歲四行役。
奈何ぞ物累に迫られて、一歲に四たび行役するや。

忡忡去絕境。杳杳更遠適。
忡忡として絕境を去り、杳杳更に遠く適く。

停驂龍潭雲。廻首虎崖石。
驂を停む龍潭の雲、首を廻らす虎崖の石。

臨歧別數子。握手淚再滴。
歧に臨みて數子に別る、手を握りて淚再び滴る。

交情無舊深。窮老多慘慼。
交情、舊深無し、窮老、慘慼多し。

平生懶拙意。偶値棲遁跡。　平生懶拙の意、偶ま棲遁の跡に値ふ。
去住與願違。仰慚林間翮。　去住、願と違ふ、仰いで林間の翮に慚ぢ。

【字解】〔一〕 隴右　秦州・同谷みな隴右の地なり。〔二〕 成都　四川省成都府。〔三〕 賢　賢人、墨子をいふ。〔四〕 黔突　かまどを黒色にくすべる、飯を炊ぎつづくるをいふ。〔五〕 聖　聖人、孔子をいふ。〔六〕 煖席　むしろをあたたかにする、同じ席にながくすわること。「淮南子」に墨子無黔レ突、孔子無煖レ席とみゆ、墨子も孔子もつねに東西に奔走して世の人を救はんとせし故、同じかまどを長く焚いたり、同じ席に長く坐りしこと無しといふなり。〔七〕 安宅　宅におちついてゐる。〔八〕 茲山中　同谷の山中。〔九〕 休駕　車駕を休息させる。〔一〇〕 物累　妻子衣食のわづらひ。〔一一〕 四行役　作者今年春洛陽より華州にかへり、華州より秦州にゆき、冬は秦州より同谷に、同谷より更に成都にゆかんとす、これ四たび行役するなり。〔一二〕 忡忡　うれふる貌。〔一三〕 絶境　かけはなれた場所、同谷をいふ。〔一四〕 杳杳　はるばる。〔一五〕 適　ゆく。〔一六〕 停驂　驂はそへうま、二頭の馬の外にかはり馬がも一匹あるなり、停は「とどむ」、急に立ち去りかぬるさまなり。〔一七〕 龍潭　卽ち萬丈潭なるべし。〔一八〕 虎崖　寄贊上人詩に徘徊虎穴上とある虎穴かといへる說あるも恐らくは然らず、これ同谷の地に別に虎崖と稱するものあるなるべし。〔一九〕 歧　わかれみち。〔二〇〕 數子　同谷の交友三四の人人。〔二一〕 交情無舊深　仇注に不レ必二舊交深契一也とときたるも今取らず。仇氏は數子を以て新交とみなして新交にても可なり、必しも舊交の要なしと解するなり、余は數子卽ち舊交とみる、これは成都に赴かんとするに際して成都著後の友は新交となり、同谷にての友は舊交となると考ふればなり、無舊深とは同谷を去りては、また今日の如き舊交の深きもの有らずといへるなり。〔二二〕 窮老　困窮衰老。〔二三〕 慘慼　ものがなしきうれひ。〔二四〕 懶拙　ぶしやう、よわたりのへた。〔二五〕 値　あふ。〔二六〕 棲遁跡　棲遁の地といふほどの意。〔二七〕 去住　ここを去ると、ここにとどまると。〔二八〕 願　住まるが本願なり。〔二九〕 林間翮　翮は鳥のたちばれ、以て鳥そのものをさす、鳥は林中に在りて其所を得たり、人却てしからず。

【題義】作者同谷に來りしが、ここにも居る能はずして乾元二年十二月一日つひに同谷より出發して南のかた成都へ赴かんとす、その旅中のさまをうつして本篇以下凡そ十二首の紀行詩をなす。これ其の第一首なり。居住の安定を得ざるの情をのべたり。

【詩意】賢人のなかにも墨子の如くかまどをくすべらす暇なきものがあり、聖人のなかにも孔子の如く坐席のあたたかであるひまがないものがある。ましてや自分のやうな飢にかられ且愚なるものは、どうして自分の宅におちついてゐることができようぞ。自分ははじめてこの同谷の山中へ來てここで車をやすめ、土地の邊鄙なのを喜んでをつたのだ。しかるになんで事物のわづらひに迫られて、一年のうちに四回もたびをせねばならぬのであるか。自分はうれはしくこのかけはなれた場所を去つて、はるばるともつと遠いところへゆくのである。驂をとどめて龍潭の雲をながめたり、ふりかへつて虎崖の石をながめたり、心はあとへひかれるのである。いよいよわかれ路のところで三四の人人と別れをつげ、手を握りかはしてふたたび涙をながす。ゆくさきではこの人人たちとの交りほどの情愛はあるまいとおもふと、窮老の身にとつてはつらいうれひが增さることである。ふだんからぶしやうで世わたりのへたな自分のこころでは、偶然この地の樣な遁棲にいい場所にであうていいぐあひだとおもうてゐたのに、去住につけて自己の本願とちがふことになつた、それで仰いでは林中に得意がほしてゐる鳥に對してもはづかしく感ずるのである。

木皮嶺

首路栗亭西。尙想鳳凰村。
季冬攜童稚。辛苦赴蜀門。
南登木皮嶺。艱險不易論。
汗流被我體。祁寒爲之暄。
遠岫爭輔佐。千巖自崩奔。
始知五嶽外。別有他山尊。
仰干塞大明。俯入裂厚坤。
再聞虎豹鬬。屢蹋風水昏。
高有廢閣道。摧折如斷轅。
下有冬青林。石上走長根。
西崖特秀發。煥若靈芝繁。
潤聚金碧氣。淸無沙土痕。

木皮嶺

首路、栗亭の西、尙想ふ鳳凰村。
季冬、童稚を攜へ、辛苦、蜀門に赴く。
南、木皮嶺に登る、艱險、論じ易からず。
汗流れて我が體に被る、祁寒之が爲めに暄なり。
遠岫爭うて輔佐す、千巖自ら崩奔す。
始めて知る五嶽の外、別に他山の尊き有るを。
仰ぎ干せば大明を塞ぎ、俯して入れば厚坤裂く。
再び聞く虎豹の鬬ふを、屢〻風水の昏きに蹋す。
高きには廢れし閣道あり、摧折、斷轅の如し。
下に冬青の林有り、石上に長根走る。
西崖は特に秀發、煥として靈芝繁きが若し。
潤は聚む金碧の氣、淸、沙土の痕無し。

憶觀崑崙圖。目擊玄圃存。
對此欲何適。默傷垂老魂。

「ましむ。」

【字解】【一】木皮嶺　同谷より東南にあたり、今秦州徽縣の西十里に在り。【二】首路　はじめてのみち。【三】栗亭「發秦州」にみゆ。【四】鳳凰村　村の名、鳳凰臺の附近にあるなるべし。【五】季冬　十二月。【六】蜀門　卽ち劍門。【七】祁寒　はげしきさむさ。【八】暄　あたたか。【九】遠岫　遠山、岫は穴のあるやま。【一〇】輔佐　この嶺のてだすけをする。【一一】崩奔　崩落と解するが古義なり、しかしここは亂れて走る形勢をいふかと考ふ。【一二】五嶽　東は泰山、西は華山、南は霍山、北は恒山、中央は嵩山、これを五嶽といふ。【一三】仰干　干とは「凌ぐ」といふほどの意ならん、自己がのぼりゆくことならん。【一四】大明　日をいふ、日の光のこと。【一五】俯入　自己が俯して下方へはひりこむ、山路をくだるをいふ。【一六】厚坤　大地。【一七】蹋　せぐくまる。【一八】高　高處。【一九】閣道　棧道。【二〇】斷轅　たちきれたながえ、車のかち棒。【二一】冬青　モチの木、アヲキの類。【二二】秀發　ひいであらはるる。【二三】煥　かがやく貌。【二四】靈芝　仙草。【二五】潤　うるほひあり。【二六】金碧　黃金碧玉。【二七】崑崙　仙山なり。【二八】目擊　ひとめみたままで。【二九】玄圃　縣（懸）圃ともいふ、屋上庭苑なり、崑崙山に在りとせられし靈苑。【三〇】此　現に見る靈境をさす。【三一】垂老魂　老いかかつた自己のたましひ。

【題義】成都紀行の第二首。木皮嶺をすぎて靈境のさまをのぶ。

【詩意】已にすぎた鳳凰村のことなどおもひながら、行程の第一路たる栗亭の西の方をとほる。この冬の季にこどもらをたづさへて、なんぎしながら蜀門の方へと赴くのである。南方この木皮嶺に登る、そのみちのなんぎなことはなかなか口ではいふことがむつかしい。汗はからだにながれ、嚴寒の候もそれがためにあたたかく感ぜられる。遠方の山は爭うてこの嶺をたすけるかの如く、多くの巖石もき

まりなく亂れ走つてゐる。ここで始めて五嶽の外にも別に尊い他の山のあることがわかる。仰ぎのぼればこの山勢は日の光をも塞がんとし、俯してくだればこの山勢は大地を裂けるが如くである。一度ならず虎豹のたたかふをきき、しばしば風水の氣のくらきあたりに身をかがめる。高いところには今は無用になつた棧道がある、それはくだけてちぎれた車の柁棒のやうになつてゐる。下の方には冬青の林があり、その長い根は石の上を走つてゐる。西方の崖は特別にたかくあらはれをり、なにか生えてゐるのはかがやいて靈芝かなぞがしげつてゐる如くにみえてゐる。そのうるほひをふくんださまは黃金碧玉の氣が聚つてゐるためであらう、清らかですこしも沙や土の痕さへない樣である。まへに崑崙山の圖を觀たことを記憶してゐるが、いままのあたり玄圃の靈苑が存在してゐるのである。こんな靈境に對しながら自分はここをはなれてどこへゆかうとするのであるか、かくかんがへるとただだまつて年老いかかつた心をいためるばかりである。

白沙渡

畏途隨長江。渡口下絕岸。
差池上舟楫。杳窕入雲漢。

白沙渡

畏途、長江に隨ひ、渡口、絕岸を下る。
差池して舟楫上る、杳窕、雲漢に入る。

天寒荒野外。日暮中流半。
我馬向北嘶。山猿飲相喚。
水清石礧礧。沙白灘漫漫。
迴然洗愁辛。多病一疎散。
高壁抵嶔崟。洪濤越凌亂。
臨風獨回首。攬轡復三嘆。

天は寒し荒野の外、日は暮る中流の半。
我が馬、北に向つて嘶く、山猿飲みて相喚ぶ。
水清くして石礧礧たり、沙白くして灘漫漫たり。
迴然、愁辛を洗ふ、多病一に疎散なり。
高壁、嶔崟たるに抵り、洪濤、凌亂たるを越ゆ。
風に臨みて獨り首を回らす、轡を攬りて復た三嘆す。

【字解】〔一〕白沙渡　渡の名、同谷から南行して始めて嘉陵江をわたらうとする處の渡の名だといふこと。嘉陵江は陝西鳳昌府の鳳縣から源を發して東して兩當・略陽を經、東谷等の水をあつめ四川省内を流通して揚子江に合する水である。〔二〕畏途　おそるべきみち。〔三〕長江　嘉陵江をさす。〔四〕渡口　渡口に於てするをいふ。〔五〕差池　たがひちがひのさま、楫をあやつる貌。〔六〕上　上流へのぼること。〔七〕杳窕　おくふかくはるか。〔八〕雲漢　あまのがは、川をたとへていふ。〔九〕我馬　舟にある馬なり。〔一〇〕山猿　岸の山手のさる。〔一一〕礧礧　石のつみかさなれる貌。〔一二〕漫漫　ひろきさま。〔一三〕迴然　はるか。〔一四〕疎散　きえうせるさま。〔一五〕抵　至る。〔一六〕嶔崟　けはしき貌。〔一七〕凌亂　なみのみだるるさま。〔一八〕攬轡　たづなを手中に收めとる、陸行するをいふ。

【題義】成都紀行の第三首。白沙渡のさまをのぶ。

【詩意】畏るべき途を嘉陵江にくつついてあるき、ここの渡りばに於て絕壁の岸をくだる、それから

舟にのつてかたみに楫をつかうて上流へとのぼり、おくふかくあまのがはらの如き水面へはひつてゆく。荒野のそとは天の色寒く、川のなかほどで日はくれた。舟中の我が馬は北をむいていななく。山の猿は水を飲みながらよびかはしてゐる。水はすみきつて石はつもつてをり、沙は白く灘はひろく横はつてゐる。之をみて心地とほく平生のうさつらさはすつかり洗ひ去られた様であり、さまざまの病氣も全く散りうせた様である。さてみだれたつた大なみのところをふみこえて、けはしき高い岸壁へとのぼる、ここで風にのぞんで獨りふりかへつてみ、また旅行をつづくることかとたづなを手にしながらいくたびもなげく。

水會渡

山行有常程。中夜尚未安。
微月沒已久。崖傾路何難。
大江動我前。洶若溟渤寬。
篙師暗理楫。歌笑輕波瀾。
霜濃木石滑。風急手足寒。

水會渡

山行、常程有り、中夜尚未だ安んぜず。
微月、沒する已に久し、崖傾きて路何ぞ難き。
大江我が前に動く、洶として溟渤の寛なるが若し。
篙師、暗に楫を理む、歌笑、波瀾を輕んず。
霜濃にして木石滑に、風急にして手足寒し。

入舟已千憂。陟巘仍萬盤。
廻眺積水外。始知衆星乾。
遠遊令人瘦。衰疾慙加餐。

舟に入れば已に千憂、巘に陟れば仍萬盤。
廻眺す積水の外、始めて知る衆星の乾くを。
遠遊、人をして瘦せしむ、衰疾、加餐に慙づ。

【字解】〔一〕水會渡　これ嘉陵江が略陽をすぎて東谷等の水をあつむる處ならんといふ。略陽は縣名、今陝西漢中府に屬す。〔二〕常程　きまつた旅程、途中宿處なければそのある處までは必ず進まればならぬ。〔三〕安　おちついてゐること。〔四〕大江　嘉陵江。〔五〕洶　水のわきたつ貌。〔六〕溟渤　ひろうみ。〔七〕篙師　水竿をあやつる船頭。〔八〕理楫　かひをうまくつかふ。〔九〕陟巘　やまにのぼる、舟よりあがつてからのことなり。〔一〇〕萬盤　みちがいくうねりにもまがりくねる。〔一一〕廻眺　ふりかへつてみる。〔一二〕積水　江の水量の多きをいふ。〔一三〕衆星乾　水に泛んでゐるときは水面廣ければ水と天とくつつき星も水のなかにひたされし如く見ゆる、今山路にかかつてから見れば星はやはり水から離れてゐる、それを「乾く」といへるなり、「濕める」の反對。〔一四〕令人瘦　勞苦のためなり。〔一五〕衰疾　老衰、疾病。〔一六〕慙加餐　加餐の語に對してはづ、古詩に、思君令人瘦、努力加餐飯、とあり、瘦せぬ樣に御飯を多くたべようといふなり。

【題義】成都紀行の第四首。水會渡のさまをのぶ。

【詩意】山路をゆくに日程がきまつてゐるから、夜なかでもおちついてゐるわけにゆかぬ。かすかな月の光もとつくに沒してしまひ、崖は傾いて路はひどくわるい。ところがここまでくると前面に大きな江水がうごいてゐて、浪がわきたちひろうみの大なるごとくである。船頭はくらがりにうまく棹を使ひ、波など平氣で笑うたり歌うたりしてゐる。舟からあがつて陸をゆくと霜がこまやかに置いて木

の根巖角がなめらかであり、風はつよく吹いて手足がつめたい。渡り舟に入つたときから心配は多くあつたが、山にのぼればやはり幾曲りの曲り道があつてくるしい。やうやう多くの川水のところから遠くうへへ出てみると、星と空とが元來別別であることがわかる。遠くへ旅することは人を痩せさすものだ、古人は痩せぬためには加餐せよとすすめてをるが自分の如き衰疾のものは加餐もできさうにないのでその語に對してはづるのである。

飛仙閣

土門山行窄。微徑緣秋毫。
棧雲闌干峻。梯石結構牢。
萬壑敲疎林。積陰帶奔濤。
寒日外澹泊。長風中怒號。
歇鞍在地底。始覺所歷高。
往來雜坐臥。人馬同疲勞。
浮生有定分。飢飽豈可逃。

飛仙閣

土門、山行すれば窄し、微徑、秋毫に緣る。
棧雲、闌干として峻しく、梯石、結構牢し。
萬壑、疎林敲き、積陰、奔濤を帶ぶ。
寒日、外に澹泊、長風、中に怒號す。
鞍を歇めて地底に在り、始めて覺ゆ歷る所の高きを。
往來雜はりて坐臥す、人馬同じく疲勞す。
浮生、定分あり、飢飽豈に逃るべけむや。

嘆息謂妻子。我何隨汝曹。

【字解】【一】飛仙閣　閣は閣道でなはち棧道なり、飛仙閣は漢中府略陽縣東南四十里にありといふ、蜀の棧道は、唐の時、三泉縣（漢中府羌寧縣治）から利州（四川保寧府廣元縣治）までに橋といひ閣といふもの合せて一萬九百八十間あり、其他の險阻を保護する欄干四萬七千一百三十四間ありといふ。飛仙閣は、三泉よりさらに北に在るが如し。【二】土門　土壁門の形をなす。【三】窄　みちの間隔のせばまること。【四】緣秋毫　秋の毛すぢほどのほそさの小みちによる。【五】棧雲　棧道のくも。【六】闌干　さかんなる貌。【七】梯石　階段に用ふる石。【八】牢　かたし。【九】敲　傾斜する、直立せざるをいふ。【一〇】積陰　あつみのあるくもり氣。【一一】奔濤　溪流のおと。【一二】外　我が居處の外圈。【一三】澹泊　光りうすき貌。【一四】長風　とほく吹きわたる風。【一五】中　我が居處を中心とする內圈。【一六】歇　やすませる。【一七】地底　山より下りたる溪邊をいふ。【一八】所歷　すでにとほつてきた場所。【一九】往來　道を往來する旅人。【二〇】雜　雜居する。【二一】坐臥　主として自己の一行の態度をいふ。【二二】浮生　人生。【二三】定分　きまつた分限、運命の差をいふ。【二四】隨　ともにつれてゐる。【二五】汝曹　汝等。

【題義】成都紀行の第五首。飛仙閣のさまをのぶ。

【詩意】山路をゆくと崖が門の樣になつてとほるところがせばまつてをり、そこを秋の毛すぢほどの小みちによりそうてゆく。棧道の雲はさかんにけはしく立ちのぼり、階段をなす石はそのくみたてなかなかしつかりしてゐる。多くの壑ではまばらな林が斜めに生えてをり、厚みをもつたくもり氣は溪流の奔りゆく濤の音を帶びてをる。我が居處の外圈では冬の日が光うすくさし、內圈では遠くから吹きわたる風が怒號してゐる。それから下の方へくだつて地の底の樣なところに鞍をやすませる、このときはじめてい　ままでとほつて來た所がなるほど高い所だつたと氣がつく。我我の坐臥してゐる處へ

他の往來のものもわりこんでくる。人も馬も同じやうにつかれてゐる。人生にはめいめいの運命の定めがある、飢ゑる飽くといふことはどうしてのがれることができやうぞ。自分は歎息しながら妻子にむかつていふ、なんで自分はおまへたちをしたがへてこんな旅をつづけるのであるか、と。(つまり飢寒に驅られてのことに外ならぬのである)。

五盤(一)

五盤雖云險。山色佳有餘。
仰凌棧道細。俯映江木疎。
地僻無網罟。水清反多魚。
好鳥不妄飛。野人半巢居。
喜見淳樸俗。坦然心神舒。
東郊尚格鬬(五)。巨猾何時除。
故鄉有弟妹(九)。流落隨丘墟(一〇)。
成都萬事好。豈若歸吾廬。

五盤

五盤、險なりと云ふと雖も、山色、佳餘り有り。
仰いで棧道の細なるを凌ぐ、俯して江木の疎なるに映ず。
地僻にして網罟なく、水清くして反つて魚多し。
好鳥妄りに飛ばず、野人半巢居す。
喜び見る淳樸の俗、坦然として心神舒ぶ。
東郊尚格鬬す、巨猾何の時か除かむ。
故鄉、弟妹あり、流落、丘墟に隨ふ。
成都、萬事好きも、豈に吾が廬に歸るに若かむや。

【字解】〔一〕五盤　嶺の名、また七盤嶺といふ、盤とはまがる義、邦語に幾まがりといふ類なり、此嶺は四川保寧府廣元縣の北百七十里にありといふ。〔二〕映　棧道がとほく之にうつろふをいふ。〔三〕罟　うををとるあみ。〔四〕巢居　鳥のごとく樹木のうへに居を結びてすむ。〔五〕東郊　洛陽の郊外。〔六〕格鬬　うちあひたたかふ。〔七〕巨猾　大なるわるもの、史思明輩をさす。〔八〕故鄉　洛陽附近をさす。〔九〕弟妹　同谷七歌に見えたるものなり、弟は濟州に、妹は鍾離にあり。〔一〇〕流落　おちぶれる。〔一一〕丘墟　兵亂に殘破されたる「をか」や、壘のあと。

【題義】成都紀行の第六首。五盤嶺をすぎて弟妹をおもふ。

【詩意】この五盤嶺はみちはわるいといふものの山の景色はなかなかよろしい。自分等は仰いでは細い棧道をのぼり、俯して下をみれば江邊に樹木がまばらに生えてゐるのに對するのである。ここは土地は邊鄙で人智がひらけぬから魚をとる網すらなく、水は清らかであるがかへつて魚は多くゐる、よい鳥がゐて人を見ても驚かずやたらに飛んだりせず、ところの百姓は半分以上は樹上生活である。こんな淳良質樸の風俗を見ては自分は大にうれしく、心は平になり十分のびのびしたきもちになつた。ただおもへば洛陽の東の方ではまだ格鬬をつづけてゐる、いつになつたら史思明等の惡黨の巨魁が除かれるのであらうか。あの故鄉の方面には弟も妹も居る、彼等はおちぶれて廢殘した邱やとりでのあとなどにそうてさまようてゐることであらう。自分のゆくさきの成都は萬事がよいとしたところで、自分はやつぱり故鄉の自分のいへにかへつた方がよいとおもふのである。

龍門閣

清江下龍門。絶壁無尺土。
長風駕高浪。浩浩自太古。
危途中縈盤。仰望垂綫縷。
滑石敲誰鑿。浮梁裊相挂。
目眩隕雜花。頭風吹過雨。
百年不敢料。一墜那得取。
飽聞經瞿塘。足見度大庾。
終身歷艱險。恐懼從此數。

龍門閣

清江、龍門を下る、絶壁、尺土なし。
長風、高浪に駕す、浩浩、太古よりす。
危途、中縈盤す、仰ぎ望めば綫縷垂る。
滑石敲いて誰か鑿てる、浮梁、裊として相挂ふ。
目眩みて雜花隕ち、頭風ふきて過雨を吹く。
百年敢て料らず、一墜那ぞ取ることを得む。
飽くまで聞く瞿塘を經るを、見るに足る大庾を度るを。
終身、艱險を歷む、恐懼此從り數へむ。

【字解】〔一〕龍門閣　保寧府廣元縣の嘉陵江のほとりにありといふ。この棧道は岸壁と江水とにかけてわたせしものなること詩によりてうかがはる。〔二〕清江　嘉陵江。〔三〕駕　風がなみのうへに乘る。〔四〕浩浩　大なる貌。〔五〕中　半途をいふ。〔六〕縈盤　めぐりわだかまる。〔七〕綫縷　いとすぢ。〔八〕浮梁　水中にうかべて立てられしはしら。〔九〕裊　たをやか。〔一〇〕挂　ささへる。〔一一〕隕雜花　めから火花がちるやう。〔一二〕頭風　あたまから風がおこる。〔一三〕吹過雨　これはたとへなり、とほりあめが風にふきつけらるるやう。〔一四〕百年　人の一生涯をいふ。〔一五〕瞿塘　峽の名、四川夔州府にあり、水の險阻を以てきこゆ。〔一六〕度　わたる、すぎること。〔一七〕大庾　嶺の名、江西省南安府大庾縣にあり、山路の險をいふ。

【題義】成都紀行の第七首。龍門棧道の危險をのぶ。

【詩意】嘉陵江の清流がここで眞倒落しにくだる、岸の絶壁には一尺の土もない。下には遠く吹く風が高浪に乘つて、大むかしからかく吹きつつあるらしい。あぶなげな途が途の半ほどにうねうねしてゐるが、そこからうへを仰いでみるとうへの途はいとすぢが垂れた樣に懸つてゐる。すべつこい石が傾斜してゐるがそれにはだれが穴をあけたものだらう、その穴と水底とにかけてならべたはしらはたがひにささへてはゐるもののなよなよとしてゐる。こんな處をとほると、目はくらやんで種種の花がみだれおちる樣であり、頭には風が吹いて雨を吹きつけられる樣なぞつとする感じが起る。百年の生命もどうなるかわからぬ。一度墜ちたらどうして取りあげることができよう。瞿唐峽の險はあきるほど聞いてゐるし、大庾嶺をわたる險もここで想見することができる。自分は生涯險阻なところを經過することであらうが、その恐ろしいとおもふ手始めはここからかぞへそめるであらう。

石櫃閣

季冬日已長。山晚半天赤。
蜀道多早花。江間饒奇石。
石櫃曾波上。臨虛蕩高壁。

石櫃閣

季冬日已に長し、山晩れて半天赤し。
蜀道、早花多し、江間、奇石饒し。
石櫃、曾（層）波の上、虛に臨みて高壁を蕩かす。

清暉回羣鷗。暝色帶遠客。
羈棲負幽意。感嘆向絶跡。
信甘孱懦嬰。不獨凍餒迫。
優游謝康樂。放浪陶彭澤。
吾衰未自由。謝爾性所適。

清暉に羣鷗回り、暝色、遠客を帶ぶ。
羈棲、幽意に負く、感嘆、絶跡に向ふ。
信に甘んず孱懦に嬰るを、獨り凍餒に迫らるるのみにあらず。
優游す謝康樂、放浪す陶彭澤。
吾衰へて未だ自由ならず、爾が性の適する所に謝す。

【字解】〔一〕石櫃閣　廣元縣北二十五里にありといふ。〔二〕日已長　けだし已に冬至をすぎしなり。〔三〕蜀道　蜀（四川省）へ通ずる道。〔四〕多早花　氣候の暖かきためなり。〔五〕饒　おほし。〔六〕曾波　層波に同じ。〔七〕臨虛　虛は水面をさす。〔八〕蕩　うごかす。〔九〕清暉　水面の日の光りをいふ。〔一〇〕回　飛びめぐる。〔一一〕羈棲　たびにすむ。〔一二〕幽意　風景に親しむの意。〔一三〕絶跡　かけはなれたところ、成都をさす。〔一四〕孱懦　身體のかよわきこと。〔一五〕凍餒　こごゑ、うゑる。〔一六〕優游　ゆつたりたのしむ。〔一七〕謝康樂　晉の謝靈運、康樂公に封ぜらる、山水の遊びをなし詩賦に長ぜり。〔一八〕放浪　きままにくらす。〔一九〕陶彭澤　彭澤縣令陶潛、陶淵明なり。〔二〇〕謝　遜謝の義、それに讓る、劣るをいふ。〔二一〕爾　謝と陶とをさす。〔二二〕性所適　謝靈運の遊名山志に、山水性分之所適とみゆ、性分のにあひたること。

【題義】成都紀行の第八首。石櫃閣のさまと所感とをのぶ。

【詩意】冬の季とてもはや日がながくなり、山はくれがたになつたがそらが半分赤くある。蜀道は暖かで早ざきの花が多く、江には奇妙な石がたくさんある。この石櫃閣はいくへもの波の上にあつて、それが水面にのぞんでたかい岸壁を波上にゆらつかせてゐる。水上では夕日がひかつてむれたる鷗が、とびめぐり、陸ではくらがりの色が遠くゆく旅人をつつんでゆく。自分はたびですまねばならぬ身分でしづかに風景をもてあそぶの意をはたすことができず、歎聲をもらしつつ成都の樣なかけはなれた地へ向ふのだ。これといふも身體のよわいからであつて、ただこごえ、うゑ、に迫まられてゐるためばかりではない。それは自分の覺悟してゐることだ。むかし謝靈運は山水の間にゆつたりとあそび、陶淵明は田園の間にきままにくらした。自分は老衰してまだ自由な生活を爲すことはできぬから、諸君が性のむいた所に向つて生活したのに對しては餘ほど劣つてゐる。

桔柏渡

青冥寒江渡。駕竹爲長橋。
竿濕煙漠漠。江永風蕭蕭。
連筰動嫋娜。征衣颯飄颻。
急流鴇鷁散。絶岸黿鼉驕。
西轅自茲異。東逝不可要。

桔柏渡

青冥たり寒江の渡、竹を駕（架）して長橋と爲す。
竿濕ひて煙漠漠たり、江永くして風蕭蕭たり。
連筰動いて嫋娜たり、征衣、颯として飄颻たり。
急流、鴇鷁散じ、絶岸、黿鼉驕る。
西轅、茲自り異なり、東逝、要む可からず。

高通荆門路。濶會滄海潮。
孤光隱顧眄。遊子悵寂寥。
無以洗心胸。前登但山椒。

高は通ず荆門の路に、濶は會す滄海の潮に。
孤光隱れて顧眄す、遊子、悵として寂寥たり。
以て心胸を洗ふ無し、前みて登るは但だ山椒のみ。

【字解】〔一〕桔柏渡　保寧府昭化縣の東北三里にあり、嘉陵江と白水と合流する處なり。〔二〕青冥　あをくくらし、水のさま。〔三〕駕竹　駕は架に作るべし、わたすこと。〔四〕漠漠　ひろがる貌。〔五〕連筰　ひきはへたる竹の索橋。〔六〕嫋娜　しなやかなるさま。〔七〕征衣　たびごろも、自己の衣をいふ。〔八〕颯　風にあふられるさま。〔九〕飄飄　ひるがへるさま。〔一〇〕鴇「しぎ」、雁に似てあとあしなし。〔一一〕鷁　水鳥なり。〔一二〕鼉鼉　大がめ。〔一三〕西轅　車のかち棒を西にむけること、西南に向つて陸行するをいふ。〔一四〕東逝　川の水が東にながれ去ること。〔一五〕要　むりにひきとめること。〔一六〕高、濶　この二字は山勢水勢をいふ、高は荆門に、濶は滄海にかかる字。〔一七〕荆門　山の名、湖北荆州府にあり、この江水は南流して長江に入り東して荆州に達す。〔一八〕滄海　ひろきうみ、揚子江口の東海をいふ。〔一九〕孤光隱　孤光とは一片の川光をいふ、ここをすぐれば陸路となり、しばらく川と別るるなり、故に「隱る」といふ。〔二〇〕遊子　たび人、自己をいふ。〔二一〕悵　うらむ貌。〔二二〕洗心胸　洗は水の緣語なり。〔二三〕山椒　山の頂を冢と曰ひ、また椒とも曰ふ。

【題義】成都紀行の第九首。桔柏渡のさまをいひ、水と別れんとする情をのぶ。

【詩意】このわたり場は水の色が青くくらくみえる、そのうへに竹をわたして長い橋がかけてある。橋の竹竿はしめつて煙がひきはへてをり、長き水面を風がさびしく吹きわたる。橋をわたればひきはへた竹のなはばしがなよなよとうごき、旅ごろもは風にあふられてふはふはひるがへる。流れが急で鴇だの鷁だのがとび散り、きつたてのきしべには大がめなどが威張つてゐる。ここかち西の方成都へゆくみちがはつきりわかれる。東流する嘉陵江の水はとどめようとしてもだめだ。その水は高く荆門の路にも通じ、濶く滄海の潮にもであふのである。江水の白き光が隱れるので自分は左右をふりかへつてみる、さうして自分はうらめしくさびしさを感ずる。この水にわかれては胸のけがれを洗ふべき何物もない、前面に進んで登るべきはただ山の頂ばかりである。

劍門

惟天有設險。劍門天下壯。
連山抱西南。石角皆北向。
兩崖崇墉倚。刻畫城郭狀。
一夫怒臨關。百萬未可傍。
珠玉走中原。岷峨氣悽愴。
三皇五帝前。雞犬各相放。
後王尚柔遠。職貢道已喪。

惟天、險を設くる有り、劍門は天下の壯なり。
連山、西南を抱く、石角皆北に向ふ。
兩崖、崇墉倚り、刻畫、城郭の狀あり。
一夫怒つて關に臨めば、百萬未だ傍ふ可からず。
珠玉、中原に走る、岷峨、氣悽愴たり。
三皇五帝の前、雞犬各〻相放つ。
後王、柔遠を尚ぶ、職貢、道已に喪はる。

至今英雄人。高視見霸王。
幷呑與割據。極力不相讓。
吾將罪眞宰。意欲鏟疊嶂。
恐此復偶然。臨風默惆悵。

【字解】【一】劍門　四川保寧府劍州劍門縣界にあり、大劍山また梁山ともいふ。其北三十里に小劍山あり、晉の張載が劍閣銘をつくりしも此處なり。【二】設險　易坎卦に、天險不レ可レ升也、地險山川丘陵也、王公設レ險以守二其國一とみゆ。【三】兩崖　左右のがけ。【四】崇墉倚　高き城壁の相倚るがごとし。【五】剗畫　いろいろとしくみすること。【六】百萬　百萬人の敵。【七】傍　そばへちかづく。【八】珠玉　蜀地の產物。【九】走中原　中原は支那洛陽地方をいふ、走とは運び去らるるの速なるをいふ、上たるものの誅求によつてもち去らるるなり、一本に「珠玉」の句の前に川嶽儲二精英一、天府興二寶藏一の二句ありとのことなれども未だ依據を詳にせず、よりて從はず。【一〇】岷峨　岷山、峨眉山、前者は成都の西にあり、後者は西南にあり。【一一】淒愴　うれはしき貌。【一二】三皇　伏羲・神農・燧人とするは白虎通の說。【一三】五帝　黃帝・顓頊・帝嚳・堯・舜。【一四】各相放　かつてにあひはなつ、（或は各を莫に作る、莫相放ならば中原と蜀と交通なかりしをいふ。）【一五】後王　後世の帝王。【一六】尙　たふとぶ。柔遠「尙書」（舜典）に柔レ遠、能レ邇とみゆ、柔遠は遠方の民をなでやすんずること、ここはむしろ姑息手段にて手なづけんとする義に用ひたり。【一七】職貢「周禮」に制二其職一、各以二其所レ能、制二其貢一、各以二其所レ有とみゆ、地方の官に在る者は其の才能によりて職に居り、其の土地の有する所のものを以て貢とするをいふ。【一八】道　職貢の道。【一九】高視　うへをむく、威張りて人もなげのさま。【二〇】見　作者（或は一般人）が見るなり。【二一】霸王　英雄人が霸となり王となること、高視の句は我見二其高視而爲二霸王一の意。【二二】幷呑　蜀より進んで他の地をあはせのむこと。【二三】割據　蜀の地內のみにてその地をさき取りてよりばとしてをること。【二四】不相讓　他のもの（多くは中央權力者）と讓らず。【二五】罪　罰すること。【二六】眞宰　造物主。【二七】鏟　けづりとる。【二八】疊嶂　かさなつた山。【二九】此　英雄割據の事をさす。【三〇】偶然　ふと實現して自己の豫想のごとくなる。

【題義】成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がだきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雜なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治まり雞や犬もめいめいはなち飼ひにして爭ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は幷呑するか割據するかいづれにしても極力抗爭して中央の權力者に對して讓らない。自分はむしろ造物主をつかまへてこの疊なはる山山をけづりとつてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

鹿頭山

鹿頭何亭亭。(一)是日慰(二)飢渴。
連山西南斷。俯見千里豁。
遊子出(三)京華。劒門不(四)可越。
及(五)茲險阻盡。始喜原野濶。
殊(六)方昔三分。(七)霸氣曾(八)間發。
天下今(九)一家。雲端失(一〇)雙闕。
悠(一一)然想揚(一二)馬。繼(一三)起名律(一四)兀。
有(一五)文令(一六)人傷。何(一七)處埋爾骨。
紆(一八)餘脂(一九)膏地。慘(二〇)澹豪俠(二一)窟。
仗(二二)鉞非老(二三)臣。宣(二四)風豈專(二五)達。
冀(二六)公柱(二七)石姿。論(二八)道邦(二九)國活。
斯(三〇)人亦何幸。公鎮(三一)踰(三二)歲月。

鹿頭山

鹿頭何ぞ亭亭たる、是の日飢渴を慰む。
連山、西南に斷ゆ、俯して千里の豁なるを見る。
遊子、京華を出づ、劒門、越ゆ可からず。
茲に及んで險阻盡く、始めて喜ぶ原野の濶なるを。
殊方昔三分す、霸氣曾て間發す。
天下今一家、雲端、雙闕を失す。
悠然、揚馬を想ふ、繼起、名律兀たり。
有文人をして傷ましむ、何の處にか爾が骨を埋むる。
紆餘たり脂膏の地、慘澹たり豪俠の窟。
鉞に仗る老臣に非ずんば、風を宣する豈に專達せむや。
冀公、柱石の姿、道を論じて邦國活す。
斯人亦何の幸ぞ、公鎮して歲月を踰ゆ。

【字解】【一】鹿頭山　四川綿州德陽縣治の北三十里にあり、南の方成都をさること百五十里、此地に至りて平野を望む。【二】亭亭　高き貌。【三】是日　山にかかつた日をさす。【四】京華　みやこ。【五】不可越　越ゆることができぬほどであつた。【六】茲此山をさす。【七】殊方　ちがつた方位の土地。【八】三分　三國の時代、魏・吳・蜀・對峙せしをいふ。【九】霸氣　霸者の氣。【一〇】間發　まじはりておこる、はさまつてでる。【一一】今　唐の時。【一二】失雙闕　雙闕とは蓋し劒門の如き天險をたとへていふ、(或は曰く霸王天子の宮殿に擬して造る所の闕なりと)失とは無くなること、有れどもなきが如し。【一三】悠然　はるか。【一四】揚馬　前漢の司馬相如・揚雄、竝に蜀の產みたる大文學者なり。【一五】繼起　揚馬についで起れる人人、案ずるにこれは陳子昂・李白・が輩を想ひ浮べたるか。【一六】有文　文才あるをいふ。【一七】何處一句　葬所さへ知れざるを怪むなり、案ずるに他人に就ていへるも、自己不遇の感うちにひそむなるべし。【一八】何處　埋爾骨　葬所さへ知れざるを怪がれる地、豐饒なるをいふ。【一九】紆餘　廣遠の貌。【二〇】脂膏地　あぶらのなたへる。【二一】慘澹　ものがなしきさま、豪俠のはびこるをうれふるなり。【二二】窟　いはや、すみかをいふ。【二三】仗鉞　まさかりをつく、誅罰の權を附與せられてあること。【二四】老臣　年老いたる臣。【二五】宣風　天子の德風をのべつたへる。【二六】專達　獨斷にてゆきわたる樣にする。【二七】冀公　裴冕をいふ、至德二載十二月に右僕射裴冕は冀國公に封ぜられ、乾元二年六月に成都尹に拜し、劍南西川節度使に充てらる。【二八】論道　「尙書」(周官)に茲惟三公、論ノ道經ノ邦、燮ニ理陰陽ニ」とみゆ、論道とは道德に關することを論ずるなり。【二九】柱石　國家の柱となりどだいいしとなる。【三〇】斯人　斯民に同じ、蜀地の民をいふ。【三一】公鎮　公は冀公、鎮はしづめの役として來りしをいふ、節度使として來任せしこと。【三二】踰歲月　上に記せしごとく裴冕は六月來りし故十二月にては半歲ばかりになる、月はこえたるも歲はいまだこえず、こえんとするときなり。

【題義】成都紀行の第十一首。はじめて平地を見たるうれしさと、蜀の古の文學者をおもふことと、裴冕がことに言ひ及べり。

【詩意】鹿頭の山がたかく秀でてゐる、ここへきてけふはじめて饑渴の苦をなぐさめることができた。

なぜといふに連山は西南に於てとだえ、下をみると千里の野がひろびろとみえわたる。自分はみやこをでて、劍門の險阻は越ゆることができぬほどであつたが、ここまで來て險阻がなくなり、やつと原野のひろいのをうれしくおもふ。この蜀の特別地方はむかしは三分割據の時代もあり霸者の氣がときとしてまじはり出でたが、今や天下は一家の如く統一となり、劍門の雙闕も雲間にあるにはあるがその存在を失うたと同じことになつた。自分はそれにつけて蜀からうまれたむかしの司馬相如・揚雄などをはるかにおもふ、そして彼等に繼いで蜀からでた人人もその名は高い、ただ文才あることは往往不幸をともなふので文才あるといふことが我我をして心をいたましめる、汝等有名の文學者はどこにその骨を埋めてをるか、それさへはつきりせぬではないか。(自分もそれに似てはゐぬか、の意ならん)いつたい蜀の如き廣遠なる豐饒の地、また我我をしてかなしませるほど豪俠の盛なるところ、かかる地はここに刑罰の權をにぎるものは老臣を要する、老臣でなければどうして獨斷を以て天子の德風を宣布し通達せしむることができよう。幸にも冀國公裴冕は國家の柱石たる姿をもつて、細事には關せず大道を論じ正されるので唐の國家も之がために活きるのである。だから蜀の人民はなんといふ幸福であらう、この公が來任されてあまたの年月をこえんとしてゐるではないか。

成都府

翳翳桑榆日。照我征衣裳。
我行山川異。忽在天一方。
但逢新人民。未卜見故鄉。
大江東流去。遊子日月長。
曾城塡華屋。季冬樹木蒼。
喧然名都會。吹簫間笙簧。
信美無與適。側身望川梁。
鳥雀夜各歸。中原杳茫茫。
初月出不高。衆星尙爭光。
自古有羈旅。我何苦哀傷。

【字解】【一】成都府　四川省の都會なり。【二】翳翳　日のかげるさま。【三】桑榆　日の落つる方位、西方。【四】征衣裳　たびごろも。【五】未卜一句　故鄉を見うる時期はいつかとうらなはぬ、その時期あらざればなり。【六】大江　岷江。【七】東流去

大江の水は東に流れ去る、成都にて江は見えず、歳月の去ることをたとへていふ。【八】日月長　時久しく過ぎしこと。【九】曾城　曾層同じ、かさなれるしろ、成都の城。【一〇】華屋　りつぱないへ。【一一】間　雜はること。【一二】簧　簧は笙の舌。【一三】信美　王粲が登樓賦に、信美而非吾土兮、曾何足以少留とあり、荆州は景美なるも留まるに足らずといへり、其語を借用す。【一四】無與適　吾が意と適する（氣にいる）ものなきをいふ。【一五】望川梁　梁は舟橋、之をわたりて故郷にかへりたしとおもふなり。

【題義】成都紀行の第十二首。紀行の最終にして蓋し成都に入らんとして作る。

【詩意】うすぐらく西方にかげつた夕日が自分の旅衣を照らす。だんだん別な山や川をたびして忽ち天のはてへきた。であふものはめなれぬ人民であつて故郷へはいつかへれるとみこみもつかぬ。日月は大江の水の東に流れ去る様に去つてかへらぬ、自分が旅にでてからはなかなか久しくなる。成都のかさなつた城にはりつぱな家屋が充滿してをり、冬の季に樹木が蒼蒼としてゐる。さすが名高い都會とてにぎやかで簫を吹く音が笙の音にいりまじつてきこえる。まことによい場所ではあるが自分の氣にいつたものとてはない、だから身をそばだてて川の舟ばしのある方をながめやる（あはよくばそれにのつて故郷へかへりたい）。夜になつて烏雀はそれぞれねぐらへかへつた、中原の地方ははるかに茫茫としてどこだかわからぬ。あまり高くもなく新月が出た。たくさんの星がそれと光を爭うてゐる。まことにさびしい景色だ。（自分のこのときの胸中やいかに）。しかし旅するといふことは今にはじめぬ、むかしからあることなのだ、自分だけがひどくかなしむべきことではなからう。

酬高使君相贈

古寺僧牢落。空房客寓居。
故人供祿米。鄰舍與園蔬。
雙樹容聽法。三車肯載書。
草玄吾豈敢。賦或似相如。

古寺、僧牢落たり、空房、客寓居す。
故人、祿米を供し、鄰舍、園蔬を與ふ。
雙樹、法を聽くことを容し、三車、肯て書を載す。
草玄吾豈に敢てせむや、賦は或は相如に似む。

【字解】【一】高使君　彭州の刺史高適、使君とは刺史の敬稱なり。【二】相贈　詩をおくりくれしこと。【三】古寺　作者初めて成都に到著して浣花溪の一寺に寓居す。【四】牢落　おちぶれるさま。【五】客　自己をさす。【六】故人　舊知の人、高適をさす。【七】雙樹　娑羅雙樹、この木は四方各一雙の枝をいだすといふ、釋迦は雙樹の間にて法を說きしといふ、寺ならばこの木を用ひたり、實にその木あるにあらず。【八】容　ききいれること。【九】聽法　法は佛法。【一〇】三車　昔、惠施は五車の書を載せしといふ、三といふは少量なるをいふ、（一說に法華經にいふ所の牛車羊車鹿車の三車なりと、又一說に唐の尉遲寬基といふ僧が前車に經論、中車に自己、後車に妓女食饌を載せしことを用ふと、今皆取らず）。【一一】草玄　前漢の揚雄が故事、雄哲學を好みて太玄經を起草す。【一二】相如　漢の武帝の時の文豪司馬相如。

【題義】作者成都に來りて浣花溪の一寺に寓居せしとき、親友高適が彭州の刺史として近地にありて詩をおくりくれしにより之に返事せし作なり。高適の詩は左の如し。

贈杜二拾遺

傳道招提客。詩書自討論。佛香時入レ院。僧飯屢過レ門。聽レ法還應レ難。尋レ經賸欲レ翻。
草玄今已畢。此後更何言。

【詩意】古寺で僧もさびしいによつて、そのあきべやに自分は寓居してゐる。そこへ舊知の友は俸祿の米をわけて供給してくれるし、となりの家のものははたけでできた野菜をめぐんでくれる。ここへ自分はすこしばかりの書物を車にのせてはこびこみ、また雙樹のあひだで坊さんが說法をするのをきくことをもゆるされてきく。太玄經を起草するなどのことは自分の敢てよくする所ではないが、賦を作ることならば司馬相如に似ることはできるかもしれぬ。

卜居

浣花溪水水西頭。主人爲卜林塘幽。已知出郭少塵事。更有澄江銷客愁。
無數蜻蜓齊上下。一雙鸂鶒對沈浮。東行萬里堪乘興。須向山陰入(上)小舟。

居を卜す

浣花溪水、水の西頭、主人爲に卜す林塘の幽なるを。已に知る郭を出でて塵事少きを、更に澄江の客愁を銷するあり。無數の蜻蜓齊しく上下し、一雙の鸂鶒、對して沈浮す。東行萬里、興に乘ずるに堪へたり、須らく山陰に向つて小舟に上るべし。

【字解】【一】卜居　住居のよしあしをうらなひてさだむ。【二】浣花溪　溪は成都の西郭外にあり、一に百花潭ともいふ。【三】主人　自らいふ。【四】爲卜　爲めにとは自己のためにといふこと。【五】田郭　くるわがはなれること。【六】澄江　卽ち錦江、澄は水のすめるをいふ。【七】蜻蜓　とんぼ。【八】上下　のぼり、くだる。【九】鸂鶒　をしどり。【一〇】乘興　次の山陰の句をみよ。【一一】山陰一句　晉の王獻之が故事、獻之字は子猷、山陰(今浙江省紹興府)に居り、雪夜忽ち剡溪にありし戴安道を憶ひ舟に乘じてゆく、既に門にいたりて返る、人其故を問ふに曰く、吾、本、興に乘じて行く、興盡きて返る、と。

【題義】成都の浣花溪に住居を定めしことをのぶ、題草堂詩に、經營上元始とあれば此詩は到著の翌春上元元年の作なり。

【詩意】浣花溪の水の流るるその西のほとり、そこに自分は林塘の幽邃なところを卜して住居ときめた。そこはくるわをはなれてゐて俗事がすくないことはわかつてゐるうへに、自分のたびの愁をけしてくれるきれいな江もある。そのあたりにはたくさんの「とんぼ」がそろつてのぼりくだりをしてをるし、一對のをしどりはむきあつて浮きつ沈みつしてゐる。更に興に乘ずれば東のかた萬里の遠くまでもゆくにさしつかへはない、機をみて小舟にのつて山陰地方にまででかけるべきである。

王十五司馬弟。出レ郭相訪。遺營草堂貲。

王十五司馬弟、郭を出でて相訪ひ、草堂を營む貲を遺る

客裏何遷次。江邊正寂寥。
肯來尋一老。愁破是今朝。
憂我營茅棟。攜錢過野橋。
他鄉唯表弟。還往莫辭勞。

【字解】〔一〕王十五司馬弟　司馬の職にある王姓の從弟。〔二〕遣　貽と同じ、おくる。〔三〕貲　たから、金錢なり。〔四〕遷次　うつりてやどる、ひきこす。〔五〕肯來　わざわざくる。〔六〕一老　作者自己をさす。〔七〕愁破　胸のうちのはれやかになるをいふ。〔八〕茅棟　かやぶきのむね。〔九〕野橋　けだし萬里橋をさす。〔一〇〕表弟　ししたのいとこ。

【題義】司馬の官にある從弟の王某が郭から出かけて訪問し來り、自分が草堂をつくるかねをおくつてくれた。上元元年浣花溪の草堂を營みしときの作。

【詩意】自分は客中になんでこんなところへひきこしたか、それはこの江邊がひつそりとしていいからだ。こんなところへお前はわざわざこの老人をたづねてくれた、けふは自分もむねのなかがはれやかである。おまへは自分がこのかやぶきの家をこしらへるのにかねが無からうかと心配して、錢をもつて橋のそばのここへ立ちよつてくれた、まことにありがたいことである。他鄉に於てはたのみにするものはただおまへあるのみだ、どうか往來する難儀などいとはぬ樣にねがひたい。

蕭八明府實處覓桃栽

奉乞桃栽一百根。
春前爲送浣花村。
河陽縣裏雖無數。
濯錦江邊未滿園。

【題義】某縣の縣令蕭實なる人のところから桃の苗木をもとめる詩なり。

【詩意】桃の苗木百本おねがひいたすが、自分のためにどうか春のおそくならぬうちにそれを浣花の村へ送つていただきたい。あなたの支配せらるる縣內ではその苗木は無數にあるであらうが、わたくしのこの江邊ではまだ園にいつぱいにはなりませぬ。

從韋二明府續處覓綿竹

華軒藹藹他年到。
韋二明府續が處從り綿竹を覓む

〜【字解】〔一〕韋二明府續　縣令の職にある蕭實、明府は縣令の敬稱。〔二〕覓　もとむ。〔三〕栽　うゑること。〔四〕桃栽　「栽するに足るべき桃」の義。〔五〕河陽縣　晉の潘岳、河陽の縣令となり花をうゑたり、今借りて蕭實が管轄する縣をいへり、實際の地は何といふ縣なるか明ならず。〔六〕濯錦江　卽ち錦江。

綿竹亭亭出縣高。　綿竹亭亭、縣を出でて高し。
江上舍前無此物。　江上舍前、此の物無し、
幸分蒼翠拂波濤。　幸に蒼翠、波濤を拂ふを分て。

【題義】蕭續といふ縣令のところから綿竹をもとむる詩。

【詩意】あなたはかつてりつぱな馬車にのつてたくさんのともをつれ綿竹縣へゆかれたことがある、そのとき縣舍のうへに綿竹がたかくしげつて出てゐたでありませう。わたくしの住居のところにはそいつが有りませぬ、どうぞみどりの波濤が風に吹き拂はるるやうなみごとなやつを分けていただきたい。

憑何十一少府邕覓檉木栽　何十一少府邕に憑りて檉木を覓めて栽す

草堂塹西無樹林。　草堂塹西、樹林無し、

【字解】【一】憑　よる、おかげ

章續、詩中の句によるに續は嘗て綿竹縣の縣令となり、いまは成都に居るものとみゆ。【三】綿竹　綿州の綿竹縣の紫巖山より產する竹なり。【四】華軒　うつくしき車、章續の乘りもの。【四】藹藹　從者などのむらがり多きさま。【五】他年　いつの年かわからぬがかつての年をさす。【六】到　綿竹縣にゆきしこと。【七】亭亭　たかきさま。【八】出縣　縣は縣の官舍をいふならん。【九】江上舍前　錦江のほとり、草堂のまへ。【一〇】此物　綿竹をさす。【一一】蒼翠拂波濤　竹の風に吹かるる形容、竹の梢がうごけばみどりの波濤風に吹きはらはるるに似たり。

非子誰復見幽心。　子に非ずんば誰か復た幽心を見む。
飽聞檉木三年大。　飽くまで聞く檉木三年大なりと、
與致溪邊十畝陰。　與に致せ溪邊十畝の陰。

【題義】縣尉何邕の世話で「はげしばり」の木をもとめた詩。

【詩意】わたしの草堂の「ほり」の西の方には樹木のはやしがない。あなたでなければだれがわたしの幽邃をめづる心を知つてくれるものがあらう。三年ごし大きくなつてゐる「はげしばり」があなたの方にあることはよつくきいてゐる。どうぞわたしのためにこのかはべりの十畝の樹陰をおくつてください。

憑韋少府班覓松樹子栽　韋少府班に憑りて松樹子を覓めて栽す

落落出羣非櫟柳。　落落、羣を出づるは櫟柳に非ず、
青青不朽豈楊梅。　青青不朽なるは豈に楊梅ならむや。

【字解】【一】韋少府班　縣尉韋班、班は涪江縣の尉ならん。【二】松樹子　松の苗木。【三】落落　獨をかうむる。【四】何十一少府邕　縣の尉官何邕、少府は尉の敬稱、時に何邕は利州綿谷縣の尉たりといふ。【三】檉木　檉は「ハゲシバリ」といふ木。【四】塹　ほり。【五】子　何邕をさす。【六】幽心　作者自己の幽邃を愛するこころ。【七】與致　與は「爲めに」なり、致とはこちらへおくりこすこと。【八】溪邊　溪は浣花溪。

欲存老蓋千年意。　存せむと欲す老蓋千年の意、
爲覓霜根數寸栽。　爲に霜根數寸なるを覓めて栽せしめよ。

立のさま。【四】 羣　樹木のむれ。【五】 檉柳　「けやき」。【六】 楊梅　「やまもも」。【七】 老蓋　老いたる車のかさ、松の枝葉のしげりたる貌。【八】 爲　我がために。【九】 霜根　霜を經たる根、松苗をさす。

【題義】 韋班をたのんで松苗をもとめううる詩。

【詩意】 落落と獨立して樹羣をぬきでてゐるものは「けやき」ではない、（松だ）。青青として朽ちざる色を示してゐるものは「やまもも」ではあるまい、（松だ）。わたしは後日成長の後は車のかさの如く千年も枯れぬ樣な松の精神を保存したいとおもふ、だからあなたはその松苗の二三寸ばかりの霜根をわたしのためにもとめてうゑる樣にさせてもらひたい。

又於韋處乞大邑瓷盌

大邑燒瓷輕且堅。　大邑の燒瓷輕く且堅し、
扣如哀玉錦城傳。　扣けば哀玉の如し、錦城傳ふ。
君家白盌勝霜雪。　君が家の白盌は霜雪に勝れり、

又韋が處に於て大邑の瓷盌を乞ふ

【字解】【一】 韋　韋班。【二】 大邑　縣の名、邛州に屬す。【三】 瓷盌　やきもののおわん。【四】 哀玉　かなしげな玉のおと。【五】 錦城　錦官城、即ち成都の城の名。【六】 茅齋　すなはち草堂の書齋。

急送茅齋也可憐。　急に茅齋に送らば也可憐ならむ。

【七】 也　俗語なり、「亦」に同じ。【八】 可憐　その器の愛すべきをいふ。

【題義】 また韋班がところから大邑燒きの陶器のお椀をもらふためにやつた詩。

【詩意】 大邑で燒く陶器は輕くて堅い。之をたたくとかなしげな玉の樣なおとをだすとここの城ぢうでの評判だ。あなたのいへにある白盌は霜雪よりもまさつてしろい。おほいそぎでわたしのところへ送つてくださるならばまことに珍重するに足るものだとおもひます。

詣徐卿覓果栽

草堂少花今欲栽。　草堂花少し、今栽せむと欲す、
不問綠李與黃梅。　綠李と黃梅とを問はず。
石筍街中却歸去。　石筍街中に却つて歸り去る、
果園坊裏爲求來。　果園坊裏に求め來る。

徐卿に詣りて果を覓めて栽す

【字解】【一】 詣　いたる、宅へゆきしこと。【二】 徐卿　其名詳ならず、作者「徐卿二子歌」あり、同一人ならん。【三】 果　果樹なり、即ち詩中の李と梅なり。【四】 綠李　黃梅　綠といひ、黃といふは果實の色をいふ。【五】 石筍街　作者歸りみちに通過する街の名。【六】 果園坊　徐卿が居る所、第三句と第四句とは倒敍法を用ふ。【七】

爲・自己のために。

【題義】徐卿といふ人のところへでかけていつて果樹をもとめてうゑたことをのぶ。

【詩意】わたしの草堂では花が少いからいまうゑようとおもふ。綠の實がなる李でも黃い實がなる梅でもどれでもかまふことはない。それで自己のためにあなたの居る果園坊までさがしに來たのだが、これから石筍街をとほつてうちへもどつてゆく。

堂成

背郭堂成蔭(一)白茅。
緣江路熟俯(四)青郊(五)。
檣林礙(七)日吟風葉。
籠竹和(九)煙滴露梢。
暫止飛鳥將(一〇)數子。
頻來語(一一)燕定新巢。

堂成る

背郭、堂成りて白茅に蔭はる、
緣江路熟して青郊に俯す。
檣林日を礙ふ風に吟ずる葉、
籠竹煙に和す露を滴らす梢。
暫く止まる飛鳥は數子を將ゐ、
頻りに來る語燕は新巢を定む。

【字解】【一】背郭・くるわを負ふこと。【二】蔭・おほふ、「かや」をかぶせて屋根を葺きしをいふ。【三】緣江・かはぞひ。【四】路熟・往來になれしこと。【五】俯・みおろすこと。【六】青郊・青き草のある野外。【七】礙日・日光をさへぎる。【八】籠竹・竹の種類の名、節のあひだ八九寸ありと。【九】和煙・煙をおぶること。【一〇】將・率ゐる。

旁人錯(一二)比揚雄(一四)宅。
懶惰無心作(一五)解嘲。

【題義】草堂のできしことを詠ず。上元元年春暮の作なるべし。

【詩意】城のそとくるわをせ負うて白い茅で屋根をかけた堂ができあがつた。江ぞひのかよひなれた路にあたつて青い野原をみおろすことができる。はげしばりの林は日光をさへぎつてその葉は風に鳴つてをるし、籠竹の露を滴らす梢は煙をもおびてをる。しばしきてとまる鳥は三四の雛をつれてをり、ちやくや鳴きかはしてしきりにやつてくる燕はここに新しき巢を置いておくことにした。わきの人はまちがへてこの宅を揚雄の宅に比べるものがあるが、さういはれても自分はなまけもので「解嘲」を作らうといふ心ももたぬ。(そのままにしておく)。

旁人錯つて比す揚雄が宅、
懶惰にして解嘲を作るに心無し。

【字解】【一】語燕・さへづるつばめ。【二】旁人・よその人。【三】錯比・まちがへてなぞらへる。【四】揚雄宅・漢の哀帝の時雄は隱れて太玄經を起草せり、人玄の尙白きを嘲るものあり、因つて「解嘲」を作る。【五】解嘲・上をみよ。

蜀相

丞(二)相祠(三)堂何處尋。
錦(四)官城外柏(五)森(六)森。

蜀相

丞相の祠堂何の處にか尋ねむ、
錦官城外、柏、森森たり。

【字解】【一】蜀相・蜀漢の丞相諸葛亮、字は孔明をいふ。【二】丞相・諸葛亮をいふ、後漢の建安廿六

映(七)堦碧草自春色。
隔(八)葉黄鸝空好音。
三顧(九)頻繁(一〇)天下計。
兩朝開(一一)濟老(一二)臣心。
出師未(一三)捷身先死。
長使(一四)英雄涙滿襟。

【詩意】蜀の丞相諸葛孔明の祠堂は何處にたづぬべきか、それはほかならぬ錦官城外の柏樹の森森とたちならんだところがそれである。來てみればきざはしに映うてゐる碧の草はおのづから春の色を呈してをるが、葉かげにさへづるうぐひすはいたづらによいねいろにないてゐるばかり、其の人は見えぬのである。むかし蜀の先主がしげしげと三たびまでこの人を草廬のうちに顧みたといふは天下を安んずるの計を定めたいためばかりであつたのであり、親子二代の君に對してかくすところなく胸のうちをひらいて仕事をなしたといふはまつたくこの老臣の心がからでたことである。しかるにせつかく魏を伐たんとの軍隊を出しながらまだかちいくさとならぬうちに自分のからだがさきに死んでしまはれた。これはまことに殘念至極のことであつて、永久に後世の英雄をして涙を襟もとに滿たさしむる次第である。

梅雨　梅雨

南(一)京犀(二)浦道。四月熟(三)黄梅。
湛(四)湛長(五)江去。冥冥細雨來。
茅茨疎易濕。雲霧密難開。

【題義】成都の諸葛亮の廟に謁して作る。

堦に映ずる碧草は自ら春色、葉を隔つる黄鸝は空しく好音。
三顧頻繁なるは天下の計、兩朝開濟するは老臣の心。
出師未だ捷たず身先づ死す、長く英雄をして涙襟に滿たしむ。

年蜀の劉備帝位に卽き、諸葛亮を以て丞相・錄尚書事となす。【三】祠堂　やしろ、廟なり、諸葛亮の廟は成都の西北二里にあり、劉備が廟の西にありと。【四】錦官城　成都の西城の名、織錦の官を置くによりて名づくといふ。【五】柏　「はく」の木。【六】森森　たちならぶさま。【七】堦　堂のきざはし。【八】黄鸝　うぐひすの類。【九】三顧　亮がなほ隆中に臥せしとき、劉備は三たびまで之を其の草廬に往き訪れたり、これを三顧といふ。【一〇】頻繁　繁一に煩に作る、頻繁も頻煩もしげきこと、三たびも訪ふとはしげきことなり。【一一】天下計　此語は不完全句なり、「天下を安んずるの計を定めんがためなり」といふほどの意、此句は劉備のがはより立てていふ。【一二】兩朝　先主劉備と、其子後主劉禪との二代をいふ。【一三】開濟　此の二字について明解を下せしものあるを聞かず、或は開ㇾ基濟ㇾ美の義とし、或は開ㇾ物濟ㇾ務の義とするも、晉の劉琨傳の琨忠亮開濟、司馬琳傳の性開濟好ㇾ施、桓宣傳の開濟篤素、等の用例によれば唐時の慣例として人の性格を寫すに「開濟」なる語ありしがごとし、疑らくは開ㇾ懷濟ㇾ事の義ならんか、暫らく之によりてとく。【一四】老臣　亮をさす。【一五】出師　蜀の建興五年亮軍をひきゐて北のかた漢中に駐まり魏を伐たんとす、發するにのぞみ後主に對し出師表をたてまつる。【一六】未捷身先死　亮後ち又大衆を盡くして斜谷より出で武功の五丈原に據り司馬懿と渭水の南に對陣すること百餘日、建興十二年陣中に卒す。【一七】英雄　後世の英雄をいふ。

竟日蛟龍喜。盤渦與岸迴。

【字解】【一】梅雨　梅のみのなるころふるあめ、「つゆのあめ」。【二】南京　成都をいふ、至德二載成都府を改めて尹を置き東西二京になぞらへ南京と號す。【三】犀浦　縣の名、成都の一部、浣花溪は犀浦縣に屬す。【四】黄梅　梅のきばんだ實。【五】湛湛　水のたたへしさま。【六】長江　錦江の水。【七】竟日　ひいつぱい。【八】蛟龍　水中の動物。【九】盤渦　うづまき。【一〇】與岸迴　岸の勢にしたがつてめぐる。

【題義】草堂のつゆのさまをのぶ、上元元年四月の作。

【詩意】南京の犀浦縣の吾が居宅の道では四月に梅のみが熟する。このときの江の水は湛湛とたたへて流れ去り、くらつぼくこまかな雨がふつてくる。吾が家のかやぶきのやねはまばらであるから濕りやすく、雲や霧は濃くとざして開けがたい。一日ぢう喜んでゐるものは水中の蛟龍であり、水面のうづまきは岸勢にしたがつて回轉しつつある。

爲農

農と爲る

錦里煙塵外。江村八九家。
圓荷浮小葉。細麥落輕花。
卜宅從茲老。爲農去國賒。

【字解】【一】錦里　錦官城の里、即ち浣花溪の地をさす。【二】煙塵　烽煙風塵、これは故郷京洛の兵馬のことをいふ、下の「去國賒」の意なり。【三】江村　浣花村をいふ。【四】去國　京洛をはなるる。【五】賒　はるか。【六】勾漏令　晉の葛洪が故事、洪、勾漏に丹砂を出だすときき其地の令となる、勾漏縣は勾漏山の下にあり、勾漏山は安南に在り。【七】問丹砂　上にみゆ。

【題義】農民となつて住むことをのぶ、上元元年春の季の作。

【詩意】この錦里は兵馬のちりからかけはなれたところで、江ぞひの村八九軒の家があるばかりだ。みわたせば圓い荷は小さい葉を水面にうかべてをり、細かな麥の實からは輕らかな花が落ちる。自分はここに居宅を卜してこれからここでくらさうとおもふ、まことにはるばる故郷からはなれた處に農民となつたものだ。ただ自分が遠いむかしの勾漏の縣令にはづかしくおもふことは丹砂いかにと問ふことができぬことだ。（丹砂が得らるるならば大にながいきをすることもできるであらうのに）。

遠慚勾漏令。不得問丹砂。

【字解】【一】錦里　錦官城の里、即ち浣花溪の地をさす。【二】煙塵　烽煙風塵、これは故郷京洛の兵馬のことをいふ、下の「去國賒」の意なり。【三】江村　浣花村をいふ。【四】去國　京洛をはなるる。【五】賒　はるか。【六】勾漏令　晉の葛洪が故事、洪、勾漏に丹砂を出だすときき其地の令となる、勾漏縣は勾漏山の下にあり、勾漏山は安南に在り。【七】問丹砂　上にみゆ。

【題義】農民となつて住むことをのぶ、上元元年春の季の作。

【詩意】この錦里は兵馬のちりからかけはなれたところで、江ぞひの村八九軒の家があるばかりだ。みわたせば圓い荷は小さい葉を水面にうかべてをり、細かな麥の實からは輕らかな花が落ちる。自分はここに居宅を卜してこれからここでくらさうとおもふ、まことにはるばる故郷からはなれた處に農民となつたものだ。ただ自分が遠いむかしの勾漏の縣令にはづかしくおもふことは丹砂いかにと問ふことができぬことだ。（丹砂が得らるるならば大にながいきをすることもできるであらうのに）。

有客

客有り

患氣經時久。臨江卜宅新。
喧卑方避俗。疎快頗宜人。
有客過茅宇。呼兒正葛巾。

氣を患へて時を經ること久しく、江に臨みて宅を卜する新なり。
喧卑方に俗を避く、疎快頗る人に宜し。
客有り茅宇に過る、兒を呼びて葛巾を正す。

自鋤稀(八)菜甲。小(九)摘爲(一〇)情親。　自ら鋤けば菜甲稀なり、小しく摘むは情親の爲なり。

【字解】〔一〕有客　此篇の題「有客」と次篇の「賓至」とは名目いれちがひになり居たりしを仇氏「草堂本」によりて正したり。有客とは偶然に來客ありしをいふ。〔二〕患氣　肺氣の病をわづらふ。〔三〕臨江　江は錦江。〔四〕喧卑　やかましくいやし、俗居のさま。〔五〕疎快　世事ととほざかりてかつてに氣もちよくして居ること。〔六〕宜人　自己にとりてつがふよし、人といふはひろくいへるのみ。〔七〕葛巾　くづの纖維もて織りし頭巾。〔八〕菜甲　甲とは野菜のでたての「くき」をいふ。〔九〕小摘　すこしばかりつむ。〔一〇〕情親　こころやすい人、即ち來客をさす。

【題義】ふと來客ありしことをよめり。

【詩意】自分はながらく肺の病氣をしてゐるが、このごろ江のそばにあらたに居宅を卜した。ちやうどやかましくいやしい世俗を避けることができ、きままに世ばなれてゐるところは自分にとつてぐあひがよろしい。かかるところへお客が茅ぶきの家へたづねてくれたので、こどもを呼んで葛の頭巾をかぶりなほす。客にそなへるものは手づくりの野菜だ。それは自分が鋤いてつくつたので心立ちは稀れではあるが、こころやすのお客であるからすこしばかり之を摘んでさしあげるのだ。

賓(一)至　賓至る

幽(二)棲地僻經(三)過少。　幽棲地僻にして經過少し、
老(四)病人扶再(五)拜難。　老病人扶けて再拜難し。

【字解】〔一〕賓至　これもお客が來たことをいふ。「有客」と「賓至」とは偶然と故意とのちがひありなどいふは拘泥の見ならん。〔二〕幽棲　ひつこんですむ。〔三〕經過　たちよる人をさす。〔四〕老病人扶　上の幽棲地に對すれば老病人とつづくかとおもふ、老病人とは作者自己をさす、扶とは他人から手でささへてもらふこと。〔五〕再拜　客を二度禮拜する。〔六〕文章　自作のそれ。〔七〕漫勞　いたづらにわづらはす、客が虚名にまどはされて來たと謙遜ひつこんですむ。〔三〕經過　たちよる人をさす。〔四〕老病人扶　上の幽棲地に對すれば老病人とつづくかとおもふ、老病人とは作者自己をさす、扶とは他人から手でささへてもらふこと。〔五〕再拜　客を二度禮拜する。〔六〕文章　自作のそれ。〔七〕漫勞　いたづらにわづらはす、客が虚名にまどはされて來たと謙遜

豈有文(六)章驚海内。　豈に文章の海内を驚かす有らむや、
漫(七)勞車馬駐江(九)干。　漫に勞す車馬の江干に駐まるを。
竟日淹留佳客坐。　竟日淹留、佳客坐す、
百(一一)年麤(一二)糲腐儒餐。　百年麤糲、腐儒餐す。
不ㇾ嫌野外無供給。　野外供給無きを嫌はずんば、
乘ㇾ興還來看藥(一三)欄。　興に乘じて還た來つて藥欄を看よ。

していふ。〔八〕車馬　客のそれ。〔九〕江干　干は「ほとり」。〔一〇〕佳客　來客をほめていふ。〔一一〕百年　生涯。〔一二〕麤糲　あらくついた米、一斛の粟を六斗につくが糲なりと。〔一三〕藥欄　藥草畠のてすり、作者病身なれば園にかかるものあるなり。

【題義】お客の來りしにつけてのぶ。

【詩意】自分が幽棲してゐる土地はかたよつたところで立ちよつてくれる人はすくない。また年より文章をしたうて來訪されたかしらぬが、どうして自分には海内を驚かすほどの文章があらうや。じつで病氣もちの自分はわきのものに扶けてもらうてもお客におじぎするのは困難だ。お客は或は自分のにわざわざこの江べりのところへ車馬をとどめてくださつたことはむだなご苦勞と申すほかはない。しかしお客さまは日いつぱいここにゐのこつておすわりくださる。腐儒たる自分はいまにはじめずあ

らくついた米をたべてをる。（客もともにそれを食するならん）。野外のこととて格別おそなへするものは無いが、それをおひとひなくば、お氣のむいたときまたおいでになつて庭の藥草ばたけのところをごらんねがひたい。

狂夫(一)

萬里橋西(二)一草堂(四)。　萬里橋西の一草堂、
百花潭水卽滄浪(六)。　百花潭水卽ち滄浪。
風含翠篠(七)娟娟淨。　風を含みて翠篠、娟娟として淨く、
雨裹紅蕖(九)冉冉(一〇)香。　雨に裹まれて紅蕖、冉冉として香し。
厚祿故人書斷絕(一二)。　厚祿の故人、書斷絕、
恒飢稚子色凄涼(一四)(一五)。　恒飢の稚子、色凄涼。
欲ㇾ塡(一六)溝壑(一七)惟疎放。　溝壑に塡せむと欲するも惟疎放なり、
自笑狂夫老更狂。　自ら笑ふ狂夫老いて更に狂するを。

青色の水をいふ、滄浪之水清兮、可ㇾ以濯ㇾ吾纓一、滄浪之水濁兮、可ㇾ以濯ㇾ吾足一の滄浪なり、「尙書」（禹貢）によれば漢水より東に在る水名なりとのことなれども今從はず、ここは自己の足をあらふべき水、隱退の處として用ひたり。【七】 篠　しのだけ。【八】 裹　つつむ。【九】 蕖　芙蕖なり、「はすのはな」。【一〇】 冉冉　次第に生ずる貌。【一一】 厚祿故人　大官となつて多くの俸祿をもらつてゐる舊知の友人、指す人あるならんも何人と知りがたし、舊注嚢冕となせども余は高適が輩かとおもふ、高適に對しては救ひを求めし詩あればなり。【一二】 書斷絕　これはたまたまこのとき書信がとだえしなるべし。【一三】 恒飢稚子　いつもうゑてゐるこども。【一四】 色　顏色。【一五】 凄涼　かなしげ。【一六】 塡溝壑　みぞやたににはまりこんでそれをうづめる。のたれ死にすること。【一七】 疎放　世とうとくし、きままにする。

【字解】【一】 狂夫　病的のきちがひには非ず、道に向て逆取するものをいふ、詩題は末句の語をとりて命じたり。【二】 萬里橋　錦江にかかれる橋の名。【三】 西　この詩には西とあり、「懷錦水居止」詩には橋南とあり、正しくは西南に位するならん。【四】 草堂　作者の諸詩句によりて察すれば、草堂の位置は成都の背郭、碧雞坊外、萬里橋西南、百花潭卽浣花溪の西北に在り。【五】 百花潭　卽ち浣花溪。【六】 滄浪　

【題義】 自己の狂態をあざけりて作れる詩。

【詩意】 萬里橋の西に一の草堂がある。そのそばにある百花潭の水はすなはち自分にとつては滄浪の水で隱退の場所である。みわたせば翠色の篠竹は風を含んで娟娟とうつくしく淨らかであり、雨のうるほひにつつまれてゐる紅の蓮の花はつぎつぎにかをつてゐる。ときにこのごろは厚祿をもらつてゐた舊友からの手紙はとだえ、いつもひもじがつてゐるこどもの顏色はいよいよかなしげにみえてゐる。こんなわけで自分はいまにもどぶへはまつてのたれ死にしさうになつてゐるのにただただ世ばなれてかつてきままにしてゐる。これは元來狂夫であるこの自分は年がよつてもう一層狂氣じみてきたのかと、自分ながらをかしくなる。

田舍(一)

田舍清江曲。柴門古道旁。
草深迷市井。地僻懶衣裳。
楊柳枝枝弱。枇杷對對香。
鸕鷀西日照。曬翅滿漁梁。

【字解】〔一〕田舍　農家なり、自宅をさす。〔二〕市井　むかしは二十五戸を一井とし、そこに市を爲くり交易す、因て交易の地を市井といふ。〔三〕衣裳　體裁よく著こなすことについていふなるべし。〔四〕楊柳　やなぎ、楊を一に欓に作る、欓柳は前に見えたり。〔五〕對對　これは果實の房の相對してなつてゐるをいふならん、「對對」を或は「樹樹」に作る。〔六〕鸕鷀　「う」のとり。〔七〕曬翅　はねを日光にさらしてほす。〔八〕漁梁　うををとる「やな」。

【詩意】清らかな江の曲にある百姓家。古びた道路のそばに立つ柴の門。ここは草深くしげつてどこが市井の地やらわからず、あまりにかたゐなかできまりきつて著物をきるさへものうくおもふ。みれば楊柳は枝ごとになよなよとしてをり、枇杷の實は一對一對香しくみのつてゐる。「う」のとりは西日に照されて、「やな」にたくさんたかつてはねをさらしてゐる。

江村

清江一曲抱村流。
長夏江村事事幽。
自去自來梁上燕。
相親相近水中鷗。
老妻畫紙爲棊局。
稚子敲針作釣鉤。
但有故人供祿米。
〔多病所須惟藥物〕
微軀此外更何求。

【字解】〔一〕江村　かはぞひのむら。〔二〕梁　はり。〔三〕棊局　ごばん。〔四〕敲針　すぐなる針をたたいて曲げるなり。〔五〕釣鉤　つりばり。〔六〕但有故人供祿米　仇氏は「文苑英華」により此句を用ひたれども諸本みな「多病所須惟藥物」に依る、余は之に從ふ。〔七〕所須　須は「まつ」、いりようとする。〔八〕微軀　つまらないからだ、謙遜していふ。

【題義】居村の生活のさまをのぶ。

【詩意】きよらかな錦江が一まがりまがつて村をかかへて流れてゐる。このかはぞひの村では日ながの夏には事ごとに幽靜なものばかりだ。すなはち梁のうへにはひとりでに燕がいつたりきたりしてゐるし、水のなかの鷗はおたがひに親しみ、おたがひに近づきあうてゐる。家では老妻は紙に線をひいて棊局をこしらへ、こどもは針をたたきまげてうをつりばりを作る。いま病身の自分のいりようとするものは藥品のたぐひばかりであつて、その以外のものは自分のからだにとつて何も求むるものとて

はない。

江漲

江漲る

江漲柴門外。兒童報急流。
下ㇾ牀高數尺。倚ㇾ杖沒中洲。
細動迎ㇾ風燕。輕搖逐ㇾ浪鷗。
漁人縈小楫。容易拔船頭。

江漲る柴門の外、兒童、急流を報ず。
牀を下れば高きこと數尺、杖に倚れば中洲沒せり。
細かに動く風を迎ふる燕、輕く搖ぐ浪を逐ふ鷗。
漁人、小楫を縈ひ、容易に船頭を拔く。

【題義】江水のみなぎりしさまをのぶ。

【詩意】柴門の外で江水がでてきた。こどもらは水の流れが急になつたとしらせてくる。之をきいてねだいからおりるとはや二三尺もみづかさが高くなり、そとへでて杖に倚つてみるとはや中洲がかくれてみえぬ。風を迎へて飛ぶ燕は細かに動いてゐるし、浪をおうておよぐ鷗はかろらかにゆらいでゐにうごくこと、輕搖は鷗がかろくゆらぐこと、燕は水に關係なきがごとくなれども然らず、これ大水のうへの燕の水にふれんばかりにひくくとぶさまをいへるなり。【三】縈　水に流されぬ樣に繩にてまとふをいふならん。【四】拔船頭　拔とは舟人の用語にて「回らす」ことなりと、或は捩に作る、捩はねぢらすこと。

【字解】【一】江　錦江。【二】細動・輕搖「動」・「搖」は仇氏は水のうごくことにみたり。余は鳥のさまとみる。細動は燕がこまか

る。れふしたちは小さな楫を繩でくくりつけて、やすやすと船の頭をむけかへてゆく。

野老

野老

野老籬邊江岸迴。
柴門不正逐江開。
漁人網集澄潭下。
估客船隨返照來。
長路關心悲劍閣。
片雲何事傍琴臺。
王師未報收東郡。
城闕秋生畫角哀。

野老の籬邊、江岸迴る、
柴門正しからず江を逐うて開く。
漁人の網は集まる澄潭の下、
估客の船は返照に隨つて來る。
長路關心、劍閣を悲しむ、
片雲何事ぞ琴臺に傍ふ。
王師未だ報せず東郡を收むるを、
城闕秋生じて畫角哀し。

【原注】至德二年、陞成都爲南京、故得稱城闕。

かること。【一〇】悲劍閣　劍閣により て隔てらるるを悲しむなり。【一一】片雲　此句敍景にして兼れて自己の身況をたとへたり、片雲はよるべなきひとひらの雲。【一二】傍　そふ。【一三】琴臺　司馬相如の故迹、別に「琴臺」の作あり、其條下をみよ、臺は浣花溪の北にありといふ。【一四】王師　官軍。【一五】收東郡　東郡は洛陽以東の諸郡をさす。乾元二年九月に東京及び濟・汝・鄭・滑

【字解】【一】野老　田野の老人、自己をさす。【二】江岸迴　江は錦江、迴はまがつてゐるをいふ、淸江一曲抱ㇾ村流の一曲とおなじ。【三】不正　江岸まがれる故に門の形も一直線にあらざるをいふ。【四】逐江　江のまがつたすがたにしたがうての意。【五】澄潭　水のすみたるふち、卽ち百花潭をさす。【六】估客　商人をさす。【七】隨返照來　返照は夕日のてりかへし、返照に隨て來るとは舟を泊せんとの意よりして來るなり。【八】長路　故郷を去ることの遠きをいふ。【九】關心　氣にかの遠きをいふ。【一〇】悲劍閣　劍閣により て隔てらるるを悲しむなり。【一一】片雲　此句敍景にして兼れて自己の身況をたとへたり、【一二】琴臺　司馬相如の故迹、別に「琴臺」の作あり、其條下をみよ、臺は浣

の四州皆賊に陷り、上元元年六月、田神功、史思明が兵を鄭州に破りしも、東京の諸郡は未だ收復さるるにいたらず。【六】城闕　成都の城闕、闕は宮門についていふことばなれども、成都は南京にのぼされ都としての取りあつかひを受くるゆゑかくいふこと作者の自注にみゆ。【七】秋生　秋になること。【八】畫角哀　畫き飾りたる角ぶゑの音かなし。

【題義】成都に客寓して賊の平がざるため故郷にかへり得ざるのさびしさをのべたり。

【詩意】自分の家の籬のほとりでは錦江の岸がまがつてゐる、だから柴の門もまがつた江の形のままに折れまがつて開かれてある。みれば魚をとる人人の網は澄潭のところに集つてをるし、流れを下つてくる商人の船も夕日のてりかへしとともに泊りすべくやつてくる。故郷まで道路のとほいことは氣がかりであつて劍閣にへだてられてゐることはことに悲しいのである。琴臺の方をみると一片の雲が之によりそうてゐるがなんでそんなところによりそうてゐるのか、そのこころもちがわからぬ。（なんで自分もその雲のやうにこんな土地へきてゐるのか）。官軍が東方の諸郡をとつたといふしらせはまだない、ただここの城の門闕には早くも秋が生じて軍隊の吹きならす角ぶえのねがあはれにきこゆる。

雲山

(一)京洛雲山外。音書(四)靜不來。

雲山

京洛、雲山の外、音書、靜にして來らず。

(五)神交作賦客。力盡望(八)鄉臺。神は交はる作賦の客、力は盡く望鄉臺。

(九)衰疾江(一〇)邊臥。親(一一)朋日暮迴(一二)。衰疾、江邊に臥す、親朋、日暮に迴る。

白鷗元(一三)水宿。何事有餘哀。白鷗元水宿す、何事ぞ餘哀有る。

【字解】【一】雲山　雲のゐる山。【二】京洛　長安・洛陽。【三】音書　故鄉からのたより。【四】靜　ひつそり、おとさたなきをいふ。【五】神交　精神相交る。【六】作賦客　司馬相如をさす。【七】力盡　氣力なきなり。【八】望鄉臺　成都縣北九里に在り、隋の蜀王秀の築きし所なりといふ。【九】衰疾　老衰・疾病。【一〇】江邊　江は錦江。【一一】親朋　親戚朋友。【一二】迴　かへり去るをいふ。【一三】水宿　水邊にとまる、鷗を以て自家の況にたとへていへり。

【題義】第一句の雲山の二字をとりて題とせしまでなり。客寓のさびしさをのぶ。

【詩意】長安洛陽は遠く雲山のかなたにあつて、故鄉からのたよりはひつそりとしてちつとも來ぬ。吾が精神はいたづらに此地のうんだ賦家たる司馬相如とゆきかようてをるが、ここの望鄉臺に於て故鄉をながめるために氣力は盡きはてた。自分はこのかはべりで衰疾でうちふし、親戚朋友らは日が暮れるとみなもどつていつてしまふ。水邊をみれば白い鷗が宿つてゐる、彼は水に宿るが本性であるのに、なぜか知らんがあはれにたへきれぬ樣なさまがみえる。（自分もこの「かもめ」に似てゐるとの意。）

遣興

雲山　遣興

興を遣る

干戈猶未定。弟妹各何之。
拭淚霑襟血。梳頭滿面絲。
地卑荒野大。天遠暮江遲。
衰疾那能久。應無見汝期。

干戈猶未だ定らず、弟妹各〻何くに之く。
涙を拭へば襟を霑す血なり、頭を梳れば滿面の絲。
地卑くして荒野大に、天遠くして暮江遲し。
衰疾那ぞ能く久しからむ、應に汝を見る期無かるべし。

【題義】客寓のものおもひをやりしことをのぶ。

【詩意】いくさがまだ平定せぬ。弟や妹はそれぞれどこへゆきしことやら。涙をぬぐうてみれば襟もとをうるほすは血の涙であり、頭をくしでとかせば白髮がぬけおちてかほぢうにふりかかる。家のそとをながめると、地面は卑く平で荒れた野はらが大きく横はり、天は遠くつらなつて夕ぐれの江はゆるくながれてゐる。自分の老衰疾病ではとてもこの世にながく生きてゐることはあるまいから、おまへたち（弟妹をさす）に面會する時期は無いであらう。

遣愁

養拙蓬爲戸。茫茫何所開。
江通神女館。地隔望鄉臺。

愁を遣る

拙を養ひて蓬を戸と爲す、茫茫何の開く所ぞ。
江は通ず神女館、地は隔つ望鄉臺。

漸惜容顏老。無由弟妹來。
兵戈與人事。回首一悲哀。

漸く惜む容顏の老ゆるを、弟妹の來るに由無し。
兵戈と人事と、首を回せば一に悲哀なり。

【字解】【一】養拙　世わたりべたなもちまへを養ふ。【二】蓬爲戸　貧居の樣子。【三】茫茫　ひろびろとしてはつきりせぬ貌。【四】何所開　戸の前にはいかなるものが開きいだされるか。【五】江　揚子江。【六】神女館　巫山の神女の廟をさす、廟は夔州府巫山縣治の西北二百五十歩にありと。【七】地隔望鄉臺　地は夔州の地をさす、望鄉臺は成都に在り、前の「雲山」の詩にみえたり。

【題義】夔州客寓のさびしさをのぶ。夔州時代の作。

【詩意】自分はもちまへの拙なところを養うて蓬のくさを戸にしてをる、その戸を開けて茫茫たる前面になにがひらきだされるか、といふと江の水は神女の館に通じ、地ははるかに望鄉臺をへだててをる。自分はだんだんおのれのかほつきの年老いゆくのを惜むばかりで、弟や妹がこちらへ來るてだては無い。いくさごととといひ、骨肉間の人事といひ、首をめぐらしてみればただただかなしくおぼゆるのみのことである。

【餘論】仇氏は此篇を成都の作とし舊編夔州に置きたるを非とせり。しかしながら成都の作とせば、「江通」の江は錦江なり、錦江にて江は巫山縣の神女館に通ずとは何の意ぞや。又仇氏は地隔望鄉臺は卽ち力盡望鄉臺なりといへるが、大意はそれにてよろしきも、成都の作とせば地隔望鄉臺は地と望鄉臺とを同一視し、隔とは京洛に對して隔たるの義とみざる可からず。これ文法の慣例上不可なり、

上句の江と館とは別物なり、下句に於ても地と臺とは別とみるが常例なり、仇氏之を同視せんとするは無理なり、仇氏又曰く、夔州にありては作者峽を出でんことを思ひをるに何ぞさかのぼつて望鄉臺のことを言はんや、と。これ然らず、江通・地隔の二句は第二句の何所ノ開を承けて來る、故に一は夔州の下流の神女館をあげて且つそれとなく妹に想到し、一は上流の望鄉臺をあげてややひろく鄉を望むの意を喚び起せしなり、かくして漸惜以下下半の結をなせり、決して不自然といふべからず。舊編によりて之を夔州の詩中に置くに如かず。

杜鵑行　杜鵑行

古時杜宇稱二望帝一。魂作二杜鵑一何微細。跳ノ枝竄ノ葉樹木中。
搶佯瞥捩雌隨ノ雄。毛衣慘黑貌憔悴。衆鳥安肯相尊崇。
隳形不敢栖二華屋一。短翮惟願巢二深叢一。穿ノ皮啄ノ朽觜欲ノ禿。
苦飢始得ノ食二一蟲一。誰言養ノ雛不二自哺一。此語亦足ノ爲二愚蒙一。
聲音咽咽如ノ有ノ謂。號啼畧與二嬰兒一同。口乾垂ノ血轉迫促。
似ノ欲二上訴一於蒼穹一。蜀人聞ノ之皆起立。至ノ今相效傳二微風一。
迺知變化不ノ可ノ窮。豈思昔日居二深宮一。嬪嬙左右如ノ花紅。

古時杜宇望帝と稱す、魂杜鵑と作る何ぞ微細なる。枝に跳り葉に竄る樹木の中、搶佯瞥捩雌雄に隨ふ。毛衣慘黑貌憔悴、衆鳥安んぞ肯て相尊崇せむ。隳形敢て華屋に栖まず、短翮惟深叢に巢くはむことを願ふ。皮を穿ち朽に啄み觜禿せむと欲す。苦飢始めて一蟲を食することを得。誰か言ふ雛を養ふに自ら哺せずと、此の語亦愚蒙と爲すに足れり。聲音咽咽謂ふ有るが如く、號啼畧嬰兒と同じ。口乾き血を垂れて轉た迫促、上りて蒼穹に訴へんと欲するに似たり。蜀人之を聞きて皆起立す、今に至つて相效ひて微風を傳ふ。迺ち知る變化窮むべからざるを。豈思はんや昔日深宮に居り、嬪嬙左右花の如く紅なりしことを。

此篇「文苑英華」に刻作二司空曙一といひ、注して「又見二杜甫集一」といへり。仇氏は蔡本の之を夔州の詩の內に置きたるを「蜀人聞ノ之」の語ありとて成都の作にひきあげたり。余案ずるに「蜀人聞ノ之」の語ありとて成都の詩たるの證となすに足らざるのみならず、杜の作なるや否やも疑問なり。余は寧ろ他人の作のまぎれこみしものとおもふ。詩また見るに足らず、故に釋せず。

題二壁上韋偃畫馬一歌　壁上の韋偃が畫馬に題する歌

韋侯別我有所適。
知我憐渠畫無敵。
戲拈禿筆掃驊騮。
欻見騏驎出東壁。
一匹齕草一匹嘶。
坐看千里當霜蹄。
時危安得眞致此。
與人同生亦同死。

韋侯我に別れて適く所有り、
我が渠が畫の敵無きを憐むを知りて、
戲れに禿筆を拈りて驊騮を掃ふ、
欻ち見る騏驎の東壁に出づるを。
一匹は草を齕み一匹は嘶く、
坐に看る千里、霜蹄に當るを。
時危くして安んぞ眞に此を致して、
人と生を同じくし亦死を同じくする
「を得む。」

馬ことに元氣よし、當は時間のうへにてぶつつかる意なるべし、ちやうどいま霜蹄で踏みつつあるをいふ、(或は適當する、霜蹄にふさはしいといふ義にもみらるべし)。【四】時危　時世安穩ならず。【五】安得　希望の辭、下句までかかる。【六】致此　「此」は馬をさす、致はこちらへ招きいたす。

【題義】韋偃が旅行せんとするとき馬を畫いてくれた、それを壁上にかけてみて、之に題した詩。

【詩意】韋君は自分に別れてどこぞへゆかうとしてゐる、自分は彼が畫では敵するもの無いほど名人であることを愛してゐる、彼もそのことを知つてゐるので自分のために戲れにはげちよろけの筆をひねつて驊騮のさまをかきなぐつてくれた。にはかに東壁の上に騏驎の名馬があらはれ出たのをみとめる。』その一匹は草をたべてをり、一匹はいなないてをる。いまちやうど霜をおびた蹄で千里の地を踏みつつあるの姿がそのままみられるのである。』いま世がまだ太平にならぬ時だ、ほんたうにこんな名馬を招きよせて騎り手といつしよに戰場で生死させることができぬものだらうか、できるならどうかさうしてみたい。』

【字解】【一】韋偃　京兆の人にして蜀に寓居す、馬を畫くを以て名あり、偃或は鷗に作る。【二】韋侯　侯は敬稱、偃をさす。【三】有所適　どこぞへ旅行せんとするなり。【四】渠　「かれ」偃をさす。【五】拈　ひねる、取り弄ぶをいふ。【六】禿筆　毛ぢきの坊主になつたふで。【七】掃　かきなぐること。【八】驊騮　駿馬。【九】欻　忽ち。【一〇】騏驎　千里の馬。【一一】齕　かむ。【一二】千里　千里の遠地。【一三】當霜蹄　霜蹄とは秋のひづめ、秋は

戲題王宰畫山水圖歌

十日畫一水。
五日畫一石。
能事不受相促迫。
王宰始肯留眞跡。
壯哉崑崙方壺圖。
挂君高堂之素壁。

戲題王宰畫山水圖歌

十日に一水を畫き、
五日に一石を畫く。
能事、相促迫するを受けず、
王宰始めて肯て眞跡を留む。
壯なる哉崑崙方壺の圖、
君が高堂の素壁に挂く。

【字解】【一】王宰　蜀の人にして能く蜀の山を畫くといふ。【二】能事　能力を發揮すること、繪畫のことをさす。【三】促迫　さいそくする、日限をいそぐなり。【四】眞跡　眞の筆のあと。【五】崑崙　仙山。【六】方壺　海中の三山を三壺といふ、方丈を方壺、蓬萊を蓬壺、瀛州を瀛壺といふ、壺といふはその

巴陵洞庭日本東。
赤岸水與銀河通。
中有雲氣隨飛龍。
舟人漁子入浦溆。
山木盡亞洪濤風。
尤工遠勢古莫比。
咫尺應須論萬里。
焉得并州快剪刀。
剪取吳松半江水。

巴陵洞庭、日本の東、
赤岸の水は銀河と通ず。
中雲氣の飛龍に隨ふ有り。
舟人漁子、浦溆に入る、
山木盡く亞ぐ洪濤の風に。
尤も遠勢に工なり、古も比する莫し、
咫尺應に須らく萬里を論ずべし。
焉んぞ并州の快剪刀を得て、
剪取せむ吳松半江の水を。

此句と次の「山木」の句は倒敍なり。【七】山木　山に生じたる樹木。【八】亞　つぐ、畫面にていひ、山木が下方にあり、濤が上部にあるをいふ。【九】洪濤風　風、おほなみを吹くさまをいふ。【一〇】遠勢　遠方をながめた景色。【一一】咫尺　畫幅の面積。【一二】萬里　卽ち遠景。【一三】并州　今の山西省の地、切れもののでるところ。【一四】快剪刀　きもちよくきれるたちものかたな。【一五】剪取　この二字はこの畫幅についていふとみゆ、畫面に松江に似たところあるによりその部分をきつてとりたいといふなり、これ題に「戲れに」とある所以なり。【一六】吳松　吳地の松江、松江は禹貢の三江の一、松江府の南四十五里にあり、作者

形、上廣く中狹く下方（しかく）なればなりと。【七】君　王宰をさす。【八】素壁　しろいかべ。【九】巴陵　今の湖南岳州府。【一〇】洞庭　湖の名、巴陵の西にあり。【一一】赤岸　山の名、揚州江都縣にあり。【一二】銀河　あまのがは。【一三】中有　中とは畫面の中央とおぼしき處をいふ、この一句は巴陵・赤岸の二句をまとめたる句にて單句なり。【一四】舟人　せんどう。【一五】漁子　れふし。【一六】入浦溆　溆もまた「うら」なり、風怒り濤壯なるを以て舟人漁子等みなうらにはひるなり、

嘗て吳に遊び其地の風景を思ひて忘れず、因つて斯の言を發せり。

【題義】王宰のかいた山水の圖をみて戲れに之に題した詩。

【詩意】十日かかつて或る水をゑがく、また五日かかつて或る石をゑがく、かくゆつくりしてその仕事に他人からせつかれなければそこで始めて王宰は自分の眞の筆のあとをのこすのである。いやなんと壯なものではないか、君のざしきのしらかべにかけてある崑崙・方壺の圖は。』巴陵の洞庭の水から日本東海の水、それに赤岸山あたりの水、それが銀河の水とあひ通じてかかれ、中央部にはそらとぶ龍について雲氣のわきたつてるところがある。また山の樹木は下方にあつてその上方にはすばらしく風だつたおほなみがかかれ、舟人・漁子等はみな浦わにはにげこんでゐる。』君は遠景をゑがくことには尤もたくみで古人にも比ぶべきものがない、山水の圖はかくあるべきで咫尺のせまいうちに於て萬里の形勢あるや否やを論ずべきである。君のゑはあまりにうまいから、自分はどうかして并州のよくきれるたちものがたなで松江の水に似たところの半分ほどをきり取つてしまひたいとおもふが、どうだ。』

戲爲韋偃雙松圖歌

戲れに韋偃が雙松の圖の歌を爲る

天下幾人畫古松。

天下幾人か古松を畫く、

〜【字解】【一】韋偃　前にみえた

畢宏已老韋偃少。
絕筆長風起纖末。
滿堂動色嗟神妙。』
兩株慘裂苔蘚皮。
屈鐵交錯迴高枝。
白摧朽骨龍虎死。
黑入太陰雷雨垂。』
松根胡僧憩寂寞。
龐眉皓首無住著。
偏袒右肩露雙脚。
葉裏松子僧前落。』
韋侯韋侯數相見。
我有一匹好東絹。
重之不減錦繡段。
已令拂拭光凌亂。
請君放筆爲直幹。』

畢宏は已に老い韋偃は少し。
筆を絕てば長風、纖末より起る、
滿堂色を動かして神妙と嗟す。』
兩株慘裂す苔蘚の皮、
屈鐵交錯して高枝迴る。
白なることは朽骨摧けて龍虎死し、
黑なることは太陰に入りて雷雨垂る。』
松根の胡僧は寂寞たるに憩ふ、
龐眉皓首、住著無し。
右肩を偏袒して雙脚を露はす、
葉裏松子は僧前に落つ。』
韋侯韋侯、數〻相見る、
我に一匹の好東絹有り。
之を重んずる減せず錦繡段。
已に拂拭せしめて光凌亂たり、
請ふ君筆を放つて直幹を爲れ。』

なか。【三三】 東絹　或は曰く關東の絹なり、或は曰く鷲溪の絹なりと、鷲溪は梓州鹽亭縣にあり、成都の東にあたる。【三四】 錦繡段　張衡が四愁詩のなかの語、段は一くぎりをいふ。【一五】 拂拭　ほこりをはらひぬぐふ。【三六】 凌亂　みだるる貌。【三七】 放　ほしいままにする。【一八】 直幹　まつすぐなみき。

【題義】 韋偃が二本の松の樹を畫いたのをみて戲れにその歌をつくる。偃が屈曲した松をたくみに畫いたのをみてまつすぐな幹をかけといふは戲れなり。

【詩意】 いま天下に古松をよくかくものは幾人あるか、畢宏は年よりになつたし、韋偃はわかい、この二人ぐらゐのものか。偃がかき了ると松の葉ずゑから遠く吹く風がおこつてくる、之をみて一座の人人はみなかほ色をかへて神妙と歎美する。』 その松は二株あつて苔むした皮がむごたらしく裂け、高い枝が下へまがつてかがめた鐵がたがひにまじはつてゐる。苔皮のさけた幹は白くてたとへば朽ちた骨がくだかれて龍虎が死んでゐるかのごとく、鐵の樣な枝のさがつてまじはり黑くなつてゐるところはたとへば積陰中に入つて雷雨が垂れさがつてゐるかの樣である。』 松の根もとに胡僧がをり、ひ

り。【二】 雙松　二本の松樹。【三】 畢宏　天寶中の御史にして善く古松をゑがくといはる、宏はのちに大曆二年に給事中となり、京兆少尹・左庶子等の官となれり、古松に於ては古風を變ずと稱せらる。【四】 絕筆　筆を止めること、かき了る。【五】 長風　遠く吹くかぜ。【六】 纖末　松の葉ずゑをいふ。【七】 滿堂　滿堂の人。【八】 動色　色は顏色、動色は驚いて色をかへること。【九】 屈鐵　まがつたくろがね、枝の形容。【一〇】 交錯　まじはる。【一一】 迴　回曲するをいふ。【一二】 白　松樹皮の色 【一三】 黑　囘枝の色。【一四】 太陰　積陰なり、極北の地を太陰といふと。【一五】 胡僧　西域より來た外國僧。【一六】 寂寞　松樹のはえた場所をさす。【一七】 龐眉　ふさふさしたまゆ。【一八】 皓首　しらがあたま。【一九】 無住著　行踪きまりなし。【二〇】 偏袒　かたはだぬぐ。【二一】 露　あらはす、はだしのこと。【二二】 葉裏　地につもつてゐる葉の

つそりしたところにやすんでゐる。その僧はしらがあたまでふさふさした眉をもち、住所不定の僧の様だ。かれは右の肩の方をかたはだぬぎになり、左右ともはだしである。僧の前には葉のなかに松ぼつくりが落ちちつてゐる。』　韋君よ、自分はあなたとたびたびかほをあはせてゐる、懇意なあひだがらだ。自分は錦繡の織物にもまけず大切にしてゐるいい束絹を一匹もつてゐる、その絹はほこりをはらはせてきらきらひかる様になつてゐる。どうぞ筆にまかせてまつすぐな松の幹をかいていただきたい。

北鄰

明府豈辭滿。藏身方告勞。
青錢買野竹。白幘岸江皐。
愛酒晉山簡。能詩何水曹。
時來訪老疾。步屧到蓬蒿。

北鄰

明府豈に滿を辭せむや、身を藏して方に勞を告ぐ。
青錢、野竹を買ひ、白幘、江皐に岸く。
酒を愛す晉の山簡、詩を能くす何水曹。
時に來つて老疾を訪ふ、步屧、蓬蒿に到る。

【字解】【一】北鄰　北どなりにすんでゐる人のことをいふ。【二】明府　縣令の敬稱、黃鶴の注に蓋し王明府かといへり、案ずるに其人縣令にして官を辭し閒居せしものならん。【三】豈辭滿　反語によむ、「盈滿を待ちて始て之を辭するに非る」をいふ、出典は謝靈運の辭ゝ滿豈多秩に本く、謝詩は漢の邴曼容が故事を用ふ、曼容は官に在るに六百石に滿つるを待たずして之を辭す、盈滿を戒めて之を辭するは祿秩の多少によらぬことなりといふが謝詩の意なり、杜句亦同義なり。（一説に豈辭ゝ滿と疑問に訓ますものあり、亦通ず）【四】藏身　退隱する。【五】告勞　公事勞苦なりと告げて之を辭するをいふ。【六】青錢　青色の銅錢。【七】白幘　幘は頭髮をおほふ「づきん」の類。【八】岸　かたむける、幘をうしろざまにかぶりて額をあらはすなり。【九】江皐　皐は下を水の流れてゐる「ほか」。【一〇】山簡　山濤の子、永嘉三年に襄陽の長官となり酒にのみふける。【一一】何水曹　梁の詩人何遜、遜は天監中に建安王の水曹行參軍兼記室となる、又水部郎となる、因て何水曹とも何水部ともいふ。【一二】老疾　自分の老と疾。【一三】步屧　ざうり。【一四】蓬蒿　よもぎふのやど、後漢の張仲蔚が故事、作者その自宅をさす。

【題義】北鄰にすめる某氏のことをのぶ。

【詩意】あなたは縣令ぐらゐで辭職されたのだから盈滿なるを待つて之を辭したわけではなく、早く隱居するのが目的でいまや勞を告げて退棲してをられる。さうして錢をだして野生の竹を買つたり、江ぞひのをかで白いづきんをゆがめてかぶつたりしてをられる。あなたは酒を愛することは晉の山簡のごとく、詩のできることは梁の水曹何遜のごとくである。そのおかたが時にはわたくしの病氣をおたづねくだされ、ざうりばきでいぶせき宿へおこしになる。（ごしんせつありがたいことにおもひまするの意）

南鄰

錦里先生烏角巾。

南鄰

錦里先生、烏の角巾、

〜〜【字解】【一】南鄰　南となりに

園収芋栗不全貧。
慣看賓客兒童喜。
得食堦除鳥雀馴。
秋水纔深四五尺。
野航恰受兩三人。
白沙翠竹江村暮。
相送柴門月色新。

園に芋栗を收む、全く貧ならず。
賓客を看るに慣れて兒童喜び、
堦除に食するを得て鳥雀馴る。
秋水纔に深し四五尺、
野航恰も受く兩三人。
白沙翠竹、江村の暮、
相送れば柴門、月色新なり。

朱山人から送つてもらふ。【一〇】柴門　杜家の柴門。

【題義】南鄰の某氏を往訪せしことをしのぶ。

【詩意】南鄰の錦里先生朱山人は隱者のすがたで黑い方形の頭巾をかぶつてゐる。そのはたけには芋や栗がとれるから全く貧乏だといふわけではない。お客ずきとみえてその家のこどもらも賓客をみなれてわたしが訪問すればよろこんでをり、いつもきざはしのそばで餌をやるものか雀などもたべものがたべられるとおもつて人になれてをる。秋の江水がやつと四五尺のところへ二三人ぐらゐのれる野

すむ人のことをいふ、朱山人なる者たり、舊解は作者南鄰へ往訪せる詩ととく、作者別に「過南鄰朱山人水亭」詩あり。【二】錦里先生　錦里は錦江の里、卽ち浣花村、先生は朱山人。【三】烏角巾　黑色の方形の頭巾。【四】不全貧　不一に未に作る、是なるに似たり。【五】賓客　杜甫。【六】兒童　朱家のこども。【七】堦除　朱家のきざはし、どえん。【八】野航　航はふね。【九】相送　舟をうかべる、その舟で白沙翠竹といふありさまの江ぞひの村の夕ぐれに送られてくるとちやうど柴門のところに月のひかりが新にあらはれでた。

【餘論】右は舊解によつて說けり。然れども余常に疑ふ、此の篇果して作者が朱山人を往訪せる詩なりやと。余はむしろ朱山人が作者の家へ來訪せしを送る詩ならんと考ふるものなり。他人の貧不貧を論ずるも妙なものなり。終りの「相送柴門」は「柴門相送」と同じことにて、もし送られて柴門に到著せしならば「送到柴門」などあるべきところなり、「柴門相送」とせば柴門から送りだす義と解すべきに似たり。

來訪の作とする立場より一解を試むべし。

【字解】【一】錦里先生　作者自己をさす、陶淵明が自ら五柳先生と稱し、白樂天が自ら醉吟先生と稱する類。【五】賓客　朱山人をさす。【六】兒童　杜家の兒童。【七】堦除　杜家の堦除。【九】相送　作者が朱山人を送る。【一〇】柴門　柴門不レ正逐レ江開の柴門。

【詩意】錦里先生ともいふべき自分は黑い方形の頭巾をかぶり隱者のすがたをしてをる。自分ははたけに芋や栗がとれるからまるつきりの貧乏ではない。子どもはお客をみなれてゐるので客をみては喜ぶ、雀などもいつもきざはし近くで物がたべられるからよく人になれてをる。秋の江水がやつと四五尺、そこへ二三人のれる野舟をうかべる、白沙翠竹の江村の夕ぐれにその舟をうかべて客を送らうと

すゐとちやうど柴門のところへ新に月があらはれでた。

過南鄰朱山人水亭

相近竹參差。相過人不知。
幽花敲滿樹。細水曲通池。
歸客村非遠。殘樽席更移。
看君多道氣。從此數追隨。

【題義】この篇は作者が南鄰の朱山人の水邊の亭によぎりしことをしのぶ。舊編は廣德二年作者成都に復歸せしときの作とす。仇氏は類を以て此に置きたるなり。

【詩意】我が家と君の家とは近くあつて生えてをる竹さへたがひちがひになつてをる。そこをとほつて訪問しても知る人もない。君が家にきてみると幽邃な花はいつぱい樹について横に咲いてをり、ほそい水の流れが曲つて池に通じてをる。自分はやがてかへらうとおもふが遠い村へかへるわけではないので、のみのこしの樽を前にまた席をかへてのみなほす。つらつらみるに君は道家の氣象を多くそなへた人だ、自分はこれからたびたび來て君にしたがつてあそぶであらう。

因崔五侍御寄高彭州一絶

崔五侍御に因りて高彭州に寄す一絶

百年已過半。秋至轉飢寒。
爲問彭州牧。何時救急難。

【字解】【一】崔五侍御　侍御史崔某。【二】高彭州　彭州刺史高適。【三】百年一句　この詩上元元年秋の作なるべし、時に作者四十九歳なり、已過半とはいひすぎたる語なり。【四】秋至　秋來れば穀みのりてつがふよかるべき時節なり。【五】爲問　わがために問へ。【六】牧　民をつかざる官をいふ、刺史をさす。【七】急難　さしせまつた飢寒のなんぎ。

【題義】崔侍御にたのみて高適へ衣食の世話をしてくれとたのみやる詩。

【詩意】自分は百年の半分以上（實は然らず）をすぎた。秋がきたにかかはらずいよいよ飢寒にせまつてをる。わたしのために彭州の長官に「いつこのなんぎを救うてくれるか」とたづねていただきたい。

奉簡高三十五使君

當代論才子。如公復幾人。
驊騮開道路。鷹隼出風塵。

過南鄰朱山人水亭　因崔五侍御寄高彭州一絶　奉簡高三十五使君

行色秋將晩。交情老更親。
天涯喜相見。披豁對吾眞。

行色秋將に晩れむとす、交情老いて更に親し。
天涯、相見て、披豁吾が眞に對するを喜ぶ。

【字解】【一】高三十五使君　使君は刺史の敬稱。【二】開道路　すすむべき道路が前面にひらけたるをいふ。【三】鷹隼一句　たとへなり。【四】行色　たびだちの時の樣子。【五】天涯二句　この二句實境にあらず、會後のことを想像していふなり。【六】披豁　胸襟をひらく。【七】對　高適が對するなり。

【題義】高適に寄せた詩。詩によれば適榮任せるに似たり、彭州より蜀州に轉せしをいふか、疑ふらくは作者まさに適を訪はんとせしときの作なるべし。」作時詳ならず。

【詩意】現代に於て才子はと論ずるならば君の如きものは幾人あらうぞ。いま君は榮轉したので驊騮の前に千里の道路が開かれたごとく、鷹や隼が風塵からぬけだした樣なものだ。吾が旅立たんとする今は秋がくれかけてをる。お互の交情は年老いていつそうしたい。今から想像してみてうれしいことは天のはてで而會して、君が胸をひらいてぢがねのままの僕のすがたに對してくれることだ。

和裴迪登新津寺寄王侍郎。【原注】王時牧蜀

裴迪が新津の寺に登りて王侍郎に寄するを和す　【原注】王は時に蜀に牧たり。

何恨倚山木。吟詩秋葉黃。

何の恨か山木に倚りて、詩を秋葉の黃なるに吟ず。

蟬聲集古寺。鳥影度寒塘。

蟬聲、古寺に集まり、鳥影、寒塘を度る。

風物悲遊子。登臨憶侍郎。

風物、遊子を悲ましむ、登臨、侍郎を憶ふ。

老夫貪佛日。隨意宿僧房。

老夫、佛日を貪る、隨意に僧房に宿せむ。

【字解】【一】裴迪　詩人にして王維の親友なり。【二】新津寺　新津は縣名、成都府に屬し、その西南にあり。【三】王侍郎　侍郎の官の王某、其人未レ詳。【四】牧蜀　蜀州の刺史たるをいふ。【五】何恨　何の恨あつてか。【六】遊子　裴迪をさす。【七】侍郎　王侍郎。【八】老夫二句　自己の意をのぶ。【九】佛日　佛德を日にたとふ、金光明經に佛日大悲、滅二一切闇一の語ありと。【一〇】僧房　新津の寺中のへやをいふ。

【題義】裴迪が新津の寺にのぼりて侍郎王某に寄せたる詩の意を和してつくる。王は時に蜀州の長官たり。

【詩意】（此篇の解余自信なし。臆見をのぶ。）あなたは如何なる恨みあつてか山の木に倚つて、秋の葉の黃ばんだところで詩を吟ぜられるのか。またそこでは多くの蟬のこゑがふる寺にあつまり、寒い色をしたつつみのうへを鳥の影がとほる。そんな景色があなたを悲しくさせ、そのうへ高い處へのぼつたにつけて王侍郎のことなどおもひだされた。あなたの恨みはそんなことのためであらう。このおやぢはあなたとはちがひ、佛の日の光をひどく愛してゐるから、意のままに僧房にとまりこんで佛の教でもきくでありませう。

贈蜀僧閭丘師兄

【原注】太常博士均之孫。

蜀僧閭丘師兄に贈る　【原注】太常博士均の孫なり。

大師銅梁秀。籍籍名家孫。
大師は銅梁の秀なり、籍籍たり名家の孫。

嗚呼先博士。炳靈精氣奔。
嗚呼、先博士、炳靈、精氣奔る。

惟昔武皇后。臨軒御乾坤。
惟昔武皇后、軒に臨みて乾坤を御す。

多士盡儒冠。墨客藹雲屯。
多士盡く儒冠、墨客、藹として雲屯す。

當時上紫殿。不獨卿相尊。
當時、紫殿に上るもの、獨り卿相の尊きのみならず。

世傳閭丘筆。峻極逾崑崙。
世に傳ふ閭丘が筆、峻極、崑崙に逾ゆと。

鳳藏丹霄暮。龍去白水渾。
鳳藏れて丹霄暮れ、龍去つて白水渾る。

青熒雪嶺東。碑碣舊製存。
青熒たり雪嶺の東、碑碣、舊製存す。

斯文散都邑。高價越璵璠。
斯文、都邑に散ず、高價、璵璠に越ゆ。

晚看作者意。妙絕與誰論。
晚に看る作者の意、妙絕、誰と論ぜん。

吾祖詩冠古。同年蒙主恩。
吾が祖、詩古に冠たり、同年、主恩を蒙る。

豫章夾日月。歲久空深根。
豫章、日月を夾む、歲久くして空しく深根あり。

小子思疎濶。豈能達詞門。
小子、思疎濶なり、豈に能く詞門に達せむ。

窮秋一揮淚。相遇卽諸昆。
窮秋一たび淚を揮ふ、相遇へば卽ち諸昆なり。

我住錦官城。兄居祇樹園。
我は住す錦官城、兄居、祇樹の園。

地近慰旅愁。往來當丘樊。
地近くして旅愁を慰む、往來、丘樊に當る。

天涯歇滯雨。稉稻臥不翻。
天涯、滯雨歇み、稉稻、臥して翻へらず。

漂然薄遊倦。始與道侶敦。
漂然、薄遊倦む、始めて道侶と敦くす。

景晏步脩廊。而無車馬喧。
景晏れて脩廊に步す、而も車馬の喧しき無し。

夜闌接軟語。落月如金盆。
夜闌にして軟語に接す、落月、金盆の如し。

漠漠世界黑。驅驅爭奪繁。
漠漠、世界黑く、驅驅、爭奪繁し。

惟有摩尼珠。可照濁水源。
惟摩尼の珠有り、濁水の源を照す可し。

【字解】〔一〕蜀僧閭丘師兄　蜀の僧閭丘某なり、師は僧を尊びていふ、兄は年長者としていふ、この僧は閭丘均が孫なり、均は成都の人にして文章を以て稱せられ、景龍中に安樂公主の薦により太常博士に拜せらる、公主誅せらるゝや均も坐せられて循州の司倉に

貶せられて卒す。【一】大師　僧を尊びていふ。【二】銅梁　山の名、涪江の南に在り、土地の名山をあぐ。【四】秀　山川の秀氣をあつめたる人物。【五】籍籍　世人のうはさにのぼるさま。【六】名家孫　閻丘均の孫なるをいふ。【七】先博士　均をさす、先は先世。【八】炳靈　かがやいた神靈。【九】精氣奔　精氣はすぐれた氣、奔とは傳はるをいふならん。【一〇】武皇后　則天武后。【一一】臨軒　軒は殿陛のてすりをいふ、朝廷の玉座にのぞまるるを臨軒といふ。【一二】御　支配すること。【一三】乾坤　天地、世界。【一四】多士　多くの美士。【一五】墨客　文士。【一六】藹　むらがる貌。【一七】雲屯　くものあつまるがごとく多くあつまる。【一八】上紫殿　りつぱなごてんにのぼる。【一九】不獨　それに限らぬをいふ。【二〇】閻丘筆　均が文章、文と筆と對するときは、韻をふむを文といひ、ふまざるを筆といふ。【二一】峻極　たかくけはしきことのきはみ。【二二】崑崙　山の名。【二三】鳳藏、龍去　この二語は均が歿せしをいふ。【二四】丹霄暮　あかきそらも夕暮の如くくらくなる。【二五】白水渾　東京賦に龍飛二白水一の語あり、庾信が齊憲王碑に鳳沈二丹穴一、龍亡二黑陂一の語あり、杜詩の二句は意を取りて黑陂を白水とせしまでなり、丹霄も白水も君の居らるる附近をさしていふ、渾は「にごる」、二句、均歿して朝廷光彩なきをいふ。【二六】青熒　あをくかがやく、碑文の光輝をいふ。【二七】雪嶺東　雪嶺は雪山、松州嘉城縣東にある高山、その東とは蜀の地をさす。【二八】碑碣　碣は天然石のはかじるし、碑は身分ある人に、碣は仕宦せざる者に用ふ、開元中に均は高僧弘忍が塔碑の文を作りしをいふ、又蜀の牛頭山下、瑞聖寺の磨崖碑の文を撰せりといふ。【二九】斯文　均が文章。【三〇】瓌璠　美玉なり。【三一】晚看　作者自己の晚年に於て之を看るをいふ。【三二】作者意　均の文の作家としての意趣。【三三】吾祖　作者の祖父杜審言。【三四】同年　均と同じ年時に於て。【三五】主恩　主は武后。【三六】豫章「くす」の木の類、審言の村の大なるをたとへていふ。【三七】爽日月　爽は「はさむ」、樹の高大なるをいふ。【三八】空深根　根のみは深いが幹枝がしげり大きくならぬをいふ、孫としての自己の振はざるをいふ。【三九】小子　わかもの、作者謙遜していふ。【四〇】思疎濶　詩思綿密ならず。【四一】達詞門　文章のいりくちに達する。【四二】窮秋　あきのすゑ、この僧にであひし時節をいふ。【四三】相過　僧とあふ。【四四】諸昆　昆は後嗣、子孫をいふ、諸昆は蓋し羣從兄弟の關係のごとくなるをいふ。【四五】錦官城　成都の西城。【四六】兄　僧をさす。【四七】祇樹園　須達長者、園を施し、祇陀太子樹を施して佛の說法の處とす、之を祇樹園といふ、略して祇園といひ、また須達の別名給孤獨を取りて給孤獨園といふ、ここは寺のことに用ふ。【四八】嘗丘　樊丘は「をか」、樊は「まがき」、蓋し田野村落の地にあたるをいふ。【四九】天涯　蜀地をさす。【五〇】滯雨　ながあめ。【五一】稉稻　うるしね。【五二】薄遊　しばらくあそぶ。【五三】道侶　道德のとも、僧をさす。【五四】景晏　日のくるること。【五五】脩廊　長い廊下。【五六】雨無車馬喧　陶淵明が句なり。【五七】軟語　しづかなはなし、佛典の語。【五八】落月　曉月をいふ。【五九】漠漠　ひろくつらなる貌。【六〇】驅驅　人人の爭ひ走るさま。【六一】摩尼珠　圓覺經に見ゆ、清淨なる珠、蓋し法性の圓明透徹塵垢に染まざるをたとへていふ。【六二】濁水源　人間界汚濁の源。

【題義】蜀の僧閻丘某に贈れる詩。某は均が孫にして、均は作者の祖父杜審言と同じく武后に仕へし人なり。

【詩意】あなたは銅梁山川の秀氣の集つてうまれた人で、やかましい名家の孫だ。ああ先世の太常博士のかがやいた神靈から精氣が奔りだして傳はつたものだらう。』昔武皇后は玉座のてすりのところにのぞまれて天地を支配された。時に多くの美士があつたがそれは皆儒冠をつけた人人であり、文士は雲のあつまるやうに多くあつた。そのころ紫殿にのぼつたものは卿相などの尊い人人には限らなかつた。世に傳ふる所では閻丘君の「筆」といはば、その高いことは崑崙の山にもこえるほどだといつたものだ。君が沒してからは鳳がかくれて丹きそらが暮れ、龍が去つて白水がにごつた樣に朝廷もにはかに光彩を失つてしまつた。雪嶺の東に於ては君の碑碣の文の舊製がかがやいてのこつてゐる。その文章が都邑に散ずるとその高價なことは瓌璠の美玉にまさるほどだ。自分は晚年にはじめて

作家たる君の意趣を看たが、その妙絶なることは何人と之をかたりあはうか、かたるべき人もない。』

わたしの祖父審言は詩は古人にもまさつてゐたが、君とは同じ年に武后から御恩をうけた。彼の材の巨大さは「くす」の木が日月を夾めるがごとくであつたが、歳月久しくしていたづらに根が深くはつてゐるだけで幹や枝はしげらぬ。』　自分は詩思が綿密でないからどうして文章の入り口にも達することができよう。ただ窮秋にあたつて一たび感動して涙をふるふのは兄弟の様なあなたにであうためにほかならぬ。わたしは錦官城に住んでゐる、あなたは祇園の寺に住んでをられる、ところが近いのでたびの愁をなぐさめることができ、往來するにも路が村落の地方にあたつてをる。この地で長雨もやみ、うるしねは臥したままうごかぬ。自分はただよへる生活をして他郷に遊ぶことにあきてゐるのではじめて道德の友と交りをあつくする様になつた。日がくれて長廊下をあるくがすこしも車馬のやかましいおとは無い。夜たけなはになつてしづかな話しに接してゐるといつしか夜もあけ落ちかかる月は黄金の盆のやうになつてゐる。』　他の世界は漠漠としてまつくらで、俗人はかけずりまはつて名利の爭奪をしげくやつてをる。このとき俗界の濁つた水の源を照すことのできるものは、ただあなたのもつてをられる摩尼の珠があるばかりである。』

泛溪

落景下高堂。進舟泛迴溪。
誰謂築居小。未盡喬木西。
遠郊信荒僻。秋色有餘淒。
練練峰上雪。纖纖雲表霓。』
童戲左右岸。罟弋畢提攜。
翻倒荷芰亂。指揮徑路迷。
得魚已割鱗。採藕不洗泥。
人情逐鮮美。物賤事已睽。』
吾邨靄暝姿。異舍雞亦棲。
蕭條欲何適。出處庶可齊。
衣上見新月。霜中登故畦。
濁醪自初熟。東城多鼓鼙。』

溪に泛ぶ

落景に高堂より下り、舟を進めて迴溪に泛ぶ。
誰か謂ふ築居小なりと、未だ盡さず喬木の西。
遠郊信に荒僻なり、秋色、餘淒有り。
練練たり峰上の雪、纖纖たり雲表の霓。』
童は戲る左右の岸、罟弋畢く提攜す。
翻倒して荷芰亂れ、指揮して徑路迷ふ。
魚を得て已に鱗を割く、藕を採つて泥を洗はず。
人情、鮮美を逐ふ、物賤しければ事已に睽く。』
吾が邨、暝姿靄たり、異舍、雞亦棲む。
蕭條何くに適かむと欲する、出處庶はくは齊しくすべし。
衣上、新月を見る、霜中、故畦登る。
濁醪、自ら初めて熟す、東城に鼓鼙多し。』

【字解】【一】溪　浣花溪。【二】落景　日影の落ちかかるとき。【三】進舟　進は行進せしむること。【四】迴溪　まがつてゐるたに川。【五】未盡　覽つくさざるをいふ。【六】喬木　宅邊のそれをさす。【七】練練　しろきさま。【八】峰　雪山をさす。【九】罟弋　うをとりあみ、鳥とりの射くるみ。【一〇】畢　ことごとく、こどもがみな。【一一】指揮　こどものうちのだれかがさしづする。【一二】藕　はすね。【一三】逐鮮美　あたらしくうつくしきもののあとをおひかけまはす。【一四】物賤　鱗をさき、泥を洗はざれば魚も藕も賤しくなる。【一五】事已睽　こどもらはそれを賣るつもりなり、物賤しくなれば賣れず、これその事已に情理にそむくなり。【一六】靄　ぼんやりする。【一七】暝色　ひぐれのすがた。【一八】異舍　他人のいへ。【一九】出處　出づると處るると。【二〇】齊　同じ樣にみる、これ處（隱退）してゐても出（仕官）てゐるとおなじこころでゐるをいふ。【二一】霜中　しもふりしなかに。【二二】登　耕作物のみのること。【二三】故畦　ふるきあぜ。【二四】濁醪　にごりさけ。【二五】初熟　新しくできる。【二六】東城　成都の城は浣花の居の東にあり、故に東城といふ。

【題義】浣花溪に舟をうかべしことを記す。卜居後はじめて上流に棹させしなり。

【詩意】夕日のかたむくころざしきからおりて舟をすすませて、まがつてゐる溪川にうかんでみる。自分のすまひは小さいとだれがいふのか、喬木のある西の方面はまだみきはめぬのではないか。ここの野外はほんたうに草ふかくかたよつてゐて秋景色は十分のつめたさをもつてをる。雪山の雪はまつしろく、またほそぼそと雲のうへの霓があらはれてゐる。『溪川の左右の岸には子供らがたはむれてゐる、彼等はみんなうをとりあみ、鳥とりの射くるみをたづさへてゐる。彼等にひつくりかへされて荷や芰はみだれ、餓鬼大將がさしづはするものののみちをまようたりする。魚を得ればその鱗を割きとつたり、蓮根をとつては泥もあらはぬ。人のこころはうつくしいものを逐ふものだ、しかるにこどもらはかく物のねうちをさげてしまつてはあてにしてゐることがはづれてしまふのである。』自分の村も夕ぐれの姿がぼんやりしてきた。他人のいへでも雞がはやねぐらにすんだ。自分はさびしくもどこへゆかうとおもふのか、ひつこんでゐるのも出てつかへるのもおなじことにみらるるではないか。きもののうへに新月の光がさす、霜のなかではたけのうねの作物がみのつてゐる。にごりさけもひとりでにできた。遺憾なのは東城に太鼓やこつづみの音の多くて騷亂のやまぬことだ。

出郭

霜露晩凄凄。高天逐望低。
遠煙鹽井上。斜景雪峰西。
故國猶兵馬。他鄉亦鼓鼙。
江城今夜客。還與舊鳥啼。

郭を出づ

霜露、晩に凄凄たり、高天、望を逐うて低る。
遠煙は鹽井の上、斜景は雪峰の西。
故國猶兵馬、他鄉亦鼓鼙。
江城、今夜の客、還舊鳥と啼く。

【字解】【一】凄凄　つめたし。【二】逐望低　ながむるままにひくくさがるがごとし、露おりてながめをくらくするなり。【三】遠煙　遠方の煙、煙はしほをたくけむり。【四】斜景　ななめにさす日光。【五】雪峰　雪山なり。【六】故國　洛陽。【七】江城　成都、錦江にそひたる城。【八】客　自己をさす。【九】與舊鳥啼　の意、與舊鳥啼と訓す、人には號、泣、などいひ啼とはいはざるも作者は啼の字を用ふ。

【題義】成都の城中より郭をでてゆふべに草堂の方へかへりしことをのぶ。

【詩意】夕方霜や露がつめたく置く、あたりをながめると、ながめにつれて天がたれさがる様にくらくなる。遠方にみゆる煙、それは鹽井の上にたちのぼるけむりである。雪峰の西にはいり日のひかりが斜めにさしてゐる。故國洛陽の方にはまだ兵馬がさわいでゐるし、他郷たるここにもまた太鼓、つづみのおとがやまぬ。今夜この江城の旅人（自分）はただやつぱりまへまへからの烏とともに啼くより外にしかたがない。

恨別

洛城一別四千里。
胡騎長驅五六年。
草木變衰行劍外。
兵戈阻絶老江邊。
思家步月清宵立。
憶弟看雲白日眠。

別を恨む

洛城一別、四千里、
胡騎長驅す五六年。
草木變衰して劍外に行き、
兵戈阻絶して江邊に老ゆ。
家を思ひ月に歩して清宵に立ち、
弟を憶ひ雲を看て白日に眠る。

【字解】【一】洛城　洛陽の城。【二】胡騎　安祿山の騎兵。【三】五六年　天寶末安祿山の亂起りしより上元元年までにて五六年なり。【四】草木變衰　宋玉が「九辯」の語、變衰とは色かはりおとろへること、秋の時節をいふ。【五】劍外　劍門の外、蜀をさす。【六】阻絶　中間の道路をへだてちること。【七】江邊　錦江のほとり。【八】思家・憶弟　家と弟とは洛陽及其東方に在り。【九】河陽近乘勝　上元元年三月に李光弼、賊安太清を懷州城下に破り、夏四月又史思明を河陽の西渚に破る。【一〇】司徒　李光弼をいふ、至德二載李光弼は檢校司徒となる。【一一】幽燕　幽州と燕、ともに直隸の北部にして賊軍の根據地なり。

聞道河陽近乘勝。
司徒急爲破幽燕。

聞道らく河陽近勝に乘ずと、
司徒急に爲に幽燕を破れ。

【題義】故郷の家族との別れ久しきを恨みてつくれり。

【詩意】洛陽の城と別れてから四千里の遠くにある。賊軍がとほく驅けて攻めよせてから五六年になる。自分は草木の色かはり衰ふる秋にあたつて劍門のそとなる蜀にさまよひ、いくさごとにじやまされて錦江のほとりにくらしてゐる。家を思うては月下に歩してはれたよるに立ち、弟をおもうては雲をみながらまひるなか眠つたりする。きくところによると河陽の地方では官軍がちかごろ勝ちかけたさうであるが、どうか司徒（李光弼）は我がために急に進んで幽燕の地方をうち破つてもらひたい。

散愁二首

久客宜旋旆。興王未息戈。
蜀星陰見少。江雨夜聞多。

愁を散ず　二首

久客宜しく旆を旋すべし、興王未だ戈を息めず。
蜀星陰りて見ゆること少く、江雨夜聞くこと多し。

百萬傳深入。寰區望匪他。百萬深く入るを傳ふ、寰區望むこと他に匪ず。
司徒下燕趙。收取舊山河。司徒、燕趙を下して、收取せよ舊山河。

【字解】【一】散愁　うれひのこころをちらす。【二】久客　ながくなつたたびびと、自己をさす。【三】旋旆　はたをかへす、故郷へもどること。【四】興王　中興の君、肅宗をさす。【五】息戈　「ほこ」を休息させる、いくさをやめること。【六】百萬　多くの官軍。【七】深入　賊境へふかくはひりこむ。【八】寰區　天下　【九】望匪他　望むことはほかのことでない、卽ち次の司徒二句はその說明なり。【一〇】司徒　李光弼。【一一】燕趙　ともに直隸の北部、賊の據る所。【一二】舊山河　もと唐の朝廷に屬せし山河。

【題義】官軍の勢　よきにより氣ばらしのためにつくりし詩なり。

【詩意】自分といふ長長のたびびとははやく故郷へはたをかへすのがよいのだが、中興の君におかせられてまだいくさをやめさせることができずにおいでになる。蜀の星は陰つてよくみえることはすくないし、江の雨は夜に聞くことが多い。傳ふる所によれば多くの官軍は敵境へふかくいりこんださうだが、天下の望む所はほかのことではない、ただ司徒李光弼が燕趙の地を下して朝廷の舊山河を取つてしまふことそのことだ。

〔二〕

聞道幷州鎭。尙書訓士齊。聞道らく幷州の鎭、尙書、士を訓すること齊しと。
幾時通薊北。當日報關西。幾時か薊北に通じて、當日、關西に報せむ。

【字解】【一】幷州鎭　山西省太原府をいふ、ここはもと李光弼の鎭所なりしが光弼は河陽の方へやられてあとは王思禮之に代れり。【二】尙書　王思禮をさす、乾元二年七月兵部尙書・路泌節度使・霍國公・王思禮を以て太原尹を兼ねしめ北京留守に充つ、（北京は太原をいふ）。【三】齊　ひとし、ととのふこと。【四】薊北　薊は薊州、燕の地。【五】當日　その日、薊北に通ずる日をさす。【六】關西　函谷關の西、關西・關中は長安をさす。

【詩意】きけば幷州の鎭所では王尙書は士卒を訓練せらるることがよくととのうてゐるとのこと。いつになつたら賊の根據地薊州の北の方まで道路が通ずることができて、その日之を長安の都へ報知することになれるだらうか。自分は都の御所をこふるために丹き心もうちこはれ、涙は衣をうるほして白髮あたまながらになきつつある。この老の魂は招かうとしても招けず、故郷のかへり路に永久にまようてゐるであらう。（これ早く薊北に通せんことを待つ所以なり）。

戀闕丹心破。霑衣皓首啼。闕を戀ひて丹心破れ、衣を霑ほして皓首啼く。
老魂招不得。歸路恐長迷。老魂招き得ず、歸路恐らくは長く迷はむ。

建都十二韻　都を建つ十二韻

蒼生未蘇息。胡馬半乾坤。蒼生未だ蘇息せず、胡馬、乾坤に半なり。
議在雲臺上。誰扶黃屋尊。議は雲臺の上に在り、誰か黃屋の尊を扶けむ。

建都分(七)魏闕。下詔闢(八)荆門。
恐失(九)東人望。其如(一〇)西極存。
時危當(一一)雪恥。計大豈輕論。
雖倚(一四)三堦正。終愁萬國翻(一五)。
牽(一六)裾恨不死(一七)。漏(一八)網辱殊(一九)恩。
永負漢庭哭。遙憐(二一)湘水魂。
窮冬客(二二)江劍。隨事有(二四)田園。
風斷(二五)青蒲節。霜埋翠竹根。
衣冠(二六)空穰穰(二七)。關(二八)輔久昏(二九)昏。
願枉(三〇)長安日。光輝照(三一)北原。

都を建てて魏闕を分つ、詔を下して荆門を闢く。
東人の望を失はむことを恐るるも、其れ西極の存するを如せむ。
時危くして當に恥を雪ぐべし、計大なり豈輕しく論せむや。
三堦の正きに倚ると雖も、終に愁ふ萬國の翻らむことを。
裾を牽く恨らくは死せざりしを、網より漏らす殊恩を辱なうす。
永く負く漢庭の哭、遙に憐む湘水の魂。
窮冬、江劍に客たり、隨事、田園有り。
風は斷つ青蒲の節、霜は埋む翠竹の根。
衣冠空しく穰穰たり、關輔久しく昏昏たり。
願はくは長安の日を枉げて、光輝、北原を照らさむ。

【字解】【一】建都　新に都を建設するをいふ、史によるに至德二載に蜀郡を南京とし、鳳翔を西京とし、西京(長安)を中京とす。上元元年九月改めて南都を荆州に置き荆州を以て江陵府となす。二年九月鳳翔の西都及び江陵の南都の號を罷め、寶應元年に復た建つ。此詩は上元元年荆州を南都とするときの作なり。荆州を南都と建つることは時の荆州刺史呂諲なるものの建議に本く。作者は之に反對の意見をのべたるなり。【二】蒼生　人民。【三】蘇息　よみがへり、休息する。【四】胡馬　賊軍の兵馬。【五】雲臺　後漢の時たてたる宮中の高臺、ここは朝廷をさす。【六】黄屋尊　天子の尊きをいふ、黄屋は天子の乘らるる車蓋のうち黄絹にて張るを以て之に乘る天子をもさす。【七】分魏闕　分とは分設すること、魏闕は高き宮門、荆州を都とするは中央の宮闕を分つと似たり。【八】闢荆門　闢とは新天地をはじめひらくをいふ、荆門は山の名、荆州にあり、名山を借りてその地を示す。【九】失東人望　東人とは荆州の人をいふ、これは荆州を都とせぬときの場合にはかくの如しといふことなり。【一〇】如　如レ之何と同じ。【一一】西極　成都をさすといひ、長安をさすといひ說區區たり、余は鳳翔をさすならんと考ふ、これ鳳翔は西京とせられ、のちに上元二年には荆州の南都とともに罷められ二者對するによりかく考ふるなり、作者は長安のことは「北極」といふを例とす。【一二】雪恥　はぢをそそぎきよめる、賊軍にうちまけたるはぢなり。【一三】計大　都を建つることは大計なり。【一四】倚三堦正　三堦は泰堦なり、天に泰堦といふ星座ありて上中下の三堦より成る、三堦平等なれば天下太平なりといふ、正は平正にてその位正しきをいふ、「三堦の正に倚る」は蓋し肅宗の政治をとりなしてほめていふ、太平のおかげによるとはいふものの意ならん。【一五】翻　みだるるをいふ。【一六】牽裾　作者拾遺の官として天子の裾をひきて强諫するをいふ、房琯がことにつき諫めしをさす、魏の辛毗といふもの文帝を强諫し、帝起ちて內に入らんとせしときその裾を引きたる故事あり。【一七】死　諫めて死するなり。【一八】漏網　罪をゆるさるること、「漢書」刑法志に網漏二呑舟之魚一の語あり。【一九】殊恩　特別のごおん。【二〇】漢庭哭　漢の賈誼國事をうれへて痛哭す。【二一】湘水魂　楚の屈原懷王をいさめ、湘水のほとりに流され、襄王のとき汨羅の淵に身を投じて死せり、賈・屈・を以て自ら比す。【二二】江劍　江は錦江、劍は劍閣、蜀をさす。【二三】隨事　隨便のごとし。【二四】田園　浣花溪草堂の居をさす。【二五】風斷二句　節物をいひかれてたとへたる寓す。【二六】衣冠　朝廷の官員をいふ。【二七】穰穰　多き貌。【二八】關輔　關中の三輔、輔は都のたすけとなる地、今日いふ大都會の郡部の類、長安の三輔は扶風・馮翊・京兆これなり。【二九】昏昏　日色くらし、賢智者なきをいふ。【三〇】長安日　長安をてらす太陽。【三一】北原　河北の地、卽ち賊史思明の據れる地方をさすといへり。

【題義】荆州に南都を建つることに就き反對意見をのべたる詩。詳は「字解」の條をみよ、上元元年九月以後の作。

【詩意】賊の兵馬は天下の半分にもひろがつて、人民は安息を得ない。このとき雲臺のうへで建都の議論がなされるが、そもそも何人が天子の尊厳をおたすけいたすのであるか。』きけば詔を下して荆門の地方をひらいて、都を建てて宮門の分所を置かれるとのことである。もしそれをやめるならば東方荆州の人人の失望は氣の毒なこととはおもふけれども、すでに西京（鳳翔）といふものがあるのをどうするか、そんなにいくつもいくつも都を置くには及ぶまい。いまは時世危險な際である、ただこれまでの恥をそそぐべきであつて、都をあらたに設けるなどの大なる計は容易に論ずべきではないからう。もしそんなことをすればそれは御政道の正しきによるとはいへ、天下萬國がひつくりかへりはせぬかと心配するのである。』自分はさきに房琯が事についてお諫めしたとき辛毗のごとくお裾をひつぱつてむりにお諫めして死ねばよかつたのであるが、僥倖に刑罰の網からゆるされて特別のご恩にあづかつた。賈誼が漢廷に哭した樣にならぬのは申譯がないが、屈原の樣に湘水の魂と化するは氣のどくなことである。いま冬がれの時節にこの蜀の地に客となり、ともかくも田園までもつてゐる、その田園では青い蒲の節は風に吹きちぎられ、翠の竹の根は霜に埋められてゐて、甚だみるかげもない。』自分のみるところでは長安の官員どもはただやたらに多いばかり、都の附近の地は昏昏として日の光もささぬかの樣である。どうぞ長安をてらす日の光をむりにも向けかへて、河北の地方を照らすやうにしてもらひたいものである。南方に都を新設するなどは急務ではない。

村夜

風色蕭蕭暮。江頭人不行。
村春雨外急。隣火夜深明。
胡羯何多難。樵漁寄此生。
中原有兄弟。萬里正含情。

【字解】【一】村夜　江村の夜。【二】江頭　錦江のほとり。【三】村春　むらびとの米つきのおと、水車を用ひてつくなり。【四】隣火　となりの家の火。【五】胡羯　安祿山・史思明が黨。【六】中原　洛陽地方。【七】含情　じつとおもひをむねのうちにもつ。

【題義】江村の夜のさまと兄弟を思ふ情とをのぶ。

【詩意】あたりの樣子がさびしくひがくれた。かはのほとりにとほる人もない。雨のふるなかとほくに水車の音がきこえ、夜もふけたのにとなりの家ではあかりがまだついてゐる。なんで賊軍らは難儀を多くおこすか、自分はしばかりや、れふしのあひだに生涯をよせてゐる。みやこの方には兄弟どもがゐる。それについて遠くのことをかんがへじつとふさぎこんでゐる。

寄楊五桂州譚

【原注】因州參軍段子之任。

楊五桂州譚に寄す　【原注】州の參軍段子が任に之くに因る。

五嶺皆炎熱。宜人獨桂林。　五嶺は皆炎熱なり、人に宜しきは獨り桂林のみ。
梅花萬里外。雪片一冬深。　梅花、萬里の外、雪片、一冬深し。
聞此寛相憶。爲邦復好音。　此を聞いて相憶を寛にす、邦を爲むる復好音。
江邊送孫楚。遠附白頭吟。　江邊、孫楚を送る、遠く附す白頭吟。

【字解】【一】楊五桂州譚　桂州の刺史楊譚。【二】參軍段子　楊譚が部下の官たる段某、段は成都より桂州へ赴任するなり。【三】五嶺　廣東・廣西の北にある五つの嶺、始安・越城・臨賀・大庾・腊嶺、是なり。【四】桂林　卽桂州、今の廣西省桂林府。【五】梅花　大庾嶺最も梅を以て名あり、桂林に關しては少しく遠すぎるも之を用ふ。【六】雪片　嶺南には雪なし、ただ桂林には之ありと、冬雪あれば夏になりても他所より涼しき地なること知るべし。【七】此　梅あり、雪ありとのことをさす。【八】寛相憶　おもふこころをくつろがす。【九】爲邦　桂州を治むること、其地の長官たることをさす。【一〇】好音　よきたより、蓋し楊より書信ありしをさす。【一一】江邊　錦江のほとり。【一二】送孫楚　孫楚は晉の石苞が參軍なり、今楊を石苞とみなし、段子を孫楚にあてていへり。【一三】附　托すること。【一四】白頭吟　此の詩篇をさす。

【題義】桂州の刺史楊譚のところへ、その參軍たる段某が赴任するにつけて寄せたる詩。

【詩意】五嶺地方はどこも炎熱で、人體によろしいのは桂林ばかりである、そこは萬里の遠くに在つて梅の花あり、冬ぢう雪も深いといふことである。この話をきいて自分もいくらかあなたを憶ふこころをくつろげ得たのであるし、そんな場所で長官になつてゐるといふことはまことにいいおたよりをきくことである。ここでそちらへ參軍がゆかれるのを送るによつて、この拙吟を依托してやる次第である。

西郊

時出碧雞坊。西郊向草堂。　時に碧雞坊を出で、西郊より草堂に向ふ。
市橋官柳細。江路野梅香。　市橋、官柳細に、江路、野梅香し。
傍架齊書帙。看題檢藥囊。　架に傍ひて書帙を齊へ、題を看て藥囊を檢す。
無人覺來往。疎懶意何長。　人の來往を覺る無し、疎懶、意何ぞ長き。

【字解】【一】西郊　成都の城西の野外。【二】碧雞坊　成都城の西南の坊の名。【三】市橋　城の西南四里にありといふ。【四】官柳細　官でうゑた柳の條ほそし。【五】傍架　架は「本だな」。【六】帙　書衣なり。【七】題　標題。【八】檢　しらべる。【九】無人覺來往　人の己の來往を知らざるをいふ。（仇氏は此解を曲說として「人跡の來往を見ざるを謂ふ」ときたるがそれこそ曲說なるべし。）往とは草堂より城中へでかけしをいふ、來とは今城中より草堂へもどり來るをいふ、此詩は歸來を主としてのべたり。

【題義】城中を出で西郊より草堂にもどり來れることをのぶ。上元元年冬の作ならんといふ。

【詩意】自分は時として碧雞坊から出て西郊を經て草堂へと向ふ、途すがら市橋では柳がほそぼそと垂れてをり、かはぞひの路には野梅の花がにほうてゐる。草堂につけば書架のそばへよりそうて帙を

ととのへたり、標題を看ながら藥囊をしらべたりする。往きもかへりもだれもそれに氣がつかぬ。こんな生活はぶしやうな氣もちがのんびりとしてまことによろしい。

和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄

東閣官梅動詩興。
還如何遜在揚州。
此時對雪遙相憶。
送客逢春可自由。
幸不折來傷歲暮。
若爲看去亂鄉愁。
江邊一樹垂垂發。
朝夕催人自白頭。

【字解】【一】裴迪　前にみゆ。【二】蜀州　成都府崇寧州の地、成都の西百里にあり。【三】東閣　東亭をさす。【四】官梅　官のうゑしうめ。【五】動詩興　迪がうごかすなり。【六】何遜在揚州　梁の何遜天監六年揚州の刺史建安王偉が記室として之に從つて揚州にあり、早梅詩を作る、中に枝橫卻月觀、花逸凌風臺の句あり。【七】對雪遙相憶　迪がこちらを憶ふをいふ。【八】送客逢春　迪をいふ。【九】可自由　迪を評するなり、心の自由を得たるならんといふなり。【一〇】折來　梅を折りてこちらへ贈つてくれるをいふ。【一一】傷　こちらが心をいためる。【一二】若爲　いかでか。【一三】看去　折來の梅花をみるをいふ。【一四】亂鄉愁　みれば思鄉の愁心をみだる。【一五】江邊　錦江のほとり。【一六】垂垂　枝がしだれて咲くさま。【一七】發　梅花のひらくをいふ。【一八】催人白頭　梅花をみればまた一年をすごすかと感ず、これ花、人の老をうながすに似たり。

【題義】裴迪が蜀州の東亭にのぼつて人を送り、そのとき早咲きの梅花をみたので、自分を憶うて詩をよこしてくれた。その詩に和して作つた詩。上元元年冬の作。

【詩意】あなたは東閣の官梅をみて詩興をうごかした。ちやうどむかし何遜が揚州に居たときのことによく似てゐる。そのときあなたは雪に對して自分のことをおもうてくれたが、旅立つ人を送りながら春げしきにであうたなんぞはさだめし心もくつろいだこととおもはれる。自分はそれとちがひしあはせとあなたがその梅の枝を折つてよこしてくれぬので歲暮を傷まずにすんだのである、よこされたら最後どうしてそんな花を看て思鄉の愁心をみだすことができよう。ここのかはべりにも一本梅があつてしだれてさいてゐるが、それをみるとあさゆふわたしをうながして白があたまにさせるのではないかとおもはるるのである。

暮登四安寺鐘樓寄裴十迪

暮倚高樓對雪峰。

暮に四安寺の鐘樓に登り裴十迪に寄す

暮に高樓に倚りて雪峰に對す、

【字解】【一】四安寺　新津縣南

(四)僧來不レ語自鳴レ鐘。
(五)孤城返照紅將レ斂。
近市浮煙翠且重。
多病獨愁常(六)闃寂。
(七)故人相見未二從容一。
知君苦思緣レ詩瘦。
太向二(九)交游一萬事慵。

僧來つて語らず自ら鐘を鳴らす。
孤城の返照、紅將に斂まらむとす、
近市の浮煙、翠且重なる。
多病獨愁常に闃寂、
故人相見るも未だ從容たらず。
知る君が苦思、詩に緣りて瘦せたるを、
太く交游に向つて萬事慵し。

【題義】夕ぐれに四守寺の鐘つきだうにのぼつて裴迪に寄せた詩。作者上元二年には時時蜀州に往來せりといふ、此詩は新津にての作。

【詩意】自分は夕ぐれに高樓に倚つて雪峰に對してゐると、寺の僧が來てものもいはずひとりで鐘をつきならす。城の夕ばえの紅の色はなくなりかけてゐるし、近い市場の煙は翠いろさへ重なつてをる。自分は多病であり、ひとり愁へていつもさびしがつてゐる、あなたとは面會はしてもまだゆつくりとはなしあはないのだ。あなたは苦しんでかんがへるあまり詩のために瘦せてはゐるが、あんまり友だちなかまに向つて萬事ぶしやうをしてゐるやうだ。（ちとあそびにおいでなさらぬか、の意。）

二里にある寺の名、新津縣は今成都府に屬す、唐の時は蜀州に屬せり。【二】鐘樓　かねつきだう。【三】雪峰　新津縣東南五里修覺山のうへの山なりといふ、余おもふに雪山をいふに非るか。【四】僧來一句　僧の無頓著なるさまをみるべし。【五】孤城　新津縣城をいふ。【六】闃寂　さびし。【七】故人　迪をさす。【八】從容　ゆつたり、おちつきゆつくりはなしすること。【九】交游　

寄贈二王十將軍承俊一

將軍膽氣雄。臂懸兩角弓。
(一)纏結青(二)驄馬。出入錦(四)城中。
時危未レ授(五)鉞。勢屈難レ爲功。
(六)賓客滿二堂上一。何人(七)高義同。

王十將軍承俊に寄贈す

將軍、膽氣雄なり、臂に懸く兩角弓。
纏結す青驄馬、出入す錦城の中。
時危くして未だ鉞を授けられず、勢屈して功を爲し難し。
賓客、堂上に滿つ、何人か高義同じき。

【字解】【一】角弓　角にてかざりしゆみ。【二】纏結　馬の裝飾物をまとひ、むすぶ。【三】驄馬　青白馬。【四】錦城　成都の城。【五】授鉞　賊を征伐する權能を與へられる、鉞は「まさかり」。【六】賓客　將軍のお客分の人人。【七】何人高義同　高義は將軍の友義の高きこと、作者に對し禮を厚くしてもてなしくれることをさす、何人同とは自分と同じほどに將軍の高義を受くるものは殆ど他にはあるまいといふなり、將軍の厚誼を感謝する語なり。

【題義】將軍王承俊によせおくつた詩。將軍は成都に在り、作者は何の地にありしときのことか詳ならず、或は浣花村より城中へおくりしか。仇氏は青城に在りしときの作なりといへるも其の證なし。

【詩意】王將軍はきもだま氣象が雄雄しくて臂には二つの角弓をぶらさげ、青馬を飾つてそれにまたがつて錦城の中に出入りしてをる。いま時世は危險なときであるのに將軍はまだ鉞を天子から授けられて征伐の權を委ねられず、勢のびずして功をたてることはむつかしい。（惜しいことだ。）將軍の堂上には賓客はいつぱいあるが、だれが自分と同じほど將軍の高義をうけるものがあらうか。（自分には特別に厚くしてくださる、ありがたいことだの意。）

奉酬李都督表丈早春作　李都督表丈が早春の作に酬い奉る

(一)力疾坐清曉。(二)來詩悲早春。
轉添愁伴客。(三)更覺老隨人。
紅入桃花嫩。(四)青歸柳葉新。
望鄉應未已。(五)四海尙風塵。

【字解】〔一〕李都督　其人未だ詳ならず。〔二〕表丈　いとこの關係ある人にて且年長者とみえたり。〔三〕力疾　病みながらむりに起きあがること。〔四〕來詩　李からよこした詩、卽ち早春の作。〔五〕客、人　ならびに自己をさす。〔六〕嫩　やはらか、みづみづし。〔七〕歸　ひとへにその方へと赴くをいふ、早春なれば青色は他の樹葉よりも先づ柳葉の方へゆくといふなり。〔八〕應未已　舊解に單に自己の望鄉の念がやまぬといふ樣にいへるは恐らくは未だ其意を得ず、此語は李の意をおしはかりて暗に自己もこれに贊同せしのみ、應の字は推測の辭なり。

【題義】年長のいとこ李都督が早春の詩をみせてくれた、それにこたへた作。

【詩意】自分は病氣なのにむりに起きてはれたあさにすわつてゐた。そこへあなたの詩が來たがそれをみると早春のさまをみて悲んでをられる。このお作はいよいよ愁をまして自分に伴はしめ、これまでよりもつと老がわが身にくつついてきたことを感じさせるのである。なるほど紅の色は桃の花に入りてみづみづしく、青色は先づ柳の葉の方へかたむいて新しくみえてはきたが、故鄉をながめおもはるる念はおやみにはならぬことであらう、なぜならば天下はまだ兵馬の塵だらけであるから。（自分も御同樣である、との意。）

題新津北橋樓　新津の北の橋樓に題す

(一)望極春城上。開筵近(二)鳥巢。
白花簷外朶。青柳檻前梢。
池水觀(三)爲政。廚煙覺(四)遠庖。
西川供(五)客眼。惟有此(六)江郊。

望は極まる春城の上、筵を開いて鳥巢に近し。
白花、簷外の朶、青柳、檻前の梢。
池水に爲政を觀、廚煙に遠庖を覺ゆ。
西川、客眼に供するは、惟此の江郊有り。

【字解】【一】新津　縣の名、今成都府に屬す、唐には蜀州に屬せり、成都の西南にあり。【二】橋樓　橋のほとりの樓。【三】望極　はてしなく遠くをのぞむ。【四】近鳥巢　場所が樹木の上にありて高きをいふ。【五】觀爲政　この時は縣令が酒宴をひらきしなり、因つて政治のことをいふ、爲政は政治の仕方をいふ、觀はその清きをみるをいふ。【六】廚煙　くりやのけむり。【七】遠庖「禮記」（玉藻）に君子遠二庖廚一の語あり、臺所は殺生を爲す故に君子は之をとほくにおく。【八】西川　蜀の西部をいふ。【九】客眼　旅客のまなこ、自己の眺望をいふ。【一〇】江郊　かはぞひの野はら。

【題義】新津縣の北の橋のほとりの樓にて縣令の酒宴にあづかりて作れる詩。

【詩意】高い樹木の鳥の巣に近いところで筵を開いて、春の城の上で際限なき遠望をはせる。のきのそとの枝には白い花がついてをり、てすりの前の柳は梢が青くみえる。池の水は清らかであつて、之によつて縣の政治も濁らぬことがみられる、臺所の煙がのぼるが、これも經典の本文どほりまぢかにはない。蜀の西部で旅客の眼に供して佳なるところは、ただここの江郊だけだ。

遊修覺寺

野寺江天豁。山扉花竹幽。
詩應有神助。吾得及春遊。
徑石相縈帶。川雲自去留。

修覺寺に遊ぶ。

野寺、江天豁なり、山扉、花竹幽なり。
詩應に神助有るなるべし、吾春遊に及ぶことを得たり。
徑石相縈帶す、川雲自ら去留す。

【字解】【一】修覺寺　新津縣治の東南五里に修覺山あり、山に修覺寺あり。【二】詩應二句　連絡してみるべし、前句自ら誇るにあらず、風景のすぐれしをいふなり。【三】神助　鬼神のたすけ。【四】及春遊　「及」とはおひつく、まにあふ。【五】縈帶　帶のごとくめぐる、紆曲したみちに處處に點點とあるをいふ。【六】禪枝　寺の樹木の枝。【七】漂轉　漂泊流轉の生涯。

【題義】新津縣の修覺寺にあそびて作れる詩。上元二年の春の作。

【詩意】この野外の寺のところは江のうへをおほふ天がひろらかである。近づくとその扉には花や竹が幽邃に生じてゐる。自分はしばはせと春の遊びにまにあふことができたのであるから、ここで詩を作れば鬼神の助を得らるることであらう。近くにはうねつたこみちに石が處處に點在し、遠くでは川上の雲がひとりでにゆききしてゐる。こんなけしきをながめるうちもはやお寺の樹の枝に多くの鳥がとまる時刻になつた。流轉生涯の自分は暮れがたに歸らうとすればうれひのこころが生ずる。

禪枝宿二衆鳥一。漂轉暮歸愁。

禪枝、衆鳥宿す、漂轉、暮歸愁ふ。

後遊

寺憶曾遊處。橋憐再渡時。
江山如有待。花柳更無私。
野潤煙光薄。沙暄日色遲。

後遊

寺は憶ふ曾遊の處、橋は憐む再渡の時。
江山、待つ有るが如し、花柳更に私無し。
野潤ひて煙光薄く、沙暄にして日色遲し。

客愁全爲減。捨此復何之。　客愁全く爲に減ず、此を捨きて復何くにか之かむ。

【字解】〔一〕後遊　のちのあそび。前詩修覺寺の遊びを敍す、此詩は後の再遊を敍す。〔二〕有待　吾を待つをいふ。〔三〕無私利己心なし、だれにでも其の美しさをかつてにみせてやる。〔四〕野潤　潤は水蒸氣をふくむをいふ。〔五〕煙光薄　謂はゆる「はるぐもり」にて氣象がぼやけてみゆるなり。〔六〕沙暄　これは熱の方からいふ、日光きつく照らす故に江邊の沙あたたかなり。〔七〕日色遲　日の永きをいふ、「遲」とは太陽の行くことがおそく感ぜらるるをいふ。

【題義】修覺寺に二度めにあそべる詩。

【詩意】またあそびにきた。寺をみればなるほどまへにあそんだ場所だなとおもひ、橋を渡ればまたいまわたるのかと愛憐の情がおこる。江や山をみると自分がくるのを待つてゐてくれた樣であり、花も柳も私心をもたずにきままに自分に其の美を賞玩させてくれる。野はらはうるほひをおびて煙の光薄く、川べりの沙はあたたかにして日脚もおそくあるくげなり。これをながめたためにたびのうれひは全く減ぜられた。こんないいけしきのところをおいてはまたどこにゆかうか、ゆけるものではない。

絕句漫興九首

眼見客愁愁不醒。　眼に見る客愁愁へて醒めざるを、

【字解】〔一〕絕句　詩體の名、

無賴春色到江亭。　無賴の春色、江亭に到る。

卽遣花開深造次。　卽ち花をして開かしむるも深く造次なり、

便教鶯語太丁寧。　便ち鶯をして語らしむるも太だ丁寧なり。

古體詩の四句一解をきりとりたる形なるより名づく、押韻・平仄に一定の規則あり、但杜の絕句は往往聲律を守らざるものあり。〔二〕漫興　率然興に乘じて作れるが故にかくいへり。〔三〕眼見　眼前に見ること

明明白白なるをいふ、「見」の字の主辭は次句の「春色」ならん、これは第三首の熟知の「知」の字の主辭が次句の「燕子」なるとおなじのべかたなるべし。〔四〕愁不醒　愁ひのうちにひたりて醉へるがごとし。〔五〕無賴春色　無賴は無聊賴ことにてあてにならぬ義、無賴漢といへばあてにならぬ男、卽ち「ごろつき」なり、春景色を無賴といふは之を罵る辭なり、「ろくでなしの」といはんがごとし。春を罵るは眞に之をきらふに非ず、自己が愁の中に在るに春がそれを知らぬかほにやつてくるが心にくしといふなり、讀者よろしく作者內面の切情をくみとるべし、他の諸篇にても往往春色に惱まさるるの意をのべたり。〔六〕江亭　錦江のほとりの草堂の亭。〔七〕遣、教　並に「して、せしむる」。二動詞の主辭は略されたる「春」なり。〔八〕造次　急遽の貌、だしぬけ。〔九〕太　はなはだ、あんまりに。〔一〇〕丁寧　ていねい、くどし。

【題義】興にふれてふとつくりたる絕句。上元二年春浣花の草堂にての作。

【詩意】ろくでなしの春景色は自分がたびの愁にひたつて醉うてゐるのを眼前に見て知りながら吾が江亭へやつて來た。彼春色はりつぱな花をさかせるにしてもひどくだしぬけであり、いくら鶯にさへづらせるにしてからがあまりにくどいではないか。畜生め。

〔一〕　〔二〕

手種桃李非無主。
野老牆低還是家。
恰似春風相欺得。
夜來吹折數枝花。

【題義】春風の家宅侵入を責む。

【詩意】自分が手づから種ゑた桃や李は主がないわけでない、自分といふ主がある。このおやぢの家の牆は低いにはひくいがそれでも自分の家にちがひない。それになんだ、ゆうべからかけて二三本花の枝が吹き折られてしまつた、まるで春風めに侮辱されたやうなもんだ。

手づから種うるの桃李、主無きに非ず、
野老牆低きも還是れ家なり。
恰も似たり春風の相欺り得たるに、
夜來吹き折る數枝の花。

【字解】〔一〕非無主　主人あるをいふ、主人は自己。〔二〕家　吾が家にして他の闖入を許さざるものなるをいふ。〔三〕欺得　欺は侮るをいふ、俗語、欺得にてこちらがあなどられるをいふ。

〔三〕

熟知茅齋絶低小。
江上燕子故來頻。
銜泥點汙琴書內。
更接飛蟲打著人。

茅齋の絶だ低小なるを熟知して、
江上の燕子　故に來ること頻りなり。
泥を銜みて點汙す琴書の內、
更に飛蟲を接して人を打著す。

【字解】〔一〕熟知　よく知つて、「知」の主辭は「燕子」。〔二〕茅齋　かやぶきの書齋。〔三〕絶　甚だ。〔四〕燕子　つばめ。〔五〕故　故意。〔六〕點汙　ぼちぼちけがす。〔七〕琴書　こと、ほん。〔八〕接　ひきつれてくる。〔九〕打著　かほなどにぶつつかる。

【題義】燕をののしる。

【詩意】江べりのつばめは自分の茅ぶきの書齋が非常に低く小さいのをよく知つてゐてわざとしきりにやつてくる。さうして泥をくはへてきては琴や書物のあたりをよごしたり、そのうへ飛びまはる蟲までひきつれてきて人にぶつつからせてゐる。

〔四〕

二月已破三月來。
漸老逢春能幾回。
莫思身外無窮事。
且盡生前有限杯。

二月已に破れて三月來る、
漸老春に逢ふ能く幾回ぞ。
思ふ莫れ身外無窮の事、
且つ盡せ生前有限の杯を。

【題義】酒飲むべきをいふ。

【詩意】二月も終りかけ三月がくる。老いゆく我が身は春に逢ふとしてもいくたびあへるものか。だから一身外のはてしない事をかんがへるな、それよりまあまあいのちのあるうちに飲めるだけの酒をのみつくせ。

【字解】〔一〕破　殘りすくなになる。〔二〕漸老　しだいに老いかかる身。〔三〕有限杯　いくらのんだところがその量に限りのある酒。

〔五〕

腸斷江春欲盡頭。
杖藜徐歩立芳洲。
顛狂柳絮隨風舞。
輕薄桃花逐水流。

【題義】桃柳をののしる。

【詩意】江の春がなくなりかけたころには春のゆくのをかなしんで腸がちぎれるやうだ。それであかざのつゑをついてそろそろあるいて花さく中洲に立つてながめる。するとみだれくるうた柳のはなは風のまにまに舞ひちり、うはきらしい桃の花は水の流れをおうて流れていつてしまふ。

〔六〕

懶慢無堪不出村。
呼兒日在掩柴門。
蒼苔濁酒林中靜。

【題義】無能獨酌の意をいふ。

【詩意】自分はぶしやうで、ものごとに堪へる才能の無い男だから村からそとへはいでず、毎日家にばかりゐてこどもを呼んで柴門をとざさせてゐる。蒼苔のしいた庭に濁酒をのんでゐると林の中はいと靜であり、碧水をわたつて春風が吹いて遠い野はらの方はくらくみえてゐる。

〔七〕

糝徑楊花鋪白氈。
點溪荷葉疊青錢。
筍根雉子無人見。
沙上鳧雛傍母眠。

【題義】春暮の景を列擧せり。

【詩意】こみちに亂雜に散つてゐる楊の花は白い毛氈をしいた樣であり、溪がはにぽちぽち浮き出し

〔五〕

腸は斷ゆ江春盡きんと欲する頭、
藜を杖き徐歩して芳洲に立つ。
顛狂の柳絮は風に隨つて舞ひ、
輕薄の桃花は水を逐うて流る。

【字解】〔一〕欲盡頭　欲ㇾ盡際といはんがごとし。〔二〕藜　あかざ。〔三〕芳洲　くさばなの咲いてゐる中洲。〔四〕顛狂　みだれくるふ。〔五〕柳絮　やまぎの花。〔六〕輕薄　うはき、操守なき。

〔六〕

懶慢堪ふる無く村を出でず、
兒を呼び日に在りて柴門を掩はしむ。
蒼苔濁酒、林中靜に、

【字解】〔一〕懶慢　ぶしやう。〔二〕無堪　事物に處するに堪ふるものなし、不才無能をいふ。〔三〕日在　日日在ㇾ家の意、日在或は自在に作る、自在は「きままに」の意。〔四〕蒼苔一句　宅中のさま。〔五〕碧水一句　隔江の遠野のさま。〔六〕昏　蓋し野潤煙光薄の煙光薄の義ならん。

〔五〕碧水春風野外昏。

【題義】無能獨酌の意をいふ。

【詩意】自分はぶしやうで、ものごとに堪へる才能の無い男だから村からそとへはいでず、毎日家にばかりゐてこどもを呼んで柴門をとざさせてゐる。蒼苔のしいた庭に濁酒をのんでゐると林の中はいと靜であり、碧水をわたつて春風が吹いて遠い野はらの方はくらくみえてゐる。

〔七〕

糝徑に楊花は白氈を鋪き、
點々たる溪に荷葉は青錢を疊む。
筍根の雉子は人の見る無く、
沙上の鳧雛は母に傍うて眠る。

【字解】〔一〕糝　雜ばるなり、亂雜に散つてゐること。〔二〕點　ぽちぽちとあること。〔三〕疊　荷葉に高低あり、故にかさなりて見ゆるをいふ。〔四〕筍　たけのこ。〔五〕雉子　きじの子。〔六〕鳧雛　こがも。

た荷の葉は青色の銅錢をたたみあげた様だ。たけのこの根もとに雉がゐるが人からは見えぬ様にしてをるし、かはらの沙のうへにはこがもが母鳥によりそうてねむつてゐる。

〔八〕

舍西柔桑葉可拈。
江畔細麥復纖纖。
人生幾何春已夏。
不放香醪如蜜甜。

〔八〕

舍西の柔桑、葉拈る可し、
江畔の細麥復纖纖たり。
人生幾何ぞ、春已に夏なり、
放たず香醪、蜜の如く甜きを。

【題義】時過ぎ易きにより酒をのむをいふ。

【詩意】家の西の方のはたけの桑は葉が柔かであるからつみとつてもよろしい。かはべりのはたけの麥の穗もまたほそぼそとでてきてをる。こんなに春がもはや夏にかはりかけてゐるのをみれば人生はどれだけの時間あるのか、いくらもあるまい。だから自分は蜜のやうにあまいにごりさけを手から放さずのんでゐる。

【字解】〔一〕拈　つまみとる。〔二〕細麥　麥の穗のほそきをいふ。〔三〕纖纖　「細」の字の形容、ほそぼそ。〔四〕放　手からはなす。〔五〕香醪　かんばしきにごりさけ。〔六〕甜　あまし。

〔九〕

隔戶楊柳弱嫋嫋。
恰似十五女兒腰。
誰謂朝來不作意。
狂風挽斷最長條。

〔九〕

戶を隔つる楊柳弱くして嫋嫋たり、
恰も似たり十五女兒の腰に。
誰か謂ふ朝來、意を作さずと、
狂風挽き斷つ最長條。

【題義】風、柳條を折りしにより風に向ひて戲言をなす。

【詩意】戸外の楊柳はかよわくなよなよとして枝をなびかせてゐる。その姿はちやうど十五歳ばかりのをんなの兒の腰つきに似てゐる。けさからかけて風もヒョンな意をおこしたものか、くるひだした風がいちばん長いえだをひきをつてしまつた。

【字解】〔一〕嫋嫋　たをやか、なよなよ。〔二〕誰謂　だれがしかいふか、さはいはせじとの意。〔三〕作意　狂風が意を作すなり、意を作すとは女兒の腰を愛するの念を興すなり、舊解は取らず。〔四〕挽斷　ひつぱりてちぎる。〔五〕最長條　いちばんながい枝。

客至　【原注】喜崔明府相過。

客至る　【原注】崔明府が相過るを喜ぶ。

舍南舍北皆春水。
但見羣鷗日日來。

舍南舍北皆春水、
但見る羣鷗の日日來るを。

【字解】〔一〕崔明府　某縣の縣令崔某なり、作者の舅氏なりとの說あれどいかがにや。〔二〕花徑　花

花徑不曾緣客掃。
蓬門今始爲君開。
盤餐市遠無兼味。
樽酒家貧只舊醅。
肯與隣翁相對飲。
隔籬呼取盡餘杯。

花徑曾て客に緣りて掃はず、
蓬門今始めて君が爲に開く。
盤餐、市遠くして兼味無く、
樽酒、家貧にして只舊醅あり。
肯て隣翁と相對して飲まむや、
籬を隔てて呼取して餘杯を盡さしむ。

【題義】崔明府がたづねてくれたことを喜んで作つた詩。

【詩意】吾が家は南も北もみな春の水で、たくさんの「かもめ」が毎日やつてくるのをみるばかりである。花の散りしくこみちもお客があるために掃除したことはないのであるが、けふはめづらしくよもぎふの門を君のためなればこそ開いたのである。ここは市場が遠いから皿の食物に幾種類もの御馳走はないし、家が貧しいから樽の酒もてづくりのふるものだ。われわればかりよりもとなりのおぢいさんもなかまにしてさしむかへで飲むおつもりはありませぬか。かくいうて籬越しにおぢいさんを呼んでのこりの酒杯をのみほさせる。

のちりしくこみち。【三】蓬門　よもぎのしげれる門。【四】盤餐　大皿の食物。【五】兼味　いく種類ものごちそう。【六】舊醅　ふるくかちつくりこんだにごりさけ。【七】呼取　翁を呼ぶをいふ、取の字は意輕し。

遣意二首

意を遣る　二首

囀枝黃鳥近。泛渚白鷗輕。
一逕野花落。孤村春水生。
衰年催釀黍。細雨更移橙。
漸喜交游絕。幽居不用名。

枝に囀りて黃鳥近く、渚に泛びて白鷗輕し。
一逕、野花落ち、孤村、春水生ず。
衰年、黍を釀すを催す、細雨更に橙を移す。
漸く喜ぶ交游の絕ゆるを、幽居、名を用ひず。

【字解】【一】催　せきたてること。【二】釀黍　きびを用ひて酒をかもす。【三】移橙　だいだいをうつしかへてうゑる。【四】交游　人との交際。【五】名　他人から名譽を得ること、名譽。

【題義】おもひをやる。うさばらしに作つた詩。

【詩意】黃鳥は近く枝にさへづり、白鷗は輕く渚に泛んでゐる。一すぢのこみちに自然にさいた花が落ちちり、さびしい村には春の水がふえてきた。自分は老衰になりかけてせつせと黍で酒をつくりこみ、こさめのふるときには橙の木など移植する。こんなことをしてくらすので、だんだん友だちの交際がなくなるのをうれしくおもふ樣になつてゐる。このわびずまひに名譽などはいらぬものだ。

〔一〕

簷影微微落。津流脉脉斜。

〔二〕

簷影、微微として落ち、津流、脉脉として斜なり。

野船明紐火。宿鷺起圓沙。
雲掩初弦月。香傳小樹花。
隣人有美酒。稚子夜能賒。

野船、細火明かに、宿鷺、圓沙に起つ。
雲は掩ふ初弦の月、香は傳はる小樹の花。
隣人、美酒有り、稚子夜能く賒る。

【字解】〔一〕落　地上によこたはるをいふ。〔二〕津流　浣花の溪流をさす。〔三〕脉脉　一すぢ一すぢに。〔四〕細火　小火。〔五〕起　起立してゐること。〔六〕圓沙　まろき沙はら。〔七〕賒　かけで買ふ。

【題義】草堂春夜のさまをのぶ。

【詩意】日がくれかかるので簷の影がすこしづつすこしづつ地上に落ちる。わたりばの水流は一すぢ一すぢに斜にながれてゐる。民船には小さい火があかるくともつてをり、とまつてゐる鷺は圓形の沙はらに起つたままでをる。みか月は雲におほはれ、ちさい樹にさいた花からくらがりの香がつたはつてくる。となりにはうまい酒をもつてゐるものがをるので、こどもが夜ではあるがいつてとつてきてくれる。

杜少陵詩集　卷十

漫成二首

野日荒荒白。春流泯泯清。
渚蒲隨地有。村徑逐門成。
只作披衣慣。常從漉酒生。
眼邊無俗物。多病也身輕。

漫成　二首

野日、荒荒として白く、春流、泯泯として清し。
渚蒲、地に隨つて有り、村徑、門を逐うて成る。
只披衣に慣るるを作す、常に漉酒に從りて生く。
眼邊、俗物無し、多病なるも也身輕し。

【字解】〔一〕野日　田野を照す太陽。〔二〕荒荒　すこしく不明なる貌。〔三〕春流　春の川のながれ。〔四〕泯泯　ささにごりの貌。〔五〕渚蒲　みぎはにはえた「がま」。〔六〕隨地　どこにでも。〔七〕逐門　門の形勢につれての義。〔八〕披衣　披は手にてかきわけて著ること、これは人を訪はんとてなり、陶淵明が詩の相思則披衣、言笑無二已時一の意を用ふ。〔九〕漉酒　淵明は頭巾にてにごりさけを漉して、またその頭巾をかぶりしといふ、是は同志にして酒を愛するものをいふならん。〔一〇〕俗物　俗人をいふ。〔一一〕也　「亦」に同じ、俗語なり。〔一二〕身輕　飄然と家からでかけることをいへり。

【題義】そぞろにふとできあがりたる詩なり。上元二年春成都浣花溪の草堂に居りしときの作。

【詩意】野らをてらす太陽はうすぼんやりと白く、春の水流はささにごりしながら清らかである。みぎはの蒲は到る處に有るし、門のある所のままに村のこみちができてをる。自分は陶淵明の樣に頭巾で酒をこしてくれるものがあるおかげで生きてをるのであり、ただそんな人のところへ著物をはおつてゆくになれてゐるのである。そこでは眼のそばにすこしも俗人がをらぬ、だから多病な自分も身輕にそこへたづねゆく次第である。

〔二〕

江皐已仲春。花下復清晨。
仰面貪看鳥。回頭錯應人。
讀書難字過。對酒滿壺頻。
近識峨嵋老。知余懶是眞。

【字解】〔一〕江皐　皐は水流をおびたる岡、浣花溪のあたりをいふ。〔二〕仲春　二月。〔三〕清晨　はれたあさげ。〔四〕仰面　うへをむく。〔五〕貪　むさぼる、熱中すること。〔六〕回頭　ふりむく。〔七〕錯　まちがふ。〔八〕應　返答する、挨拶する。〔九〕難字過　難解の字にあへばそれをやりすごす、あまりに詮索せぬこと、異說は皆之を取らず。〔一〇〕滿壺頻　頻とは之を傾むくることしきりなるをいふ。〔一一〕近識　近來しりあひになる。〔一二〕峨嵋老　「原注」に東山隱者とあり、峨嵋山に隱れてゐる老人とみゆ。〔一三〕知　老人が知るなり。〔一四〕懶是眞　ぶしやうがもちまへ。

【詩意】江ぞひの岡ももはや二月になり、花の樹蔭も清きあしたである。あまり熱心に空とぶ鳥をみてゐたので、人からものを言ひかけられてとんちんかんの返事をしてゐる。書物を讀みかけるとむつかしい字はほつておくし、酒にむかふときはなみなみあふれた壺もしきりと傾けつくす。近來峨嵋山の老隱士をみしつたが、その男は、わしはぶしやうなところがもちまへなのだといふことを知つてくれた。

春夜喜雨

春夜雨を喜ぶ

好雨知時節。當春乃發生。
隨風潛入夜。潤物細無聲。
野徑雲俱黑。江船火獨明。
曉看紅濕處。花重錦官城。

好雨、時節を知り、春に當つて乃ち發生す。
風に隨つて潛に夜に入り、物を潤して細にして聲無し。
野徑雲俱に黑く、江船火獨り明なり。
曉に紅濕ふ處を看れば、花は重し錦官城。

【字解】〔一〕知時節　春になれることを知りてふる。〔二〕潛　音をたてぬこと。〔三〕雲俱黑　雲黑く雨も亦くろし。〔四〕火　船夫のたく火。〔五〕紅　花のくれなゐ。〔六〕重　雨にぬれるゆゑにしほたれておもさうにみえる。〔七〕錦官城　成都の城をいふ。

【題義】春の夜、雨のふりしことをよろこびて作る。上元元年春の作なるべし。

【詩意】よい雨がさすがにふるべき時節だと心得がほに春にあたつてふりだした。その雨は風のまにまに音をもたてずにそのまま夜までふりつづき、さまざまの物をしめらせはするが、こまかなきりさめですこしもふるこゑはせぬ。雨の色は野らのこみちに雲とともに黒ずんでみえるが、江にういてゐる船のあたりは、その焚き火だけがあかるくみえる。曉にもなつて紅の色のしめつてゐるあたりいづくぞとながめると、それは錦官城で花がしほたれてゐるところなのである。

春水

三月桃花浪。江流復舊痕。
朝來沒沙尾。碧色動柴門。
接縷垂芳餌。連筒灌小園。
已添無數鳥。爭浴故相喧。

【字解】〔一〕桃花浪　桃花のさくとき出る水のなみ。〔二〕復舊痕　水かさがふえて舊水位のところまでくる。〔三〕沙尾　沙洲のすゑ。〔四〕碧色　江水の色。〔五〕柴門　自家の門。〔六〕接縷　絲のすぢをつなぐ、釣絲にするなり。〔七〕芳餌　いいにほひの餌。〔八〕連筒　かけひの竹つつをつなぐ、（釣車の竹筒なりとの說あれどもそれにては灌小園の語とにあはぬ）。〔九〕園　はたけ。〔一〇〕無數鳥　鳥は「さぎ」なるべし。〔一一〕故　ことさらに、わざと。

【題義】春の出水のことをのべたり。前詩と同年の作。

【詩意】三月桃花水の浪がおこり、江の流れももとの水痕のところまで水かさがふえてきた。朝からかけて中洲の沙のしつぽはかくれて、碧の色が我家の柴門のあたりに動いてきた。それで自分は絲すぢをつないで釣竿で餌を垂れたり、竹筒をなん本もつらねて江水を引いて小さなはたけに水をそそぐ。また早くもかぞへきれぬほどたくさんの水鳥がやつてきて、爭うて浴してわざとがやがやさわぎたてゐる。

江亭

坦腹江亭暖。長吟野望時。
水流心不競。雲在意俱遲。
寂寂春將晚。欣欣物自私。
故林歸未得。排悶强裁詩。

江亭の暖なるに坦腹して、長吟す野望の時。
水流れて心競はず、雲在り意俱に遲し。
寂寂春將に晚れむとす、欣欣物自ら私す。
故林歸る未だ得ず、悶を排し强ひて詩を裁す。

【字解】〔一〕坦腹　腹を平にして仰ぎ臥す。〔二〕江亭　江のほとりの亭、江は錦江、浣花の江亭をいふ。〔三〕長吟　ながくこゑを引いて吟ずる。（この詩を吟するをいふ。）〔四〕野望　田野をながめる。〔五〕不競　心の流るるにまかせて之と爭はず。〔六〕雲在　雲がひとりでに存在してゐる。〔七〕遲　おそし、ゆつたりとしてゐる。〔八〕物自私　私とは自己の生を遂げつつあるをいふ。

【九】故林　故郷の園林。【一〇】歸未得　未レ得レ歸に同じ。【一一】排悶　心中のもだえをおしのける。【一二】裁　つくること。

【題義】浣花草堂の江邊の亭の春の心もちをのべたり。前詩と同年の作。

【詩意】江べりの亭のあたたかなところに仰臥して、長吟しながら野らをながめるとき、水はかつて に流れてゐるが我が心は之と爭ふつもりもなく、雲はひとりでに横はつてゐるが我がこころはそれと ともにゆつたりとしてゐる。しづかに春はくれかかつてゐる。どの物をみても彼等はうれしさうに自 己の生活をとげつつある。このとき自分はまだ故郷の林へかへることができぬ。それで心中のもだえ をおしのけんがためにむりにこの詩をつくるのである。

早起

春來常早起。幽事頗相關。
帖石防隤岸。開林出遠山。
一丘藏曲折。緩步有躋攀。
童僕來城市。瓶中得酒還。

早起

春來常に早く起く、幽事頗る相關す。
石を帖して隤岸を防ぎ、林を開きて遠山を出す。
一丘、曲折を藏す、緩步、躋攀有り。
童僕、城市より來る、瓶中酒を得て還る。

【字解】【一】幽事　しづかなしごと、次の帖石・開林等のことをさす。【二】相關　そのことにかかりあふ。【三】帖石　石をたたみあげる。【四】隤岸　江岸のくづれること。【五】開林　しげつた林をきりひらく、枝などすかすなり。【六】出　あらはれいでしむること。【七】一丘　自己の園丘をいふ。【八】曲折　路のをれまがること。【九】緩步　ゆつくりあるく。【一〇】躋攀　よぢのぼること。【一一】童僕　しもべ。【一二】來城市　成都のまちからもどりくる。

【題義】庭仕事のため早く起きしことをのぶ。前詩と同年の作。

【詩意】春からこのかた自分はいつも早く起きる。それは庭仕事にかかりあふためである。すなはち 石をたたんで江岸のくづれるのを防いだり、林の枝をすかして遠方の山を見える樣にあらはしだす。 ただ一つの丘であるが折れ曲つた路があり、ゆつくりあるくとよぢのぼつたりするところもある。ち やうど城の方からしもべがもどつた、彼は瓶のなかに酒を得てかへつてきたのである。（それをのん で庭のさまでもながめよう。）

落日

落日在簾鉤。溪邊春事幽。
芳菲緣岸圃。樵爨倚灘舟。
啅雀爭枝墜。飛蟲滿院遊。
濁醪誰造汝。一酌散千愁。

落日

落日、簾鉤に在り、溪邊、春事幽なり。
芳菲なり岸に緣る圃、樵爨す灘に倚る舟。
啅雀、枝を爭うて墜ち、飛蟲、院に滿ちて遊ぶ。
濁醪誰か汝を造れる、一酌、千愁を散せしむ。

【字解】【一】簾鉤　すだれを卷きあげてとめておくかぎ。【二】溪邊　溪は浣花溪。【三】春事幽　春事とは下の四句のこと、幽

は幽靜。【四】芳菲　花がかんばしくにほふ。【五】緣岸圃　江岸によりそうたはたけ。【六】樵蘇　しばきをかりてごはんをたく。【七】倚灘舟　はやせによつてゐる舟。【八】嘻　とりのさわぐこゑのさま。【九】爭枝　多くのものが一つの枝にとまらんとする。【一〇】院　おくには。【一一】醪　にごりさけ。【一二】汝　濁醪をさす。

【題義】草堂の春の夕ぐれのさまをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】すだれの鈎に夕日のひかりがさしてきて、溪邊の春げしきは幽靜である。すなはち江岸にそうたはたけには草花がにほひ、はやせによつて泊つてゐる舟では柴刈りしてごはんをたいてゐる。庭先きでは同じ枝にとまらうとして多くの雀ががやがやいひながら墜ち、奥庭ぢう蟲がとんで遊んでゐる。之をながめて自分は酒をのむ。いつたいにごりさけはだれがこしらへたものか、感心な物をこしらへたものではある。それを一どくんでのめば千萬の心配ごとがみなちりうせるではないか。

可惜　惜む可し

花飛有底急。老去願春遲。
花は飛ぶこと底の急か有る、老い去つては春の遲からむ！

可惜歡娛地。都非少壯時。
惜む可し歡娛の地、都て少壯の時に非ず。

寬心應是酒。遣興莫過詩。
心を寬うするは應に是れ酒なるべし、興を遣るは詩に過ぎるは莫し。

此意陶潛解。吾生後汝期。
此の意、陶潛解す、吾が生汝が期に後る。

【字解】【一】底　何に同じ、俗語なり。【二】春遲　遲とは早くすぎぬことをいふ。【三】歡娛地　うれしくたのしむべき場所、卽ち春をいふ。【四】非少壯時　老年なるをいふ。【五】寬心　心をくつろげる。【六】此意　詩酒によりて自己を慰むることをさす。【七】解　さとる。【八】吾生　自己の生れしとき。【九】汝期　汝は陶潛をさす、期は生存せし時期。

【題義】老年春にあへることをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】いかなる急用があつて花ははやく飛び散るのか。老の身にとつてはなるたけ春がゆつくりしてゐてくれるのをのぞんでゐるのだ。本來ならばおもしろをかしくすごすべき處であるが、少壯の時でなく老衰の時であるのが惜しいことだ。今の身では心をくつろげるものとては酒だらうし、興をやるには詩にこしたものはない。このこころもちはむかし陶淵明が知つてゐた。自分の生れ樣が彼よりおそまきなことは殘念なことである。

獨酌　獨り酌む

步屧深林晚。開樽獨酌遲。
步屧、深林晚る、樽を開きて獨り酌むこと遲し。

仰蜂粘落絮。行蟻上枯梨。
仰蜂、落絮に粘し、行蟻、枯梨に上る。

薄劣慙眞隱。幽偏得自怡。
薄劣、眞隱に慙づ、幽偏、自ら怡しむことを得。

本無軒冕意。不是傲當時。
本軒冕の意無し、是れ當時に傲るならず。

【字解】【一】歩屧　草履なり、草履をはきて散歩するをいふ。【二】仰蜂　うへをむいてゆく「はち」。【三】粘　ねばりつく。【四】落絮　おちくる柳の花、絮の字或は蘂に作る。【五】行蟻　行列をなす「あり」。【六】枯梨　梨の枯木。【七】薄劣　才徳なきこと。【八】眞隱　まことの隱遁者。【九】幽僻　住地の幽靜にしてかたよりたること。【一〇】自怡　他人にかかはらず自己のみをたのします。【一一】軒冕意　仕宦富貴の意をいふ、軒は馬車、冕は「かんむり」、貴人の用ふるものなり。【一二】傲當時　時世に對してゐばる、隱者は世俗を卑しとし自己を高しとする。

【題義】春一人にて酒をのむことをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】草履ばきでぶらぶらしてゐるうちに深い林も夕ぐれになり、酒樽を開いてひとりでゆつくりのむ。みれば蜂がうはむきになつてゆくと柳の花が落ちてきてそれにねばりつき、蟻は行列をなして梨の枯木にはひのぼつてゐる。自分ごとき才徳なくつまらぬものは眞の隱遁者に對してはづかしくおもふのであり、ただこんな幽靜なかたよつた場所を得て自分ひとりでたのしめるといふだけのことである。自分には本來高位高官にならうなどの意は無いので、眞の隱者のやうに當世に對してゐばるなどといふわけのものではない。（自分の無能がすなはち隱者らしくさせてゐるだけのことだ。）

徐歩

整履歩青蕪。荒庭日欲晡。

履を整へて青蕪に歩す、荒庭日晡ならむと欲す。

芹泥隨燕觜。蘂粉上蜂鬚。

芹泥、燕觜に隨ひ、蘂粉、蜂鬚に上る。

把酒從衣濕。吟詩信杖扶。

酒を把つて衣の濕ふに從せ、詩を吟じて杖の扶くるに信す。

敢論才見忌。實有醉如愚。

敢て才の忌まるるを論せむや、實に醉うて愚の如くなる有り。

【字解】【一】徐歩　そぞろあるき。【二】整履　はきものをきちんとはく。【三】青蕪　青いくさはら。【四】荒庭　くさだらけのにはに。【五】晡　たそがれ。【六】芹泥「せり」のどろ。【七】隨燕觜　つばめのくちばしにくはへらるるをいふ。【八】蘂粉　花粉をいふ、蘂粉一に花蘂に作る。【九】鬚　ひげ。【一〇】從、信　みな「まかす」義なり。【一一】衣濕　さけをこぼすためにうるほす。【一二】杖扶　つゑにたすけらるること。

【題義】自宅の園にぶらつきしことをのぶ。上元二年春の作ならん。

【詩意】はきものをきちんとはいて青い草はらにぶらつくと庭ははや日がくれかけてゐる。さうして燕のくちばしのまにまに芹の泥はくはへてゆかれ、蜜をすふ蜂のひげには花蘂の粉がふりかかる。こんな様子をみながら自分は酒杯を手にとつて衣がぬれてもかまはず、詩を吟じながら杖のたすけるまにまにあるく。自分の才が他人から忌まれてこんな境遇に居るのだなどとは決していふまい。ただただ醉うて愚人の如くなつてゐるといふのが實際である。

寒食

寒食江村路。風花高下飛。
汀煙輕冉冉。竹日淨暉暉。
田父要皆去。隣家問不違。
地偏相識盡。雞犬亦忘歸。

【字解】【一】寒食　冬至節のうち一百五・六・七日を寒食といふ。【二】江村　浣花村。風花　風をうけたる花びら。【三】汀煙　みぎはのけむり。【四】冉冉　次第に生ずるさま。【五】竹日　竹林をてらす太陽。【六】暉暉　かがやくさま。【七】田父　ひやくしやう。【八】要　こちらを招きむかへる。【九】去　こちらが先方へでかけてゆく。【一〇】問　問遣なり、こちらの樣子ききに品物をおくつてくれること。【一一】不違　贈つてくれた意に從ひ之を受くるをいふ。【一二】偏　かたよる。【一三】相識盡　盡相識の意、みんなしりあふ。【一四】忘歸　他家にゆくも自家の樣におもひかへることをわすれる。歸を一に機に作る、忘レ機とは世間のからくりのこころをもたぬをいふ。

【題義】寒食の節のさまをのぶ。上元二年浣花溪にての作。

【詩意】寒食の節の江ぞひの村の路では、風に吹かるる花びらが高くひくく飛びかはす。みぎはの煙はかろらかに次第にのぼり、竹林を照らす太陽はきよらかにかがやきわたる。たとへ農夫でもきてくれといふものがあれば自分はみなそこへでかけてゆく、となりどうしでおくりものをもつてきてくれればありがたくそれをうける。地がかたゐなかであるからみんなしりあひのなかで、鷄や犬までもよそのうちへでかけていつてもどるのを忘れてゐる樣なありさまである。

石鏡

蜀王將此鏡。送レ死置空山。
冥寞憐香骨。提攜近玉顏。
衆妃無復嘆。千騎亦虛還。
獨有傷心石。埋レ輪月宇間。

【字解】【一】石鏡　成都の北角に武擔といふ塚あり、塚上に厚五寸、徑五尺の石あり、瑩徹にして鏡の如し、是即ち此詩の詠ずる所のものなり。傳によるに武都山に大丈夫あり化して女子となる美にして豔なり、蓋し山の精なり、蜀王之を納れて妃となす、いくばくもなく妃死す、王、五丁をつかはし武都にゆき土を擔ひ塚を作らしむ、廣さ數畝、高さ七丈、石鏡を以て其の門に表す、即ち武擔の石鏡なりと。【二】送死　死せる妃を葬送するなり。【三】冥寞　死のさまをいふ。【四】香骨　美しき妃の骨。【五】提攜　この石鏡をもつてゆくこと。【六】近玉顏　死者の肉體のそばへおいたこと。【七】衆妃　他の多くの王妃たち。【八】無復嘆　これは死者を送りて哭し了るをいふ。【九】千騎　葬送の行列にたてる多くの騎兵。【一〇】傷心石　看る人をしてその心をいたましむる石、即ち石鏡をさしていふ。【一一】埋輪　輪とは石鏡の圓形をさす。【一二】月宇　月の世界、石鏡の圓きを月にみたて、その横はる場所を月の世界にみたてて言を設けたり。

【題義】成都の石鏡の古迹を見てよめり。此篇と次の「琴臺」の詩は並に上元二年の作。

【詩意】むかし蜀の王はこの石鏡をもて、死んだ妃を葬送してそれをだれも居らぬ山に置いた。美しい妃が死んでさびしからうとおもうて、この石のかがみをもっていつてうつくしい顔のそばへ立ててやつた。葬儀はすんで送りに來た多くの妃等も哭禮を了つてもはやなげきのこゝろをやめ、多くの騎馬の兵もいたづらに墓のところからもどつてしまつた。さうしてただこの人のあはれを催させる石だけが月の世界ともいふべきこの山間にその圓形を埋めてをるのである。

琴臺

茂陵多病後。尚愛卓文君。
酒肆人間世。琴臺日暮雲。
野花留寶靨。蔓草見羅裙。
歸鳳求凰意。寥寥不復聞。

【字解】【一】琴臺　成都城外の浣花溪に近きところにあり。漢の司馬相如の遺迹なり、相如未だ榮達せざりしとき家貧なり、卓王孫といへる富人の女文君のやもめなるを琴歌にことよせていどみけるに、文君夜にげて相如がもとにゆく、つひに臨邛といふ處にいたり、酒肆をはじめ文君は壚（へつつい）にて酒を賣り、相如はそのそばにて食器などをあらひ居たり。相如はのち出世して高官となり、また多病の故を以て官をやめ茂陵といふところに居れり。【二】茂陵　漢の武帝の陵の名、相如そこに居りしを以て相如をさしていへり。【三】卓文君　相如が妻。【四】酒肆　さかや。【五】人間世　相如等の在世中をいふ、此句過去をいふ。【六】琴臺日暮雲　此句現在をいふ、仇氏之をも過去のこととせるは從ひがたし。【七】野花　臺のあたりの野生の花。【八】留　いまもむかしのさまをのこす。【九】寶靨　靨はエクボのことなれどもここは唐時の慣用により花鈿（頰にあてる花かざし）の義とす。【一〇】蔓草　はびこれる草、これは色にていふ。【一一】羅裙　うすぎぬのはかま、文君のつけしもの。【一二】歸鳳求凰　相如が文君をいどみたりといへる琴歌に、鳳兮鳳兮歸二故鄉一、遨遊二四海一求二其凰一とあり、鳳（雄）が四海にあそんで凰（雌）をもとめてゐるがあてもないから故鄉へかへらう、といへるなり、詩は歌辭を切りとりて用ひたり。【一三】寥寥　さびしき貌。

【題義】琴臺について懷古の情をのべたる詩なり。

【詩意】司馬相如は多病の後までもまだ卓文君を愛してゐた。そのわかいころには俗界で夫婦ともかせぎで酒肆までひらいたのであるが、今やこの琴臺にきてみるとただ日暮の雲がさびしくよこたはつてをる。野生の花をみると、それはありしむかしの卓文君の花かざしがのこつてをるかの樣であり、はびこれる草の色には文君のうすもののはかまの色がうかがはれる。しかし相如がうたうた歸鳳求凰のこころもちはたえてふたたびきくことはできぬ。

春水生二絶

二月六夜春水生。　春水生ずず　二絶

【字解】【一】春水生　生とはわ

門前小灘渾欲平。　門前の小灘渾て平ならむと欲す。
鸕鷀鸂鶒莫漫喜。　鸕鷀鸂鶒、漫りに喜ぶこと莫れ、
吾與汝曹俱眼明。　吾、汝が曹と俱に眼明なり。

なんぢら。【七】眼明　眼力分明にしてよく之を知るをいふ。

【題義】春のでみづがしたことについてのぶ。上元二年春の作。

【詩意】二月六日の夜に春のでみづがして、わがやの門の前の小さいはやせはすつかり平にならんばかりになつた。うだのをしどりだのにいふが、おまへたちはこの水のましたのをみてやたらにうれしがるなよ。吾吾もおまへたちとおなじくはつきりと水がでてきて喜ぶべきことをこころへてゐるのである。

〔二〕

一夜水高二尺强。　一夜水高し二尺强、
數日不可更禁當。　數日更に禁當す可からざらむ。
南市津頭有船賣。　南市津頭に船の賣る有り、

【字解】【一】二尺强　二尺あまり。【二】禁當　俗語「こらへる」、不可禁當とは「とてもたまらぬであらう」の義。【三】有船賣　賣らるべき船あること。【四】買船　船をかふこと、船を買はんとするは草堂の

ちたにわきでてきたことをいふ。【二】灘　はやせ。渾　すべて。【三】鸕鷀　「う」のとり。【四】鸂鶒　をしどりの類。【五】莫漫喜　やたらによろこぶな。【六】汝曹

無錢卽買繫籬旁。　錢の卽ち買ひて籬旁に繫ぐべき無し。

沒せんことを恐るるなりとの仇氏說は恐らくは當らず、これ舟遊を試みんと欲するのみ、作者水を恐るる念なきこと次の「短述」かみても知るべし。

【詩意】ひとばんのうちに水かさが二尺あまりたかくなつた。二三日したらもつとたまらぬくらゐますことであらう。南市のわたりばに賣りものに出てゐる船はあるが、それを買うてわがやのまがきのそばにつないでおけるだけの錢の無いのが遺憾だ。

江上値水如海勢聊短述　江上水の海勢の如くなるに値ひ聊か短述す

爲人性僻耽佳句。　人と爲り性僻にして佳句に耽る、
語不驚人死不休。　語人を驚かさずんば死すとも休せず。
老去詩篇渾漫與。　老い去つて詩篇渾て漫與なり、
春來花鳥莫深愁。　春來花鳥深く愁ふること莫れ。
新添水檻供垂釣。　新に水檻を添へて垂釣に供し、
故著浮槎替入舟。　故より浮槎を著けて入舟に替ふ。

【字解】【一】江上　錦江のほとり。【二】値　であふ。【三】如海勢　さかんなさまをいふ。【四】短述　八句の詩でのべしが故に短といふ。【五】性僻　僻は「かたよる」。【六】漫與　漫如・漫然といふに同じ。とりとめもなくふとつくること。與の字を或は興に作る。【七】花鳥莫深愁　作者に造化の工を奪ふの力あ